
Parallel World in "K-ON!!!" **【捏造第3期】**

pipi_pipipi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そとばん！ Another Parallel World
inn”K-ON!!!” 【捏造第3期】

【Nコード】

N2028T

【作者名】

pipipi_pipipi

【あらすじ】

平沢唯たちが卒業し、新たな新入生を迎え入れた私立桜が丘高校。^{まっもとゆめ}松本夢も、そんな桜が丘高校にやってきた新入生の1人です。彼女は高校に入ったら、軽音部で親友の石塚空^{いしづかくう}と一緒にバンドをやることを夢見ているのですが……。

白髪にコンプレックスをもった少女、松本夢とその親友である不良娘、石塚空の2人がガールズロックバンド”BUTTERFLY KNIFE”に参加し、初ライブに挑むまでの過程を不肖”pipi

#0 プロローグ！ ? (前書き)

今回の語り手：松本夢

桜が丘高校1年生、松本夢。

彼女は親友の石塚空と一緒にロックバンド” BUTTERFLY KNIFE”に参加しています。

今日はその初ライブ。

ライブに挑む直前、夢は他のメンバーといろいろお話をしています。

今回、登場するのはオリジナルキャラのみです。ご了承ください。

#0 プロローグ！ ？

皆さんは”外バン”って言葉をご存じですか？

学校や会社の知り合い以外の人たちで集まってバンドをすることを”外バン”って言うんです。

知らない人に話しかけるのは、最初はちょっと怖いかもしれませんが。

けど、もし素敵な仲間を見つけれれば、それまで自分の知らないかった世界をいっぱい、いっぱい知ることができるんですよ！

そう考えると、なんだかワクワクしてきませんか？

もしよかったら、皆さんも挑戦してみてはいかがですか？

きっとどこかで、あなたとの出会いを楽しみに待っている人がいるはずですよ！

そとばん！ けいおん！アナザーストーリー

全体的に薄暗い客席。

でも、ステージの上はもっと暗くて、次に演奏するバンドさんが黙々と準備をしています。

私たちの出番はこの次。

ステージ上からは、ここ、どんな風に見えるんだろう？

そんなことを考えながら、なんとなく周りを見回してみる私。

あ。楽しそうにおしゃべりしているカップルさんがいますね。それにしても派手だなあ、あのお兄さん。

金髪のドレッドヘアにサングラスをしてて、真っ黒なレザージャケット、さらにシルバーアクセサリーをじゃらじゃら……怖いなあ。

アメリカ人みたい。

あれ？ あのお兄さん、1人かな？

俯うつむきながら、何してるんだろ？

……ああ、音楽聴いてるんだ。

人数は疎まばらですが、みんな、思い思いに時を過ごしているようです。

なんていうのかな……。

ライブハウス全体がガヤガヤしていて、熱気でムンムンしてるっていうか。

そっかあ、私、ここで演奏するんだ。

ちよつと緊張するなあ。

……。

よしっ！ そろそろ戻ろっかな。

#0 プロローグ！？

楽屋に戻った私は早速、チューニングの最終確認をするためにギターを手に取るうとしました。

その時でした。突然、楽屋の扉が勢いよく開いたかと思うと、

「ユーーーーメーーーー！！！」

えっ………！？

ひゃっ…！！

びっくりする間もなく、私はいきなり1人の女の子に抱きつかれました。

しかも、その体は外目から見ても確認できるくらい震えています。

この女の子の事は私、よく知っています。

彼女の名前は石塚いしづか空。

私と同じ高校1年生で担当はリードギター。

そして、私の1番の親友でもあります。

私の親友は顔を挙げたかと思うと、涙目のまま、一気に捲まくし立てるように喋りだしました。

「ど、どどどどどどど、どうしよう！？ すつつつこい緊張してきたよお〜！！ お客さん、知らない奴ばっかだしよお〜！ しかも、なんかガラ悪そうな奴までいるしい〜！ し、しかも、しかもだよっ！ 他のバンドはみ〜んなオリジナルしかやらないらしいんだぜえ〜！？ うう〜……。うちら、半分くらいコピーだけど大丈夫なのかなあ？ なあ〜、ゆ〜〜〜め〜〜〜！」

まるで幼稚園児みたいに私に泣きつく空ちゃん。

う〜ん、どうしよう……。

とりあえず励ましてあげなきゃ、だよな。

私は空ちゃんの頭をなでなでしながら、

「まつ、まあまあ。まずは落ち着こうよ、空ちゃん。大丈夫だよ、え〜っと……。わ、私たち、あんなに集中して練習してたじゃない。それに練習では空ちゃん、難しいソロだってちゃんと弾きこなしてたしっ！ そつ、それとそれと！ 光^{ひかり}さんも言ってたけどコピーとかオリジナルとか、そんな小さなことに気にするより良い演奏することだけに集中すればいいんだよっ！ 私たちの演奏、全力でぶつけようよ！」

と、出来るだけ明るく励ましてあげました。

すると、少しは効果があったのか、空ちゃんの震えも少し小さくなってきました。

よしっ、このまま続けて。

「そ、そうだ！ ほら！ この間の学園祭とかでも、空ちゃん大活躍だったじゃない！」

「……ガクエンサイ？」

……あれ？

私、今、変なこと言ったのかな？

なんか、表情が固まって動かなくなっただけど？

そう思った次の瞬間。

空ちゃんは……泣きだしました。

「うああああああん！！ そうだっ！ 今度こそ！ こ、今度こそギターソロ、ミスらないように今からちゃんと復習しとかないと」

「うるさいっ！ー！！」

ゴツツツツ！

いきなり轟く怒号。

そして、空ちゃんの頭上にいきなり落とされた拳骨の雷。

雷のダメージをもろに受けた空ちゃん、そのままノックアウト…

…。

えーっと……空ちゃん……死んでない、よね？

空ちゃんを殴った犯人はドラム担当の林鈴さんはやしずで通称”リンリン”。

私や空ちゃんより2歳年上の高校3年生です。

リンリン先輩は、とっさの出来事ではかんとしている私には構わず、ノックアウト状態で伸びたままの空ちゃんに向かって説教を始

めました。

「まったく、あんたってやつは……。いつつオラオラな態度で好き勝手やってるくせに、いざ本番直前になってから、そんなにギャーギャー騒ぐ？ はあっ？ アホかつ！ みんなに緊張がうつつちやうでしょうがっ！ 別に緊張するなどは言わないわよ？ けどね、そうやって見苦しく泣き叫ぶのは迷惑だからやめなさい！ ワーワー泣いてたって結果は良くなるんだよ？」

「ううっ……。す、すいません……」

リンリン先輩に謝りながら、よろよると起き上がる空ちゃん。殴られた頭を、ずっとさすりながら。

よっぱど痛かったんだろうな……。でも、リンリン先輩の説教が効いたのか、空ちゃんは一気に大人しくなりました。

その様子を見届けたリンリン先輩は、まだちょっとだけふらふらしている空ちゃんに手を差し伸べました。

その手を取った空ちゃんの手を勢い良く引つ張ったかと思うと、そのまま空ちゃんを自分の右脇に抱えるように抱きよせます。

さらには私まで左脇に抱き抱えました。

そして力強く、だけど優しい口調でこう私たちに語りかけました。

「だ〜いじょうぶつ。大丈夫だつて！ なぁに、ちよつとくらいミスったつて、客は案外、気にしないもんだよ。気にせず堂々としてりゃいいんだつて！ それよか、ミスつて縮こつてる方がカッコ悪いつて。あんたたち、そんな縮こまったミュージシャン、見たこと

ある？」

私と空ちゃんは首を横に振ります。

「でしよ〜？　だ・か・ら！　本番になったら細かいことなんて気にせずに”ガーーーーー！！”ってな感じでいきやいいんだって！　大丈夫だって！　あんたたちなら！　なんてったって、あんたたちは無敵のコンビなんだから。ねっ！」

くすつ。

無敵のコンビかあ……。

照れくさいこと言うなあ、リンリン先輩。

でも、ちよっと嬉しいかも。

にやにや。

それは空ちゃんも同じだったようで、顔が少し赤くなっています。

でも、その分、余裕も出てきたのか、空ちゃんの口から小さな笑みがこぼれていました。

「ふふふつ……そつか……そうつすよね！！　よつつしゃあああ
！　なんかやる気出てきた！！　夢！　うちら2人で観客連中、キラキラ舞いさせてやろうぜい！　そして、モッシュでダイヴでパンクでメタルな感じで観客連中をアツゲアゲのノツリノリに」

「うっさい」

ゴッ！

空ちゃんの頭に再び、雷が落ちました。

「声が大きいんだよ、あんたは。客席に聞こえるでしょうが」

「うう、まだ演奏中だから大丈夫つすよ……たぶん」

文句をたれながら、またちよつとだけ涙目になる空ちゃん。

やれやれ。

相変わらずだなあ、空ちゃんは。

にやにや。

「あらあゝ？ ゆめ、なんか嬉しそうねえ？」

えっ？

リンリン先輩にいきなりマジマジと顔を見つめられて、ドギマギし始める私。

「え、え？ そんなことないですよあゝ？ べ、別に嬉しくなんかは……」

にやにや。

「いやいやいや」

「すっごく良い笑顔してるよ、あんた」

冷静にツツコミを入れる2人。
息、ピツタリ。

「……………」

何も言えないまま、なんか顔が熱く火照ってきました。

あうう〜……………恥ずかしい。

どんな顔してたんだろ？ 私。

「ま、緊張して泣いてるより誰かさんよりは何十倍もマシだけどね
〜。そ、誰かさんよりは」

そう言いながら視線を横に移すリンリン先輩。

その視線の先には……………。

「……………えっ？ ちょ！ その話はもういいじゃないっすかあ！」

そのまま、なんだか幸せそうな口喧嘩が始まりました。
本当に元気だなあ、2人とも。

……………って、あれ？ なんか忘れてる気が……………。

……………。

……あっ！　　すみません！

そういえば、私の紹介がまだでしたね！

えっと、私の名前は松本夢^{まつもとゆめ}。

サイドギター担当で、リンリン先輩や空ちゃんと同じ学校に通う
高校1年生です。

その、紹介が遅れてすみません！　綺麗に忘れてました、あはは
っ……。

#0 プロローグ！？

パンパン。

……ん？

「はいはい、あんたたち。元気なのは結構だけど、もう少し声は落としてちょうだい」

と、元気に騒いでいるリンリン先輩たちに静かな口調で話しかける、また別の女性。

その声はやや低めで、キャリアウーマンのようなクールで真面目な印象を抱かせます。

声の持ち主はボーカル担当の^{いでやまかり}出山光さん。

リンリン先輩より、さらに1つ年上の大学生で私たち、バンドのリーダーでもあります。

光さんは冷静な口調のまま、

「そろそろ時間、近いわよ。みんな、準備は出来てるの？」

と私たちに確認をします。

その問いに対して、リンリン先輩たちは

「私はオツケーよ」

「あたしも大丈夫っす」

あっさりこう答えると、光さんもうんうんと頷きます。

「夢は？」

えっと、私は……。

あっ！ 空ちゃんを励ますのに必死で、すっかり忘れてました！

「すっ………すみません。まだちょっと………その………」

そう言いながら、私は焦ってギターを取り出し、チューニングの最終確認を始めました。

あわわわっ、急がないと！

「まったく………。おしゃべりする暇があるのなら、ちゃんと準備してからに下さい」

うう、怒られた……。

でも、これって私が悪いのかな？

「はっはっは、まったくしょうがないな、夢は。いいか？ 準備するのは余裕を持って終わらなきゃいけな」

「あんたのせいでしょ」

ゴシッ。

空ちゃんの頭に本日、3度目の落雷。

おかげで一瞬、むっとした気持ちがすぐにすっきりしました。
ありがとうございます、リンリン先輩。

それでも、焦ってることに変わりはありません。

ぺん……、ぺん……。

そんな私を尻目に光さんは、

「う〜ん……。まあ、とりあえず大丈夫そうね。じゃ、あとは舞台上での準備だけか。時間が近くなったらまた声をかけるから、今のうちのんびりしておきなさい」

と、他の2人に対して、そう言いました。

その態度は非常に落ち着いたもので、本番を前にしてもいつもと変わらず堂々としているあたりはさすがリーダー、余裕があります。

「オツケー。それじゃ、お言葉に甘えましょうかね。ん〜……。それじゃ、イメトレでもしてよっかな。大丈夫よ、夢。まだ時間はあるんだから、そんな焦んな」

「じゃ、あたしも今のうちにフレーズ確認しとこつと。え〜つと……。準備の邪魔して悪かったな、夢。また後でな！」

2人とも私に一声かけてから、それぞれ本番前の最終確認を始めました。

だけど私は、そんな2人の励ましも耳に入らず、相変わらず焦っていました。

ぺん……、ぺん……。

……ふう。やっと終わった！

と、その時、タイミングを図ったかのように光さんが声をかけてきました。

「夢、終わった？」

「はい、なんとか。えっと、その……遅くなっちゃってすみません……」

私は申し訳ない気持ちを胸に秘めたまま、俯きながら光さんに返事をしました。

そんな私に歩み寄りながら、光さんは、

「いいって、いいって。今のうちなら、まだ少し時間に余裕があるからね。でも、そのせいで逆に夢を緊張させちゃったみたいだし、なんか悪かったわね」

こう言って、私を気遣ってくれました。

ちなみにこの時、光さんはいつの間にか私のすぐ傍にある椅子に座っていました。

「いえ、そんな。次は気をつけます」

「うん。そういえば、夢ってライブするのは今日が初めてだった？」

「あ、いえ。今年の高校の学園祭で、1度だけ出させてもらったことがあります。その時はボーカルでしたけど。だから、ライブ自体は2回目です。さすがにライブハウスでは初めてですけど」

「へえ、夢がボーカルねえ。それは私もぜひ見てみたいわね。楽しかった？」

「はいっ！ とっても！」

「そう。なら今日も大丈夫よ。せっかくこうして音楽をやっているんだから、まずは自分が楽しまなくちゃね。もちろん、将来的にはお客さんのために良い演奏を聴かせようと意識して努力をすることも大切よ。だけど今は、まだそこまで考える余裕ないでしょ？ そういうことは私や京（みやま）に任せて、今は余計なことを考えずに精一杯、楽しんでちょうだい。それが夢の今日の課題よっ！ ほらっ！ リラックス、リラックス！」

私の肩を揉みながら、明るく励ましてくれる光さん。

「はいっ、頑張ります！」

「よしっ！ 良い表情になってきたわね。その意気よっ！」

光さんと話しているうちに、私はさっきまでの重苦しい気持ちを忘れて、いつの間にか前向きで晴れやかな気持ちに切り替わっていました。

この状態なら、なんとか無事に本番も迎えられそうです。

それにしてもしリンリン先輩といい、光さんといい、どつやら私は良いお姉さんに恵まれているみたいですよ……。

「そうだ、夢。京を見てごらんさい。京って、いつもクールで動揺しないじゃない？ 今日だって……ほらっ！ 緊張もせず、今も落ち着いてる」

「人」

さらさら。じっくん。

「……。ふう」

ズルツ。

「って、あんたも緊張してんのかよっ！」

「……え？」

予想外の風景に呆気にとられ、大声でツツコミを入れる光さん。その声に気づいたんでしよう、京さんがこちらを振り返りました。

さわだみやこ
沢田京さん。

担当はベースで、光さんとは同じ大学の同級生だそうです。

それにしても手のひらに人、かあ……。

案外、可愛いことをする人だなあ。

そんな京さんが私たちのいる方に近寄ってきました。

「ったくもう、あんたは……。ズッコケちゃったじゃないの！」

「ごめん。こういう所はまだ慣れなくてね」

さつきまでとは打って変わって、声を挙げて怒る光さん。

その声を、京さんは冷静に受け止めています。

ちなみにさつきまでの態度を見てもらえば分かりますが、光さんって、普段から冷静で非常に落ち着いている方なんです。

でも、どうやら京さんに対してだけは喜怒哀楽の感情がストレートに出てしまうようです。

きつと、良いお友達なんでしょうね。

くすつ。

「……で？ あんた、大丈夫なの？ 空みたいにギヤーギヤー取り乱したりしないですよ？」

「くすつ。大丈夫、それはないよ」

光さんの不安に対して、微笑を浮かべながら返事をする京さん。空ちゃんの時とは違って、その姿からは大分、余裕を感じます。この様子なら、京さんは本当に大丈夫でしょう。少なくとも、私の目にはそう映りました。

「そう。なら、いいんだけど……」

と言いながらも「はあ、まったく……」とため息をつく光さん。いろいろと気苦労が絶えない様子が見て取れます。

苦労しているんですね、光さんも。

そんなことを考えている間も、時計は変わらず、淡々と針を回します……。

#0 プロローグ！？

「ウォーターベッドでしたっ！ みんな〜！ ありがとう〜！」

演奏終了と同時に、会場全体が大きな拍手と歓声に包み込まれました。

「お、前のバンドが終わったみたいね。みんな、行くわよ」

光さんに促され、準備のために移動を始める私たち。

「お疲れ様です」

「お疲れさん、次のステージ頑張ってね！」

前のバンドさんと軽く挨拶を交わしたあと、セッティングを開始します。

え〜っと、まずは……。

セッティングを終えると、私たちは再び舞台裏に集まりました。光さんはみんなが集まったことを確認すると、すぐにみんなに号令を掛けました。

「よし、みんな！ 準備はいいわね!？」

みんなが頷きます。

「それじゃ気合い入れるよ！ みんな、手、重ねて」

光さんの差し出した手の上にまず、京さんがその上に手を置くと、残った私たちも、その上に手を重ねていきました。

「いい？ みんな。今日が私たち、バタフライ BUTTERFLY ナイ KNIFE
Eのデビューライブになるわけだけど。準備期間は短かったけど、みんな、それぞれ生活がある中でよく頑張ってくれたわ。おかげで良い練習ができたし、みんなには心から感謝してる。あとは……それを全部、このステージにぶつけるだけよ！ リンリンのドラムも！ 京のベースも！ 空と夢のギターも！ そして、私のボーカルもね！ 持つてるもの、全部よ！ 全力でやってちょうだい！ いわね！？」

「……はい！」「……」

「よし！ それじゃ、掛け声いくわよ」

……すう。

「悔い残すなよっつ！……！……！」

「……お……っ……！……！……」

さあ、いよいよ本番です！

いったい、どんなライブになるんでしょう？ 正直、想像がつきません……。

もっと自分たちの好きな音楽がやりたい。

その思いが私たち5人を結びつけて、その結果、生まれたバンド。それが、BUTTERFLY KNIFEです。

学校以外でバンドをすることになっただけでもビックリしたのに、まさか、その初ライブを今年中に行うことになるなんて。こんな事態になるなんて、あの頃には夢にも思っていませんでした。

そう、あの頃。

今年の4月。

私、松本夢と石塚空ちゃんが私立桜が丘高校に入学した頃には……。

#0 プロローグ！ ? (後書き)

いかがでしたでしょうか？

ちなみに一部のキャラファイルは出来ているので、その辺りはまた後日ということまで。

#1 新歓！（A面）？（前書き）

今回の語り手：松本夢

4月になり、市立桜が丘高校へと入学した松本夢まつもとゆめとその親友、石塚いしづか空。くう。

2人は一緒のバンドで演奏することを夢見っていて、軽音部への入部を考えています。

各クラブによる勧誘活動が始まるなか、彼女たちは新入生歓迎会で軽音部の演奏に触れます。

相変わらずのオリキャラメイン。

ここから、梓たち軽音部の面々も少しずつ登場します。

#1 新歓！（A面）？

皆さん、おはようございます。松本夢まつもとゆめです。

高校入試も無事に終わって、4月。

私は親友の石塚空ちゃんいしづかくうと私立桜が丘高等学校へと入学することができました。

入学式も無事に終わった次の日。

学校に登校すると、早くもクラブの勧誘活動が私たち新入生を待ち受けていました。

「おはようございます！ テニス部です！」

「茶道部です。新入生対象でお茶会をやりますので、ぜひ」

「サッカー部ですっ！ 私たちと一緒に全国、目指しませんかっ！」
「？」

「軽音部です。よろし……」

私たち2人の姿を見て、思わず言葉を失う軽音部の先輩。
空ちゃんが声をかけます。

「あゝ、ピラ。くれないんすか？」

「え？ ああっ、ごめんなさい！ どうぞっ！ 今日、体育館でライブもやりますから、ぜひ聴いてくださいねっ！」

軽音部のビラを受け取ると、そのまますぐに校舎へと向かって再び歩き始める私たち。

朝。空が真つ青で風がまだ少し冷たい、そんな気持ちのいい朝。綺麗な花を咲かせ始めた桜の木々が見下ろす中、様々な部活の先輩方が、私たち新入生にビラを配って積極的にアピールしています。

でも、私たち2人にはあまりビラを配ってはくれませんでした。何故でしょう？

……まあ、原因はだいたいわかっています。きつと皆さん、私たちの見た目に驚いているんでしょう。

別に今に始まったことではないんですが、ただ、好奇の入り混じった目で周囲からじろじろと見られるのは何度、体感しても気持ちのいいものではありません。

それにしても、今日はいつにも増して視線をたくさん感じます。まあ、入学直後ですから仕方がないといえば仕方がないんですけどね。

はあ……。嫌になっちゃうな……。

「……あれ？ どうしたの、梓ちゃん。なんか、ぼか〜んとしてるみたいけど」

「え？ ……ああつ、ごめん、憂。いや、さっき2人組の子たちにビラを渡したんだけどさ。ちょっと、その子たちの見た目にビツクリしちゃってね」

「へえ〜、そうなんだ。……で？ どんな感じだったの？」

「えっとな……」

#1 新歓！（A面）？（前書き）

梓から軽音部のピラを受け取った夢と空。

そのことについて話しているうち、いつしか話題はお互いの外見のことに少しずつシフトしていきます。

そんな他愛のない話をしていると、夢は突然、謎の先輩に抱きつかれて……。

#1 新歓！（A面）？

「ねえ、空ちゃん」

「ん〜？」

「私たち、ビラ、あんまりもらえなかったね」

「あ〜……だなあ。ま、別にいいじゃん、そんなの。あたしら、いかに『部活に青春かけてますー！』って汗臭いタイプの人間じゃねえんだからさ」

「くすつ、それもそうだね。あ、でも軽音部のはちゃんともらえたね」

「ああ。あたしら見て固まってたけどな、軽音部の先輩」

「そりゃ空ちゃんの顔を見たら……ねえ？ 私、知り合いじゃなかったら絶対、声かけないもん。怖いから」

「なっ！？ ひっでえな！ それ言うんだったら、夢だって」

「こんな話をしながら、私と空ちゃんは教室へと向かう廊下を歩いています……」。

*

「ふあゝあ。……寝む」

(はあ、今日から3年かあ……。全然実感ないなあ。……あれ？あの子、何処かで見たことある気が……。あっ！)

「夢!？」

えっ!？

名前を呼ばれたのにビックリして、とっさに呼ばれた方向を振り返った次の瞬間……。

がばあっ！

「やっぱり夢じゃない！ えゝ、何、あなた、桜が丘に入ったの!？ もおゝ、言つてよおゝ！ みずくさいじゃないのゝ！ とにかくよく来たわねゝ！ いらっしやゝい」

いきなり抱きつかれ、マシンガンのように言葉を浴びせられる私。そのままぎゅっと抱きしめられて……。って、誰？

この人、誰なんですか!？

「……………」

ドゲシッ！

「ぐふっ！」

その声が耳に届いたのと同時に、私は解放されました。そして、私に抱きついてきた人はわき腹を抱えながら、げほげほと咳をしています。

空ちゃんがわき腹を思い切り蹴ったんです。

「けほっけほっ。痛っっ、いきなり蹴るか、普通……。ていうか、なんであんたまでここにいんのよ、石塚あ！」

「いたらいけないんですか？ つうか、会うなりいきなり夢に抱きつくそっちが悪いっすよ、鈴さん」

え？ 鈴さん？

私は改めて、私に抱きついてきた人の姿を確認しました。その人の正体。それは……。

「あ……リンリン先輩」

「ん？ たははっ。おっす、夢。元気〜？」

この人の名前は林鈴さん。

私の家の近所に住んでいて小さいころから何かと私の面倒を見てくれている、私にとってはお姉ちゃんみたいな人です。

お家がラーメン屋さんなのと、髪型を左右対称のお団子頭（シニヨンって言うそうですよ）にしていることから、親しい人からは”リンリン”って呼ばれているんですよ。

「あの、えっと、おはようございます。大丈夫ですか？」

「え〜ん、ダメ〜、まだズキズキする〜。どうしょ〜、骨折れた〜。不良少女に骨折られて立てないよ〜、ゆ〜め〜」

きゃっ、また抱きついてきた！

まるで子供がお母さんに甘えてくるみたいに私の胸元にもたれかかってきたリンリン先輩。

その様子がちょっと可愛かったので、とりあえず頭を撫でてあげました。

なでなで。

「この期に及んでまだ抱きつくか、このエセ中華娘がっ！ てか夢も甘やかすなよっ！」

「ったく、うつさいわねえ……。つうか、あんた。本当になんでいんの？ ここ、学力低くないでしょ？ ……はっ！ まさかつ、脅迫したとか！？」

「ちゃんと合格してきましたよっ！ 人のこと、あんま悪党みたいに言わないでくださいっ！」

「…………え？ マジで？」

「マジっす」

一瞬、静寂が私たちを支配しました。

それから……5秒ほど。

リンリン先輩が私に声をかけてきました。

「……夢」

「えっ？ あっ、はい」

「こいつ、よく受かったわね」

「は……はい。聞いた時は私もびっくりしました……」

ぶっつん。

「おまえらああああ……！！ あたしが合格したのがそんなに不満かああああ……！！」

「はっはっは、ごめんごめん！ いや、それにしても、あんたが真面目に受験勉強するとはねえ。ちよつと見直したわ」

「えっ？ まっ、まあ、わかりやいいんすよ、わかりや！」

いきなりリンリン先輩に褒められたのが予想外だったのか、空ちやんの顔からは怒りの色があっさりとおえ去りました。

代わりに少し照れた表情を浮かべています。

さすがの空ちちゃんも褒められるのには弱いみたいですな。

「ただ、その直後。
リンリン先輩のある指摘により、話はあらぬ方向へと向かい始めます。」

「ん〜、ただね……それ。その顔。入学して早々、それはちよつとまずいんじゃない?」

「えっ? ……ああ、ピアスのことっすか? あれ? 別に違反じゃないっすよね?」

「えっ? そうなの?」

「そうなんです。」

「昨日、学校が終わってすぐ、空ちゃんは生徒手帳を真剣に読んでいました。」

「その姿に私はちよつと違和感を感じていたんですが、今朝、会った時にその理由がわかりました。」

「空ちゃんはピアスをあけていたんです。」

「まずは両耳に1か所ずつ。」

「それだけならまだ驚きも小さかったんですが……。」

「空ちゃんはさらに下唇の左側にもピアスをあけてしまいました。」

「唇と両耳で合計4カ所。」

「特に唇のピアスを見るからに痛々しくて、見た目にもちよつと怖い感じになっています。」

今朝、ピラを配っていた先輩方が驚いていたのも無理ありません。

ピアスさえなければ、ツンツンとしたベビーショートヘアが似合う、ボーイッシュでさわやかな感じの女の子なんです……。少なくとも、見た目は。

「へえ〜……。確かにピアス禁止とは書いてないわね。知らなかったわ」

「そりゃ昨日、ばつちり確認しましたから！ 下手なことしてあたしが停学になったら困るっすからね！ 夢が」

「え？ 私！？ そこで私に振るの！？」

「だって、なあ？ あんた、おとなしいうえに人見知りも激しいだろ？ 少し心配なんだよ。あとはやっぱり……。鈴さん、どう思います？」

「何がよ？」

リンリン先輩の問いかけに反応して、空ちゃんは視線を私の頭の方に移します。

その様子を見てリンリン先輩も「ああ……なるほどね」と静かに頷いていました。

そして、2人の視線が私の頭の方に集中し始めました。

2人が見ているもの。それは……。

「やっぱり……目立ちます、よね？ この髪……」

「まあ、しょうがないけどな」

「そうね。でも私は好きだよ、夢の髪。ん〜……。それにしても相変わらず綺麗な髪してるわね。ちよつと触ってもいい？」

私の返事を待たず、リンリン先輩は私の髪を触り始めました。

「……はあ〜あ……」

「おいおい。何、ため息ついてんだよ。まだ入学して2日目だぜ？」

「それはわかってるけど……はあ〜。もうやだ、この髪。さっきも周りからじろじろ見られてたし」

そう。とにかく私は自分の髪が大嫌いなんです。

まあ、生まれつきだから仕方がないと両親にも言われたんですが……。

でも、おかげで昔からみんなの視線が自然と集まってくるのですごく恥ずかしいんです。

そして、その状況は今もあまり変わっていなくて……。

え？ 何が嫌なのかわからない？

ちゃんと説明してくれ？

……そう、ですよ。きちんと説明しないとダメですよ。不親切でごめんなさい……。

分かりました。それじゃあ、説明させてもらいますね。

本当はあまり言いたくないんですが。

あの……、私……。

実は……。

えっと……。

その……。

……。

ま……。

真っ白なんです……髪の毛……。

なんで髪が白いのかはよくわかりません。
でも私、生まれつきこうなんです……。
そのせいで小さいころから、よくいじめられました。

空ちゃんが友達になってからは彼女が守ってくれるようになったのでいじめも大分減ってはくれたんですが……。

でも、今でも外を歩いていると知らない人たちにひそひそと噂されていたり、後ろ指をさされたりしているような気がして落ち着かなくて……。

そのことを思い出すと、今でも……うっ……。

うっ……。

「……あ、あれ？ 夢、もしかして泣いてる？」

「え……あれ？ なんで？ す、すいません、あたし、別に悲しいわけじゃ、ぐすっ……」

「あゝあゝ、もう泣いてるじゃない。よしよし、大丈夫だからね。この学校、いじめなんて馬鹿なことする奴なんかいないからさ。だから、ほら、心配しないで」

「う、うっ、ごめんなさい、ごめんなさい……」

リンリン先輩が私の頭を撫でながら慰めてくれます。

けど、それでも私の涙は止まってくれませんか。
むしろリンリン先輩の優しさ、それと迷惑をかけている申し訳なさが入り混じって、余計に涙が止まりませんでした。

うっ……うっ……ぐずっ……。

「とっ、ところで夢よおっ！ 新入生歓迎会って今日だったよな！」

「うっ、ぐずっ、すん……すん……。……え？」

空ちゃんが強引に話題を変えてきました。

少しずつ涙が収まり始めたころ、私はやっとの思いで空ちゃんの方を振り返りました。

涙を拭いながら……。

「う、うん、そうだね。でも、どうしたの？ 空ちゃんが学校行事に関心持つなんて珍しいよね？」

「そりゃ、あんた軽音部があるからだよ。今朝、ピラもらう時にも言ってたじゃん。この後、ライブやるって」

「あっ、そういえば言ってたね……。……うん。うん！ 楽しみだね！」

「そうだな！」

涙を拭いながら私が笑顔で返すと、空ちゃんもそれに応えるよう

に笑顔で返してくれました。

その笑顔のおかげで、私はようやく気持ちを直すことができました。

「……ん？ ケイオンブ？ なにそれ？ 何する部活なの？」

「え？ リンリン先輩、知らないんですか？」

リンリン先輩は「うん！」とはっきり頷きました。

そして、そのままじつと私のことを見つめています。

その視線は私をしっかりと捕えて放してくれません……。

明らかに私に説明を求めている目でした。

「あの……軽音部っていうのは……その、えっと……」

「鈴さん。ほんとに、ここの生徒っすかあ？ そういやピアスのことも知らなかったっすもんね？」

なんとか説明しようとする私を遮るように、空ちゃんが挑発めいた発言をリンリン先輩にぶつけました。

すると先輩はむっとした表情で、視線を空ちゃんの方に移しました。

怒らせるのはどうかと思いましたけど、空ちゃんの挑発は私にとつて思わぬ助け舟になりました。

「失礼ね！ 誰だって学校の事、全部把握してるとは限らないですよ！ で！？ ケイオンブって！？ 何する部活なのよ？」

空ちゃんは手に持っていた軽音部のビラをリンリン先輩に見せてあげます。

そこには、こう書いてありました。

『私たちと一緒にバンドやりませんか!? ドラム募集中!(もちろん他のパートも大歓迎!)』

「ふうん……なるほど……。バンドねえ……。ってことは、何? あんたたち、ひよつとして楽器でできるわけ?」

「あ、はい。ギターだったら少し弾けます。まだ全然下手ですけどね……」

「あたしもあたしも。夢にちょこちょここと教えてもらいながらやってるんすよ」

「へえ、そうなんだ。空はともかく、夢がギター弾くってというのがちよつと意外ね。じゃあ、あんたたち軽音部に入部するつもりなんだ?」

「はい、出来ればそうしたいなあって思ってます」

「ええ。ただつすね」

ん? ”ただ”?

空ちゃん、どうしたんだろ?

軽音部に何か不安があるのかな?

「ちよつと心配なんすよねえ……。さっきビラ配ってた先輩、おとなしそうな奴だったし」

「奴”って……。何が心配なの？」

「いや、ここの軽音部であたしが好きな音楽ができるのかなって思
つてさ」

「あゝ、どうなんだろ？ ……ていうか空ちゃん、やっぱりメタル
じゃなきゃ嫌なの？」

「つつかメタルとパンク以外はロックじゃねえ！ BPM（テン
ポのこと）200以下なんて温くてマジやってらんないし！」

「そんな乱暴な……。メタルだって、別にただテンポが速ければい
いてわけじゃないんだよ？」

「いゝや、夢！ あんた、わかってない！ 高速のリフ！ 高速の
ツীবラス！！ そして高速のギターソロ！！！ 全部、速くやるこ
とに意義があるんじゃないか！ だからチルボド（CHILD R
EN OF BODOMの略称）は最高だし、メタリカだったら『
キル・エム・オール』、スレイヤーだったら『レイン・イン・ブラ
ッド』辺りが最狂でかつこいいんじゃないかよっ！」

「そんなことないよ！ バスも、リフも、低音で重い音を刻み続け
るからこそ意味があるんだよ！ 速さだけじゃないよ！ 事実、メ
タリカなら『ブラック・アルバム（『METALLICA』の略
称）』スレイヤーなら『サウス・オブ・タウン』って具合にミドル
テンポ主体の良作だってあるでしょ！ わかってないのは空ちゃん
だよ！」

「あんなの褒めてるのは評論家だけだろ！ つつかメタリカとかが

おっさんになつて速いのが出来なくなつたつてだけじゃねえの!？」

「違うよ! だからなんで速さしか見ないの!? いくら速くても音がスカスカで説得力がなくちゃ何の意味もないじゃない! だいたいチルポドにだつて遅い曲あるでしょ!？」

「なんだと、チルポドのことを否定する気かよ? あくん？」

「そうじゃないよ!! ただ、速さがすべてじゃないって言いたいだけ!」

「いや、速さがすべてだ!」

「違うよ、重さだよ! 説得力だつて!」

「うぬぬぬぬ……………」

「む……………」

「!!」

「けっ!」

ぷいっ! もつっ、空ちゃんの分からず屋!

「……………ねえ」

……………ん?

「さっきから何言ってるのよ? あんたたち……………日本語?」

あ。そういえばすっかり忘れてたなあ、先輩の存在……。

というわけで、いきなり始まった私と空ちゃんのメタル論争。

速さがすべてと主張する空ちゃんと、重さが重要だと主張した私。お互いに持論を曲げなかったため、結局、最後まで分かりあうことは出来ませんでした。

その結果。

そこに残されたのは議論についていけず、1人、呆然と立ち尽くすリンリン先輩の姿だけなのでした……。

#1 新歓！（A面）？（後書き）

著者は最近になってメタリカとかスレイヤーとかを聴き始めたため、知識は初心者程度のものしかありません。

メタルマニアの方、ごめんなさい。

出来たら、僕にメタルのことをご教授いただければ幸いです。

（厚かましいっての）

#1 新歓！（A面）？（前書き）

新入生歓迎ライブで軽音部の演奏に初めて触れる夢と空。

ここでよろしく、梓たち軽音部が本格的に登場し始めます。

#1 新歓！（A面）？

それから……。

今日の分のオリエンテーションが一通り終わって、私たちは体育館の席についていました。

新入生を歓迎してくれるイベントが行われるからです。

”新入生歓迎会”。

出演するのは主に文化系のクラブで、自分たちのクラブの宣伝も兼ねながら、パフォーマンスを披露してくれます。

ちなみにどんなクラブがあるかというと、吹奏楽部や合唱部などの音楽系のクラブはもちろんのこと、演劇部、映画研究会、なかにはお笑い研究会やマジック同好会なんてクラブまであるみたいです。

どのステージも各クラブが持つ特徴が所々に出ていて、私も楽しく観ていたんですが、お笑い研究会が”欧米か（タカアンドトシさんの鉄板ギャグですけど……皆さん、知ってますよね？）”を堂々とパクリながら謎かけを披露し始めたのにはさすがに苦笑いしてしまいました。

途中、あくびをしながら退屈そうに観ていた空ちゃんもこれには思わず笑ってしまったようです（あとで本人に聞いたら、あれは呆れただけだって必死に弁明していました）。

ただ、日頃、ギターを弾いているせいでしょうか。

どうしても音楽系のクラブが気になってしまいます。

その中でも特に印象に残ったのがジャズ研究会でした。

トランペットやサクソフーンなどの金管楽器もカッコよかったです
が、それよりもドラム、ベース、ピアノ、そしてギターとロックバ
ンドでも活躍している楽器が全部そろっていたので思わず真剣に聴
いてしまいました。

もし空ちゃんが興味を持ってくれればジャズ研究会に入部するの
も悪くないかなとも思ったんですが……。

恐らく、それはないでしょう。

だって演奏中に隣をちらりと見たときに空ちゃん、気持ち良さそ
うに寝てましたから。

分かってはいましたけど、どうやらジャズには全然興味がないよ
うですね、あははっ……。

そして、そのジャズ研究会の演奏も終わって、そのまま舞台は進
行して……。

「以上、合唱部でした。次は軽音楽部によるクラブ紹介とバンド演
奏です」

「あ！空ちゃん、起きて起きて！次、軽音部だよっ！」

「んん……ふあゝあ。わりい、いつの間にか寝ちゃってたわ」

「よく寝てたよね。ひよつとして、あんまり観てないんじゃない？」
「だって興味ねえんだもん。ジャズ研はギターあったから『お？』
って思ったけど……。ギターの音、あんまよく聞こえないし、途中
で疲れちゃってさ」

「くすつ、空ちゃんらしいね。でも、そんなこと言ったら先輩た
ちに悪いよ」

「分かってるって。次はちゃんと観るよ」

そんなことを話しながら、待つこと数分……。

ジャーン！ ジャジャーン！

ボン！ ポポポポ……ボン！

ギターとベースの音が大音量で聞こえてきました。
どうやら最終調整を行っているようです。

生でライブを観たことは1、2回しかないんですが、こつという音
を聞くと「ああ、いよいよ始まるんだな」って身構えちゃうんです
よね、私。

皆さんもそうなりませんか？

やがて、その音も止んで……。

客席側が暗くなり、ステージ上の証明は逆に明るくなりました。

すると、そこには私たちと同じ制服を着た女の子が3人立っていました。

どうやら、この人たちが軽音部のメンバーのようです。

右手側の赤いギターを持った先輩がマイクスタンドに手をかけ、私たちに向かって話し始めました。

「あゝ、あゝ……。皆さんこんにちは、軽音部です！ 新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。皆さんと同じ学び舎で学ぶことが出来ることを大変嬉しく思っています。さて、私たち軽音部は何をする部活かと言うと、一言で言えば、みんなでバンドを楽しむ部活です。みんな練習しながら、ときにはおしゃべりしたり、一緒にお茶を飲んだりしながら、たらたら過ごすこともありますが……。あれ？ 今、私、余計なこと言ったかな？」

「もう遅いよ、梓」

くすつ。

ところどころ、会場から笑い声が聞こえてきます。

「…………コホン。えゝつ、バンドって聞くと、とっても難しそうだと思うかも知れませんが、そんなことはありませんよ。例えばピアノの子も始めたばかりですし、この子のお姉ちゃん……去年まで軽音部にいた先輩なんですけど、その先輩もギターを始めたのは入部してからだって言っていましたし」

「お姉ちゃん、最初は口笛とかカスタネットとかをする部活だったってみたいだよ」

「ええっ！？ 何それ！？ そんなの初めて聞いたよ！？」

「うん。軽い音楽って書くから、どうせ簡単なことしかやらないだろって。だからギター弾くって知った時はびっくりしてた……って、梓ちゃん？」

「唯先輩……。先輩らしいといえはらしいけど……」

「……梓。客席。新入生がすっかりおいてけぼり食らってるよ」

「あ……！ す、すいませ」

クアーン！

慌てるあまり、マイクが不協和音ハウリングを起こしました。

くすくす。

マイクが1つしかないせいでギターの人以外、何を話しているかはよく分かりませんが、軽音部の皆さんがとても仲良しなのは見ていてよく分かりました。

会場全体が和やかな雰囲気ハウリングに包まれています。

「んっ、んんっ！（咳払いです） とにかくっ！ そんな感じで初心者の方でも私たちが精いっぱいサポートしますので、まずは気軽に遊びに来てください！ もちろん経験者の人も歓迎しますよ！ それじゃあ、私たちの演奏聴いてください！」

やや慌て気味にMCが終わった、次の瞬間。

体育館中にギターを激しく掻きならす音が響き渡り始めました。その音はさつきまで慌てていた先輩が出しているとは思えない程、どっしりとして安定感があります。

音の粒が綺麗に揃った、気持ちのいいディスト ションサウンドでした。

そんなギターのを追うようにベースの図太い音が加わり、これだけで全体の土台となる音楽がすでに出来上がっています。

そして、その上を流れるように歌うピアノ……いや、ピアノじゃなくてオルガンでしょうか。

とにかく、その柔らかい音色が心地良いメロディーとなって、曲を親しみやすいものにしてきています。

ギター、ベース、そしてオルガン。

ボーカルとドラムがないのが惜しかったですが、それも特に気にならないほど先輩たちの息はピッタリで、まとまった演奏を聞かせてくれました。

私もバンドであんな風に演奏してみたい。

演奏が終わったところには改めて、その気持ちが強くなっていました。

#1 新歓！（A面）？（前書き）

新歓ライブが終わった帰り道。

夢と空が互いに感想を言い合っています。

#1 新歓！（A面）？

その帰り道。

私と空ちゃんはさっき見たライブのことを話していました。

「夢、どう思った？」

「演奏、うまかったよね。特にギターの人。ソロもリフも安定して凄いなって思った」

「なあ。MCはぐだぐだだったくせにさ。ギター弾くよりMCの練習した方がいいんじゃないかねえのって思ったくらいだよ。なあ？」

「あははっ。まあ、でも、それも含めて面白かったと思うよ」

「確かに。なんか仲良さそうだったもんな、軽音部。雰囲気は良かったよね」

「そうだね」

どうやら空ちゃんも私と同じように感じていたようです。

そう思うと、少し嬉しくなりました。

これから空ちゃんと一緒にあんな風に演奏ができる。それが心の底から楽しみでしたから。

ところがこの後、私は空ちゃんの口から思いもよらなかった言葉を聞かされることになります……。

「それじゃ、空ちゃん。私たち、軽音部に入部するってことで良いんだよね？」

「あ……。それなんだけどさ」

「えっ？」

「あ、あ、あ、ちょっと止めとこうかなって思ってた……」

……………。

……………え？

「今、なんて言ったの？」

「いや、軽音部に入部するのは止めとこうかなって」

！！

「え！？　なんで！？　なんでなんで！？　空ちゃん、さっき演奏良かったって言ってたじゃない！」

「うん。確かに演奏は良かったし、雰囲気も良さそうだった。ただ
「さ」

「ただ、何？」

「あたしたちの好きな音楽と全然違うなって。今朝、あたしメタル以外はロックじゃねえつつつてたじゃん。それだよ。軽音部であたしの好きな音楽が出来るとは到底思えなくてさ。だから止めとこうかなって」

「そんなあ……。高校に行ったら2人一緒にバンドやろうなって、約束したじゃない!!」

「うつせえな、分かってるよ!!」

空ちゃんの怒鳴り声で一瞬、身がすくみました。

「……わり、怒鳴っちゃって。でも、別に軽音部入らなきゃ絶対にバンド出来ないってわけじゃないだろ？ 夢には悪いと思ってるけど、あたしはどうしてもメタルじゃなきゃ嫌なんだよ」

「空ちゃん……」

「だから……ごめん、夢！ あたし、軽音部には入部しない!!」

手をパンと合わせて、空ちゃんは私に謝ります。

でも、私はそれに何も答えることができませんでした。

空ちゃんはさらに続けます……。

「べつ、別に、夢は軽音部に入部したいんだったら、普通にしてくれていいんだぜ？ あたしに構わずさ」

違う……。違うよ……。
私1人じゃ何の意味もないよ……。

私は空ちゃんとバンドがやりたいの！
空ちゃん抜きでバンドするなんて考えられないよ……。

こう言おうとしたのに、声になってくれません。
代わりにこの時、私の体はいつの間にかガチガチに震えていまし
た。

もちろん意識的に行っている事でないのは言うまでもありません。

「あれ……夢？ お前、もしかして怖いのか？」

な！ ちがつ……！

……わない。むしろ正解。

空ちゃんと一緒じゃなきゃ嫌だって気持ちは本当だけど、それ以前に私、怖いんです。

いくら雰囲気良さそうな部活でも、私1人で知らない人たちの輪に入るなんて、私にとっては綱渡りに等しいほど勇気のいる行動でした。

私は無言で頷きました。

「はあ、やっぱりか……。あんだ、人一倍、人見知り激しいからなでもさ、夢。あたしが言うのも生意気だけど、あんだそろそろ、あたしや鈴さん以外の人間にも慣れといた方がいいよ。大丈夫だって、あたし以上に怖い奴なんて、そういねえからさ。それに、もし軽音部が無理そうなら他に入りやすそうな部活探したっていいんだし……」

「…」

「……ずるいよ、そんなこと言うなんて」

「だよな……ごめん、マジでごめん。そのかわり！ そのかわりと
言っちゃあれだけど、今日から夢と2人でやれるバンド探すからさ
！ 絶対！ 約束する！」

「……ほんと？」

「ああ、ほんとマジで！ あたしもわがまま言ったんだし、絶対見
つけるよ！ な！？」

「……絶対？」

「おおっ！ どんとこい！」

この後も気まずい雰囲気をなんとか持ち直そうと、家に着くまで
の間、空ちゃんは終始、明るく話しかけてくれました。
でも、私の気持ちは全くすっきりしませんでした……。

家に帰ってから、私の気持ちは変わらず曇ったままでした。

気晴らしに部屋の中を真っ暗にして大好きなスプラッター映画を
見始めたんですが、心のもやもやは晴れてくれません。

空ちゃんが軽音部に入らない……。

私1人で軽音部……。

嫌だ、怖い。

絶対、髪の毛のと言われるに決まっているもん。

「なんで真っ白なの？」とか、

「おばあちゃんみたいだね」とか。

でも帰りがけに言われた、空ちゃんやリンリン先輩以外の人にも慣れないといけないっていうのも事実。

いつまでも空ちゃんたちに甘えてちゃいけない……。そりゃ、そっくだよね。

その為には何でもいい。

とにかく部活には挑戦してみないと。

でも、軽音部以外にどんな部活があるんだろ？

そもそも私みたいな子を受け入れてくれる部活なんてあるのかな？

テレビから聞こえてくる悲鳴にも耳を貸さず、私はただ考え込んでいました。

私、いったい、どうすればいいんだろ？

#1 新歓！（A面）？（後書き）

ここで1話の前半は終了です。
お疲れ様でした。

果たして夢は軽音部に入部するんでしょうか？
その話は、また後日……。。

#1 新歓！（B面）？（前書き）

今回の語り手：林鈴

ある日、実家の物置で偶然、ある楽器を見つけた林鈴。
一方、新たに軽音部の部長となった中野梓なかのあずさは廃部を免れるために、
同じく部員の平沢憂ひらさわうれいと鈴木純すずきじゆんの2人と一緒に新入部員獲得を目指して奮闘します。

果たして新入部員は入ってくれるのでしょうか。

#1 新歓！（B面）？

「あゝあゝ、次から次へとガラクタが……。まったく、無駄なもの置きすぎだつつうの！」

裏庭にある物置の中を漁りながら、文句を言う私。

というのも、父さんに「味のあるデザインのでっかい食器が確かに物置に置いてあったから取ってきてくれねえか？」ってお願いされたから仕方なく探してやってるんだけど……。

けど、それらしいものは全然見つからない。

なんでも新しいメニユーでその食器を使うから 私の実家、ラーメン屋なの。けっこう評判いいのよ！ とか言ってるぞ……。

まったく、そんなもん自分で探さないよ！

「だいたい”味のあるデザイン”なんて、そんな大雑把なこと言われて分かるわけないじゃん！」

はあ……。

だからといって、思ったことそのまま言っただけで反抗したところで「ああ！？うるせえな、細かいこと言ってるねえでいいからとっとと持ってこい！」とか言うに決まってるし。

自己中でおまけに短気なんだから困ったものよ、ほんと。

くそっ、あのクソオヤジ……いつか絶対殺してやる！

ガラガラガラガッ！

そんなことを考えてるうちに、倉庫内に適当に積まれていたたかさんの物が雪崩のように崩れさった。

おかげで中も外も、もうめっちゃくちゃよ！

「だあああつ、腹立つ！ もうやだつ！ ……ん？ 何これ？」

この時、私は崩れた物の山の中から、いろんな大きさの太鼓が重ねて置かれているのを見つけた。

辺りをよく見てみると、他にもスタンドに取り付けられたシンバルとか、なんと銅鑼ドラまで置いてある。

どれもこれもパツと見た感じ、まだ新しくて充分に使えそうな物ばかりだったわ。

「太鼓……？ いや、これ、ドラムだ。なんでこんなのが家の物置に……」

「おいっ！ 鈴すず、まだかつ！？ いつまでちんたら探してんだよ！」

「あつ、父さん！ ダメよ、ダメ！ 全然、見つからないわ！」

「なんで見つからねえんだよ！ 本当にちゃんと探してんのか！？ また、どうせ適当にしか見てねえんだろ！ もっと細かく見てみるよっ！」

「はあっ？ やかましいわっ、ハゲ！ ていうか、いちいち怒鳴りに来る暇があるなら自分で探せつつのよ、この瞬間湯沸かし器！（怒りっぽい人のことをこう言います。昔、うちの妹がよく使っていました 著者）」

「なっ、んだと、てめえ〜！ 訳わかんねえこと言いやがって！それが親に向かって言う言葉か！？ ああん！？」

「つつさい、ボケ！ だいたい伝え方が曖昧過ぎんのよっ！ 味のあるデザインって何なのよっ！？ 色は！？ 形はっ！？ どんなのよ！？ あと、そもそもなんの食器かすらわかんないんですけどっ！？ どんぶり！？ コップ！？ それとも」

以降、無駄な内容の親子喧嘩が延々と続きますので省略させていただきます（つつかそんなの書きたくない）。

#1 新歓！(B面)？(前書き)

ここから語り手は中野梓に変わります。

#1 新歓！（B面）？

皆さん、こんにちは。中野梓です。

いきなりですが、私……。今、大ピンチです！！

というも……。

ばたばたばたばたっ！

「絶対いやです！」

「こらっ、待ちなさい！ 軽音部を廃部にしたくないんですよ！？」

「だからいやなんですよ！ なんでそんなもの着なきゃいけないんですか！？」

「決まってるじゃない！ かわいいからよ！」

「意味わかりません！」

メイド服を手に全力で追いかけてくる山中先生。
そして、そんな山中先生から必死で逃げる私。

捕まったら、最後。

メイド服を着せられた状態で新入生の相手をする羽目になる！

別に、今まではそれでもよかったかもしれない。

でも、今年は事情が違う。

もし部員が1人も入らなかつたら、人数不足で廃部になってしま
うからだ。

そんな状況でメイド服なんて着て、もし、それが原因で新入生の
足が遠のいちゃったりなんかしたら……。

あぁっ、考えるだけでも身の毛がよだつ！

だから、絶対に着るわけにはいかない！

なんだけど……。

「うっ、しまった！ 壁際に来ちゃった！」

「ふっふっふっ、とうとう追いつめたわよ……。さぁ、観念なさい

「！」

「にゃあああああああああああ！！」

……そして。

「結局、着せられてしまった……」

「ふふ。よく似合ってるわよ、梓ちゃん（泣） あぁ、そうそう。これ

を付けなきゃね！」

そう言っつて山中先生は私の頭にカチューシャを付けた（もちろん勝手に）。

と言っつても、ただのメイドカチューシャではない。猫耳のやつだ。

「おお、猫耳メイド！　すごく似合っつてるよ、梓！」

「梓ちゃん、かわいい」

憂と純が私のメイド姿を褒めてきた。

2人とも、心なしかいつもよりテンションが高いように見える。よっほど私の格好が面白いんだろう。

ちなみに2人は制服姿のまま。

山中先生曰く、過去、部員全員にメイド服を着せて失敗した経験があるから、2人にメイド服を着せるのは自重したらしい。

だったら今、メイド服を着せられてる私は何なんだって思うけど……。

そういえば軽音部に入部して以来、こうして何度か猫耳を付けさせられてきたけど、憂と純の2人に猫耳を付けた姿を見られるのは今日が初めてだ。

いや……そういえば憂の前では1回だけ付けさせられたことがあったっけ？

……まあ、過去の事はどうでもいい。

いずれにせよ、これだけは間違いない断言できる。

”すごく恥ずかしい”と……。

「ねえねえ！　せつかく猫耳つけてるんだしさ、『にゃ〜』って言うってみてよ」

「はあ！？　絶対やだ！」

「え〜？　そこはやつとこつよ！　廃部になつてもいいの！？」

「うっ、それは困る……って、それは今、関係ないでしょ！」

「私も見てみたいなく、梓ちゃんの鳴きマネ」

「憂まで！？　ぜ、絶対やらないからね！」

「そつかあ、残念だな……。それじゃ、憂。帰ろつか？」

「なっ、ズルい！　そんなこと言ってやらせようとしたって無駄だからね！」

「それじゃ、先生。お疲れさまでした〜」

「しょうがないわね。気をつけて帰るのよ？」

ガチャッ。

「嘘です。ごめん。やります。やらせてください。お願いします」

「え〜？ でも恥ずかしいからやりたくないんでしょ？」

「やりたい！ すっごくやりたい！ むしろ、もう今すぐにでも猫になりたいくらいだよっ！！ ねっ！ だからやらせてください、お願いしますっ！」

「ふふふ……もう！ 初めからそう言えばいいのに」

純にまんまと嵌められた。

この時、私の胸の中はやりきれない気持ちでいっぱいになっていたのは言うまでもない。

というわけで……。

「はい！ それじゃ、お願いしますー！」

「よ、よっっ！ ……にゃ」

「あ、ちょっと待って！ せっかくの猫耳メイドなんだし、『にゃ〜』って言ったあとに『おかえりなさいませ、ご奉仕するにゃん』って言うのはどうかしら？」

「ええっ！？ ちょっと、先生！ なんですか、そのセリフは!？」

「あ！ それ、いいですね」

「ちょっと！ 純も同意しないでよー！」

「ほらほら、梓」

「梓ちゃん、ファイト」

(梓ちゃんの鳴きマネ……わくわく)

うっうっ……。

純や山中先生はともかくとして、憂まで目を輝かせながらこっち
を見てるよ……。

……うんっ。

……よしっ！

こっとなったら、もう当たって砕けるだっ！

よしっ……！

ちってちるっ！ ちるぞっ！…… ちってちるですっ！……！

……ガチャッ。

「にゃ、にゃ。おかえりなさいませっ！ ご奉仕する、にゃん」

……。

状況を説明すると……。

この時、私は純の命令で「にゃ〜」と言えと言われ、さらに山中先生から具体的なセリフのリクエストまでもらった。

そして恥ずかしい気持ちを抑えながら、みんながキラキラした目で注目する中、私は決死の覚悟を決めてセリフを言った。

まさにその時だった。

セリフを言うのと同時に見知らぬ女の子が部室に入ってきたのだ。今どき珍しい三つ編みのおさげ頭に、大きめの丸い眼鏡をかけた女の子。

さらにその子の制服のリボンの色は青で、これは去年まで唯先輩たちが付けていた色だ。

そう、つまり……。

「あの……ここ、軽音部……ですか？」

「は……はい、そうです……。見学……ですか？」

「はい……」

考えられる限り、最悪のタイミングで見学希望者が来てしまった。

私が恥ずかしい気持ちを押し殺しているのは言っまでもないけど、相手の子も同じように顔を赤らめている。

おまけに態度もよそよしくて、お互い、この上ないほどに気ま
ずかった。

「え、え〜っと……（どうしよう、早く案内してあげないと!）」

「あら？ あなた、確か森江さん……だったわね？」

「えっ？ あ！ 山中先生！ 先生がなんでここに？ ひよっとし
て先生が顧問なんですか!？」

「ええ、そうよ」

この気まずい空気を変えてくれたのは、以外にも山中先生だった。
森江さんと呼ばれた女の子は山中先生の姿を見た途端、驚きと嬉
しさの入り混じった口調で先生に話しかけ始めたのだ。

私は山中先生に質問をした。

「先生。知っている子なんですか？」

「ええ、私が担任しているクラスの子なのよ。私、今年は1年生の
担任になったんだけど、もしかして知らなかった？」

「はい。今、初めて知りました」
なるほど、そういうことか。

山中先生と話をしている森江さんの表情はすっかり明るいものに
変わっていて、先生も優しい笑顔と柔らかい物腰でそれに応えてい
た。

先生の外面の良さは相変わらずのようだが、今回はそれに助けられた。

私は心の底から、ほっとしていた。

まあ、それでも恥をかかされた事実が変わるわけではないんだけど。

「それじゃ改めて……。いらっしやい、軽音部へようこそ！ ほら、こっちに座って！ 憂、お茶の準備お願い！」

「うん、オツケー」

「え？ お茶って……」

森江さんは若干、戸惑いながらも純に促されるまま、案内された席に着いた。

一方、憂はすっかり手慣れた様子でお茶の用意をしていた。

ちなみにその光景を見て「どうせメイド服を着せるなら憂の方がよかったんじゃない……」と思ったのはここだけの話だ。

「それじゃ、えっと、はじめまして。1年3組の森江もりえひとみ瞳とみって言います。今日はよろしくお願いいたします」

「部長の中野梓です。こちらこそ、よろしくね……。と、こんな変な格好でごめんね。普段はこんなこともないんだけど」

「い、いえ、そんな変なんて！ とっても似合ってますよ！ むしろ、すっごく可愛いと思います！」

「うんうん、確かに。私もそう思う！　ここまで猫耳が似合う子、私も初めて見たよ！　ねえねえ。せっかくだからさ、もう一回』にや〜』って言うってみてよ」

「また！？　絶対やだ！　だいたい、さっきだってすごく恥ずかしかったんだからねっ！」

「はいはい、ごめんね。……あつ。私、鈴木純！　よろしく！」

「平沢憂です。今日はゆっくりしていつてね」

憂は簡単に自分の自己紹介を済ませると、森江さんの目の前に紅茶の入ったティーカップを置いた。

「はい、どうぞ。熱いから気をつけてね」

「ありがとうございます……。って、あの、学校でこんなことして大丈夫なんですか？」

「うん？　そうだね、私も最初はびっくりしたんだけど、別に全然問題ないみたい。だから遠慮しなくていいよ　お砂糖はどうする？」

「あ、じゃあ2本お願いします」

憂からスティック状の袋に入った砂糖を2袋受け取った森江さんは、それを手元の紅茶に入れて混ぜ始めた。

そして緊張した面持ちのまま、彼女は紅茶の入ったティーカップを、その口元へと運んだのだった……。

「あ、美味しい。でも、やっぱり音楽室でお茶って、なんか変な感じしますね」

「そうね。普通は音楽の授業をする場所だからね」

そう言いながらも、すっかり慣れた様子でティーカップに口をつける山中先生……。

（はぁ……幸せ）

「先生……。そういう割にはすごく嬉しそうな顔してますよね」

とても幸せそうにお茶を楽しむ山中先生と、そんな先生の姿を苦笑いを浮かべながら眺める森江さん。

そんな森江さんの視線を気にもとめず、山中先生は森江さんにひとつ質問をぶつけた。

「ところで森江さん。なにか楽器の経験はあるの？」

「いえ、まったく。学校の授業でちょっと触ったくらいですね」

「そう。だったらギターとかも」

「はい、弾いたことありません……。あ、でもクラシックギターだったら授業で何回か触らせてもらったことがあります」

「なるほどね……。だったら梓ちゃん。せっかくだしギター触らせてあげたらどうかしら？」

「そうですね！　じゃあ、私、ちょっと準備してきます」

「え！？ いいんですか？ 私、ギターなんて触ったこともないのに大丈夫かな……」

「いいのいいの！ 誰だって最初は初心者なんだから　じゃあ、梓ちゃん。よろしくね」

「はい！　少し待っていてください！」

そう言っただけ私はいそいで準備を済ませると、早速ギターを森江さんに持たせてあげた。

「わっ、結構重いですね。音楽の授業で使ったギターと全然違う……」

「うん、そうだね。クラシックギターって中は空洞だから結構、軽いからね」

「へえ、そうなんですか。これって立って弾くときはどうするんですか？」

「それはね、こうして肩にストラップをかけて……はい。これで立つても大丈夫だよ」

「ありがとうございます。えっと、それじゃあ、せつかくですし、立ってみていいですか？」

「うん、どうぞ」

そう言っただけギターを抱えながら、森江さんは立ちあがった。

ストラップは森江さんの肩にしっかりフィットし、安定した状態でギターを支えていた。

「わゝ、森江さん。すごく様になってるよゝ！」

「ねえ、どうよ!? なんか気分だけでもミュージシャンっぽくなった気がしてくるんじゃない!?」

「え、えゝつと、そ、そうですね……。確かになんだかちょっとカッコよくなったような気がするかも……。って言うか、その……。あぁっ、もう! 何言ってるんだろ、私! すいません、気のきいたコメントができなくて」

この時、森江さんは嬉しさと恥ずかしさが入り混じったような照れ笑いを浮かべていた。

それに憂と純が褒めてくれたことも影響したのだろう。顔色が少し赤くなっていた。

「それじゃ、まずは適当に音だけ出してみよっか。特に難しいことは考えずに好きなように弾いていいからね。はい、ピック」

「あ、どうも……。えゝつと、これ、どうやって持てばいいんですか?」

「んゝとね、まずは人差し指を……」

その後、私は森江さんに自由に弾いてもらいながら、まずは必要なことを少しだけ教えてあげた。

と言っても、ピックの握り方や指板の押さえ方のポイントくらいだけど……。

それからアンプとギターを繋いで、大きな音を出すことも実際に体感させてみた。

ギヤーーーーーン!!!!!!

「きゃっ！　すごい、さっきまでの音と全然ちがいますね！」

「へへっ、すごいでしょ？　ここからアンプのつまみをいじったりしながら、自分好みの音を作っていくんだけど……」

そう説明しながら、私はアンプを適当に弄ってみた。

高音を強めにかけたり、逆に中低音重視のセッティングにしたり。ハウリングが起こりそうなほど歪みを強くしてみたり、クリーンな音にしてみたり。

音が変化するたびに森江さんが驚きの声を挙げていたのが印象的で、その姿を見てるのがちょっと楽しかった。

そうしてギターを体感させながら、数分後……。

しばらくして、純からこんな提案が出た。

「ねえ。せっかくだからさ、森江さんに私たちの演奏を聴いてもらわない？」

私は即答で返事をした。

「いいね、それ！ やろっやろっ！」

「え？ 演奏してくれるんですか！？ すごい、すごく聴きたいです！」

森江さんも嬉しそうに、そう言ってくれた。

私は森江さんからギターを受け取ると、すぐに私たちは準備を始めた。

*

「よしっ、OK。梓は？」

「私もOKだよ。憂、お待たせ！」

「カウントは梓ちゃんが出すんだったよね？」

「うん……。それじゃ行くよ！ 1、2、3、4！」

ジャジャジャジャジャッジャッ、ジャジャジャッ、ジャジャジャ

ッ
……。

……それから、1週間後。

#1 新歓！（B面）？（前書き）

1週間が経ちました。

ちなみに森江さんは大変満足して帰っていったそうです。

#1 新歓！（B面）？

ジャジャッ、ジャジャッ、ジャーーーーン！！！！！！

パチパチパチパチ。

「すごい！目の前で見るとやっぱり迫力が違いますね！」

「はい！カッコよかったです！」

「ありがとう。そう言ってもらえると私たちも嬉しいよ」

「それじゃ……そろそろ行こっか？」

「そうだね。それじゃ、私たちはこれで」

「うん、わかった。今日はわざわざ来てくれてありがとうね」

「いえ、こちらこそ！すごく楽しかったです！」

「はい。お茶までごちそうになっちゃって……。本当にありがとうございました！」

「いえいえ、どういたしまして。それじゃ、気をつけてね」

「はい！」

「それじゃあ」

「失礼しました！」

ガチャッ……バタン。

「……ふう」

「毎度のお勤めご苦労さまです！ 中野部長！」

「何それ？ 私は会社の重役かっつての」

「2人とも。お茶入れたよ」

「お、さすが憂！ 気がきく……って、なんか気づいたら私も軽音部の空気に毒されてきたかな」

「むっ！ それ、どういう意味？ ……いや、言いたいことはなんとなくわかるよ。確かに普通、部活でお茶なんてしないもんね」

「そうそう。ジャズ研なんてさ、1に練習、2に練習って感じで休憩時間も決まってたんだもん。お茶会なんて絶対ありえないし。なんだ、梓。わかってんじゃない」

「そりゃ私だつて最初は抵抗したんだよ？ でも、律先輩や唯先輩のペースに乗せられて、気づいたら、いつの間にか馴染んで……」

「そうして先輩たちに飼いならされてダメな子になった、と」

「そんなことないもんっ！ 私はちゃんと練習もしてるもん！」

「はははっ！ ごめんごめん、冗談だつて！ 梓は頑張ってるよ！」

「もっっ」

私は頬を膨らませながら、（たぶん）顔を真っ赤にしながら怒った。

そんな私をなだめるように、純は笑顔のまま謝ってきた。

まあ、いつも通りの光景だ。

憂が私と純の目の前にお茶の入ったティーカップを置いた。

「はい、梓ちゃん。新入生の対応、お疲れ様」

「ありがと、憂。今年の新入生、見学にはポツポツと来てくれるよね」

「そうだね。その中から誰か1人でも入ってくればいいんだけどね……」

「そう、最低でも1人！ 1人でも入ってくれば、全てうまくいきそうな気がするんだけど……」

そう、見学者は来てくれるんだ。
楽器を触らせてあげたり、新入生の前で演奏を披露したり、こう
してお茶を振舞ってあげたり……。

やることはしつかりとやっているつもりだし、実際、新入生の受
けもなかなか良かった。

ただ、肝心の入部希望者はというと、これがなかなか現れない。
今までの見学者の中ではもっとも感触が良かった森江さんでも、
あれ以来、姿は見せていない。

まあ、他の部活もいろいろと見て回りたいて言ってたから、無
理もないんだけど……。

果たして、入部希望者は現れてくれるんだろうか？

正直、不安だ。

ミルクティーを一口飲み、口からティーカップを離れた瞬間、私
の口からは自然とため息が漏れてしまった。

「はあ……。うちの部って、そんなに魅力ないのかなあ？」

「そんなことないと思うけどなあ」

そう言いながら、純は一口、紅茶を啜った。

「ふう。まあ、まだ期限まであと2週間もあるんだしさ。もうちょ
っと頑張ろうよ！ ねっ！？ ……あ、でもジャズ研はもう5人く
らい入ったって言ってたっけ」

「……はあゝあ！ ほんとに大丈夫かな、この部……。嫌だな……
廃部になるの」

「う、ごめん、梓……。だ、大丈夫だって、1人くらいすぐに来るよ！ ほらほら、お茶が冷めちゃうよ！」

「もう。あんまり落ち込ませるようなこと言っちゃダメだよ、純ちゃん。あ、そつだ。ねえ、純ちゃん。そういえばジャズ研で思い出したんだけど」

「ん？ 何？」

純が憂の方に視線を向けた。

「純ちゃん、最近ずっと軽音部に来てるけど、ジャズ研の方はどうなってるの？ 行かなくて大丈夫なの？」

「あれ？ 言わなかったっけ？ 私、ジャズ研、クビになったんだよ」

この言葉を聞いて、憂は一瞬、氷のように固まった。それから、すぐに心の底から驚いたような声を挙げた。

「……ええっ！？ なんで！？ 何！？ 純ちゃん、何か悪いことでもしたの！？」

「あっ、いや、別にそういうわけじゃないんだけど」

「純。今のは言い方が悪すぎるよ」

ちなみに私は純がジャズ研を辞めたことはすでに知っている。

「そうだね……ごめん、憂。変な言い方しちゃって。クビってのは嘘。正確には私の方から辞めたんだ」

「なんだ……ほっ。もう、あんまり脅かさないでよ」

憂はほっと胸をなでおろした。

それから一呼吸おいて、すぐに純に理由を尋ねた。

「でも、なんで？ ひよっとして軽音部に集中するために」

「そうだね。やっぱりそれが一番かな。今年、受験生だし……。まあ、そうじゃなくてもこの学校、部活の掛け持ちは禁止してるしね」

「そうなんだ。でも、ジャズ研の人たちもよく許してくれたよね」

「いや、簡単だったよ？ 軽音部の事情を説明したら、みんな、あっさり納得してくれたし」

「あゝ、なるほど。確かにそうかもね。今のままじゃ軽音部、廃部になっちゃうかもしれないし……。じゃあ、純ちゃんは軽音部を救うためにジャズ研からやってきた正義のヒーローなんだね！」

「そう、私は軽音部を救うためにやってきた救世主！ そして、軽音部とジャズ研を結びつけるための大事な愛の架け橋なんだよ！……あ、でもその割には最後にジャズ研のみんなから『あれ？』

なんでまだいるの？』とか『来る場所間違えてるんじゃない？』とか言われながら送られたっけ……ははっ。いくら冗談でもきついよね……」

「純……。もしかして、本当は嫌われてたんじゃない？」

「なっ！？ そんなことな〜いつ！ ってか梓、さっきの仕返しにしては今の一言は重すぎるよっ！」

「はいはい、悪かったよ」

「くう〜、うい〜」

「よしよし。もう、2人とも。喧嘩しちゃだめだよ」

泣きつく純を憂は優しく慰めてあげている。

そして、そのまま憂ははっきりとした口調で私たち2人に優しく注意をした。

確かに自分でも今の一言はちょっときつかったかなと思ったので、私はすぐに純に謝った。

「そうだね。ごめん、純。ちょっと言い過ぎた」

「いいよ、別に。私もさっき、梓に無神経なこと言っちゃったしさ」

「ううん……いや、純の言うとおりだよ。私、ちょっとネガティブになりすぎてたかも……うん。これからはもっと前向きに考えるようにしないかね。さっき純も言ってたじゃん。あと2週間”も”あるって……うん！ それだけ時間があれば大丈夫だよ、きつと！ なにより去年とちがって今年は見学者が来てくれてるんだからね！」

「お！ その意気だよ、梓！」

そうだ、ウジウジ悩んでたって何も解決できない。

ここで部長の私が暗い顔してたら来るものも来てくれなくなっちゃう。

ここは頑張つて明るく振舞わなくっちゃ！

大丈夫、今の私は1人じゃない。

まず、憂がある。

それに、純もわざわざジャズ研を辞めてまで軽音部に入ってくれた。

それから、純を送り出してくれたってことは、ジャズ研の皆さんも軽音部が廃部を免れるために味方をしてくれたってことだ。

たまに足を引っ張られることもあるけど、なんだかんだで山中先生もいろいろと助けてくれる。

そして、今でもしよっちゅうメールをくれる唯先輩をはじめ、律先輩や漣先輩、そしてムギ先輩も変わらず軽音部のことを応援してくれている。

なんだ。こうして考えてみると、私、けっこう味方がいるじゃないか。

そう思うと、自然と元気が出てきた。

「うん、私、もっと頑張るよ！ 2人とも！」

「梓！」

「梓ちゃん！」

「ようし……！！ 新入部員獲得目指して頑張るぞー！」

「「おー」」

ガチャツ、バンツ！

「たのも——————!!!!!!!!!!!!!!」

#1 新歓！（B面）？

ビクッッ！！

2人に向かって檄を飛ばし、右手を挙げて3人で新たに決意を誓い合った、その時だった。

1人の女の子が勢いよくドアを開け、私たちの声をかき消すような大声を挙げながら入ってきたのだ。

「うわっ、びっくりした……。もう、脅かさないでよ……」

純がぼつりとつぶやいた。

その後、すぐに続けて、純は部室に入ってきた女の子に話しかけた。

「すみません、見学希望の方ですか……。って、あれ？ あなた、3年生？」

「ん？ そつよっ？」

え？

純の指摘を聞いて、私は改めて、入ってきた女の子の方に目を移した。

ベージュ……。いや、クリーム色かな？

とにかく、そんな感じのかなり明るめの茶髪で、それを左右対称

のお団子状にして留めてある。

さらにそのお団子は真っ白な布飾りで包まれていて、漫画とかでよく見る中国人みたいな髪型に仕上がっていた。

いわゆる”お団子頭”ってやつだ。

身長は女の子にしては高めで、もしかしたら溲先輩と同じくらい（およそ160センチ）あるかもしれない。

そして、肝心の制服のリボンの色はというと……。

あ、本当だ。赤い。私たちと同じ色だ。

このことから、この子は私たちと同じ3年生であることがわかった。

でも、なんだろ。

この子、どこかで見たことあるような気がするんだけど……。

そんなことを考えているうちに、お団子頭の女の子が口を開いた。

「え？　なんでそんなこと聞くの？　……あつ！　まさか私の顔、

まだ覚えてないとか言うんじゃないでしょうね？　鈴木さん」

「えっ！？　なんで私の名前……？」

自分の名字を言い当てられ、純は驚いていた。

どうやらこの子は私たちのことを知っているようだ。

つてことは逆に、私たちもこの子にどこかで会っている可能性が高い。

でも、どこだったけ？

確か、とっても身近なところで見てるような……。

うん……。

……。

……あっ！

思い出した！

頭の中で全ての謎が解けた、その時。憂がお団子頭の女の子に声をかけた。

「えっと……林さん、だよね？」

そう！ 林さん！

一度も話したことはないけど、確かに姿だけは何度も……という
か毎日見ている。

だって彼女は私たちの……。

「え……？ 憂、知ってる子？」

「何言ってるの、純ちゃん。私たち、同じクラスじゃない」

「同じクラス？　こんな子、うちのクラスにいたっけ……あ」

どうやら純も思いだしたようだ。

そう。この子の名前は林鈴はやしすずさん。

私たち3人のクラスメートだ。

特別、私たちと仲が良いわけではないが、明るくて元気な性格と誰とでも仲良く話をするその姿はクラスの中でも非常に印象に残るものだった。

それにしても、こんなに目立つ子、なんで私はすぐに思い出せなかったんだろ？

ん……。ずっと軽音部のことばかり考えていたから、たぶんそのせいかな？

林さんは私たちの方をじゅっと見ながら、やがて、こう言った。

「ねえ、ここって軽音部であってるよね？」

「は、はい！　そうですー！」

「別にタメ口で良いよ、中野さん。それで……ねえ、他の部員は？　ひょっとして、あんたたち3人だけなの？」

「うっ！　う、うん……。実はそうなんだ……」

「ふん、そうだったんだ……ってことはさ、新入生はまだ誰も来てないってことになるんだよね？」

「うっ！　そ……そだね……見学者はポツポツと来てくれる……」

けど……」

「ふうん、そつかあ。ねえねえ。その中にさ、ちょっと変わった見
た目の子たちが来なかった？ 髪の毛が真っ白な子とか、やたら顔
にピアス空けてる子とか！」

「えっ？ いや、そんな子は来てないかな……まだ」

「あれえ？ ふうん、そうなんだ……ぼそぼそ（ったく、何や
ってんのかしら。あいつら）」

うつつ、さつきから痛いところを突いてくる……。

林さんは、今、私たちがもつとも悩んでいる事に容赦なく首を突
っ込んできた。

おかげで質問に答えるたびに、私は恥ずかしさで身が縮みそうに
なった。

穴があつたら入りたいとは、まさにこのことだ……。

「ちょっと、あんた！ 入ってくるなり、いきなりそんなことばっ
かり聞いてくるなんて失礼じゃない！ うちだって、いろいろと事
情があるんだよ！」

純が部員の人数に関する質問ばかりしてきた林さんに怒りをぶつ
けた。

うん、確かに。純の主張はもつともだ。

「えっ、そう？ ごめんね。いや、別に馬鹿にしてるわけじゃない
んだよ？」

特に悪びれる様子もなく、林さんはあっけらかんとした態度でそう答えた。

「たださ、ここまで人数少ないと廃部とかにならないのかな〜とか、ちらっとそんな風に思っただけよ」

グサツ！！

決定打……。

言われた瞬間、私はその場に崩れ落ちそうになったけど、それだけはなんとか頑張っただけでこらえた。ただ、その代わり、大きなため息が漏れるのだけは防ぐことができなかった。

「はあ〜あ……！！」

「……あれ？ まさか、凶星だった？」

「……あんた……喧嘩売ってんの？」

純は相当怒っていた。

その目は明らかにいつもより攣りあがってて、今にも食ってかかりそうな勢이었다。

「あっはっは！ いや〜、ごめんごめん。そっか、そんなにやばい

状況だったんだ！ あんたたちも苦労してんのね。まあ、なんとか頑張ろうよ！ 廃部にならないようにさ！」

そう言い終わると、林さんは大声で笑いだした。

「……………」

私はもう何も言えなかった。

その一方で、純が拳を硬く握りしめながら無言のまま、林さんに向かっていこうとした。

その様子にただならぬ雰囲気を感じた憂は、慌てて純の体を抑えた。

「憂、離して！ こいつ、1回ぶん殴ってやないと気が済まない！」

「じゅ、純ちゃん、落ち着いて！ な、なんか林さんも悪気はないみたいだし」

「あ…………あれえ？ もしかして怒らせちゃったあ？ ごめんね」

「うう…………こいつ、むかつくう！」

「と、ところで林さん！ 音楽室に来たってことは、うちに何か用があるから来たんだよね！？ 何だった！？」

憂は純の体を抑えながら、慌てた口調で林さんに軽音部に来た理由を尋ねた。

「お、よく聞いてくれたわね！ 理由は他でもないわ。私、軽音部に入部しに来たのっ！」

……えっ！？

”軽音部に入部しに来たの”？

”軽音部に入部しに来たの”……。

”軽音部に入部しに来た”……。

”軽音部に入部”……。

”軽音部に入部”……。

……入部！？

「ええっ!?!」

この言葉に、私は他の誰よりも真っ先に反応した。
さつきまで下を向いて落ち込んでいたのも忘れ、私は無我夢中で
林さんに駆け寄った。

「ほ、本当に!?! ほんとにうちに入部してくれるのっ!?!」

「おっ、いきなり元気になったね……。うん、私、嘘は言わないわ
! だから安心して あ、ところでさ。部長って誰? 入部届け」

「私! 私ですっ!」

「おおっ……。! そ、そうだったんだ……。てっきり平沢さんだと思
ってたわ。それじゃあ……。ほい、これ」

そう言っつて、林さんは私に入部届けを手渡した。

そこには簡単な志望動機と一緒に”軽音楽部”という文字がはっ
きり書かれていた。

「う、うん! 確かに受け取りました!」

「よかったね、梓ちゃん」

林さんから入部届けを受け取り、私と憂は素直に喜んだ。

「……いや、ちょっと待って。話が唐突過ぎてわけわかんないんだけど。そもそも、あんた、なんでうちに」

ガチャッ！

「みんな、いる〜！？ 良い知らせ持ってきたわよ〜！」

純の言葉を遮るように、山中先生が入ってきた。

私と林さんを含めたみんなが一斉に山中先生に注目した。

「って……誰、その子？」

山中先生は林さんの姿を見て、すぐにこう尋ねた。
林さんはすぐに先生に向かって自己紹介を始めた。

「はじめまして、林鈴でえ〜っす！ 今日から軽音部に入部するこ
とになりました！ よろしくお願いしま〜す！」

「えっ、嘘！？ 新入部員なの！？」

「あっ、はい。ついさっき、入部届けを貰いました」

そう言つと、私は入部届けを山中先生に手渡した。

山中先生はそれを受け取ると、軽く目を通してから、再び林さん
に話しかけた。

「ふうん……なるほど。ドラム希望なのね。でも音楽経験はないのね？」

「はい！ でも、やるからにはとことんやるつもりですよ！」

「そう……わかった、歓迎するわ！ 私は顧問の山中さわ子よ。よろしくね」

「ん？ 山中さわ子？ どこかで聞いたような……。……あつ、思い出した！ ひよつとして、あなたが噂のさわちゃん先生！？ 去年、文化祭のときにほとんどのクラスの衣装を作ったっていう伝説を作った、あのー！」

「さ、さわちゃん先生！？ そつ、そうね……。でも去年はちよつと手を広げすぎちゃったかなあ……。……」

「へえ、こんな美人の先生だったんだあ。これからよろしくお願いします」

「あつ、あらつ、嬉しいこと言ってくれるわね……。ええつ、こちらこそよろしくね」

林さんは快活な笑顔で、対して山中先生はちよつと苦笑いを浮かべながら、お互いに挨拶を交わした。

「あの、そういえば先生。良い知らせがあるって言ってましたけど、なんですか？」

2人の挨拶が済んだところで、憂が山中先生に質問をした。

「ああ！ そうだったわね。ごめんね、もう入ってきていいわよ」
部室のドアに向かって、山中先生がそう呼び掛けた。
すると部室のドアが開き、見覚えのある、三つ編みのおさげ頭をした女の子が入ってきた。

「ど、どうも、皆さん。おはようございます」

「あっ！」

「森江さん！」

まず憂が驚き、そのすぐ後に私と純の声が重なった。

1週間前に見学に来てくれた森江さんが、再び軽音部に来てくれたのだ。

この1週間、何人かの新生が軽音部の見学に来てくれたことはさつきも話したけど、2回目の来訪となると森江さんが初めてだ。
そして、山中先生の口から、私たちにとって最も良いニュースが伝えられた。

「そうよ！ 森江さん、軽音部に入部してくれることになったの！」

「ええっ！」

「うそっ！？」

「ほんとですかー！！」

私、純、そして憂の3人は嬉しさのあまり、勢いのついたまま山中先生に詰め寄った。

「あなたたち……。気持ちはわかるけど、少し落ち着きなさい」

「森江さん、本当に軽音部に入部してくれるの!？」

興奮が収まらない状態で、純が言った。

森江さんはやや緊張した様子ながらも、笑顔でこう返してくれた。

「はい。他にもいろいろなクラブを見学させてもらいましたけど、軽音部が一番強く印象に残ってて。遊び心もあって他の部より楽しそうだなって……。あ、あと、部長さんの猫耳メイド姿とか……。か、可愛かったですし……」

「えっ? かわいかった……?」

「は、はい、とっても。先輩の猫耳メイド姿、すごくよかったです! 体張ってて、部のために一生懸命だなって思いましたし」

「そっ、そっ……。ありがとう」

「ねっ! だから言ったでしょ、梓ちゃん? 女の子はみんな、かわいいものが好きなのよ」

「はぁ……」

そうだったんだ……。

思い起こせば、猫耳メイド姿で対応した新入生は森江さんだけだ。

それ以降、私は求められてもメイド服はおろか、猫耳すら絶対に
つけなかった。

新人生が引くと思っただからだ。

ところが森江さんは、そんな私のメイド姿を「可愛い」と言っ
てくれた。

「それどころか「遊び心がある」「一番印象に残った」さらには「
体を張ってて一生懸命だった」とまで言ってくれている。

それはつまり、あの日のメイド姿が森江さんの入部のきっかけの
ひとつになったことを意味している。

嬉しい反面、私は少し複雑な気分になった。

でも……まあ、いつか。

「うん、わかった。これからよろしくね、森江さん」

「はいっ！ ご指導のほど、よろしくお願いします！」

森江さんは深々とお辞儀をした。

うん。大丈夫そう。見た目通り、礼儀正しい子だ。

森江さんとは、なんだか仲良くやっていけそうな気がしてきた。

「よかった。とにかくこれで廃部は免れたね、梓ちゃん！」

「うん、これで律先輩たちにも胸を張って報告できるよ！」

「えっ？ 軽音部って、そんな危ない状況だったんですか!？」

「うん、実はね……ちよつと危なかつたんだ。だからさ、森江さんが入ってくれて本当に助かったよ。ありがとね」

「そ、そんな……。私、別にそんなつもりで入部したわけじゃ」

「ははっ、照れてる照れてる。ほんじゃ！ 梓、憂、それに森江さん！ 4人で力合わせて頑張ろうね！ おー」

「ちよ、ちよつとちよつと！ 私は!？」

「え、何？ まだいたの？ 出口はあつちだよ」

「何よ、寂しいこと言わないでよ！ 私も一緒に頑張らせてよ!」

「うん、いいよ。お茶酌みと荷物運び、どっちがやりたい？」

「鈴木さん……。わかった。あんた、喧嘩売ってんのね？」

「まあ、そうなるのかな……。だいたいあんたのこと、さつきから気に入らないと思ってたんだよね」

「クラスメートの顔も覚えてなかつた女がよく言うわね……。上等じゃない。いっとくけど、私、喧嘩で負けたことなんて一度もないんだからね」

「望むところよ……。！ さあ、かかってきな!」

「ちよ、ちよつと2人とも！ ストップストップ!」

本気で殴り合いの喧嘩が始まりかねない雰囲気だったので、私と

森江さんは純と林さんを必死でなだめた。

さらに、憂がそんな2人に慌ててお茶とケーキを進めてあげると、2人は意外とあっさりおとなしくなってくれた。

おかげでその場はなんとか治めることができたんだけど……。

*

軽音部の部員の数は、私を含めて5人になった。

おかげで私たちは廃部を免れることが出来ただけ……。

さっきの純と林さんのやり取りを見て、ちよっぴり先行きに不安を感じた。

果たしてこんな調子で大丈夫なのかな？ 軽音部。

ズズッ。

(おっ、このケーキ美味し〜い ……それにしても、夢と空はいつたい何やってるのかしらねえ?)

#1 新歓！（B面）？（後書き）

.....。

ガバアッ！！

私「あれ.....ここはどこ？ 私はだ」

バキッ！

.....ドサッ。

空「やったつすよ、鈴さん！ これでこいつ、当分、目え覚ましませんよ」

鈴「ごころつさん。こいつ、ほっといたら何喋りだすかわかったもんじゃないからね！」

空「あつ、ああ、そつすね.....（あんたは人のこと言えないけど

な」

鈴「……あれ？　ねえ、そっぴや夢はどうしたのよ？」

空「いや……それがあいつ、家に閉じこもっちゃって……メールも無反応だし、携帯も出てくれないんすよ」

鈴「ええっ、何それ！？　あんた、夢になにか変なこと言ってないでしょうね！？」

空「（ギクツ！）あ……あははは」

鈴「ん〜？　何か心当たりがありそうな反応ねえ……。まあ、いいわ。読者様の前で追求するわけにもいかないし、あとでゆっくり話聞くことにするわ……。いいわね？」

空「はい……」

鈴「それじゃあ改めて……どうも『そとばん！』もようやく！
話が終了しました！　「ここまで読んでくださった読者の皆さま、本当にありがとうございます」

私「ん〜……そもそも読者がいるのかどうかあやし」

…ガンッ！

ガン！　ガンッ！

鈴「はあ……………はあ……………」

空「ちょ、ちよつと鈴さん！　いくらなんでも叩き過ぎじゃ…」

鈴「はあ……………はあ……………さてっ　新たに瞳と私、リンリンが加入して無事、廃部の危機を免れることが出来た軽音部！」

空（スルーっすか）

鈴「果たして今後の軽音部の活動は！？　そして、軽音部に入部しなかった松本夢と石塚空の運命やいかに！？」

空「……………あ」

鈴「……………あぁっ！　そうだった！　ちよつと空！　そういやあなたたち、なんで軽音部に入部してないのよ！　ひよつとして夢が家に閉じこもった理由って……………」

空「え、え〜つと……………」

……………。

空「お疲れさまでした」ダッ！

鈴「あつ、こら！ 待ちなさい！ てめえ、私から逃げられると思
つてんのかあ！ おらあつ！」ダッ！

（空、鈴、このまま退場）

私「ううっ……や、やっと悪魔どもが去っていったか……。あ、え
っと……今後も『そとばん！』よろしくお願いしまゝす。てか更新
亀ですいません。なんとか納得いく文を書けるよう頑張りますので、
またお付き合いしていただければ嬉しいです。では、ここまで読ん
でくれてありがとうございます！」

オリジナルキャラクター紹介？（桜高生編）（前書き）

1話終了時点のキャラ設定です。

今後、大いに变化する可能性、大です。

あと、表つぽくしたせいで若干見づらいと思います（特に携帯の人）。

先に謝っておきます。

ごめんなさい。

追記（6/4）。

松本夢と森江瞳のイメージJCVを変更しました。

（著者）

オリジナルキャラクター紹介？（桜高生編）

名前 林鈴（イメージC・V：平野綾）
はやしずな

所属 私立桜が丘高等学校3年2組、軽音部（ドラム担当）

身長 161cm

誕生日 7月30日

星座 しし座

血液型 B

髪の色 亜麻色

髪型 左右対称のお団子頭（シニヨン）

趣味 アルバイト、料理

好きな物 祭り、金、宝石、あと派手な物ならなんでも

嫌いな物 犬、嘘、隠し事

似てる人 蘭花（ギャラクシーエンジェル）
ランファ

リスペクト ジョン・ボーナム（LED ZEPPELIN）

イメージカラー 金

性格

太陽のような明るさと鉄砲弾のようなまっすぐさ。

そして全力で獲物を狩るライオンのような行動力を併せ持った（
いろんな意味で）ムードメーカー。

誰とでも自分を隠すことなく接することが出来る。

また、何においても派手な物や派手な出来事を好む傾向にある。

欠点

多少、口が悪い。

思ったことをすぐ口にするため、知らず知らずのうちに言葉で他

人を傷つけることもしばしば。

あと、基本的にうるさい。

たまにうざい。

備考

通称”リンリン”（このニックネーム、本人は非常に気に入っています）。

キャラクターコンセプトは”派手好きなエセ中華娘”。

はじめは語尾に「アル」を付けさせようと思いましたが、『けいおん!』の世界観を壊しかねないうえ、それを素でやる人間はいくら可愛い女の子でも”痛い人間”になるのでやめさせました。

実家はラーメン屋を営んでいて、世間の評判も上々。

ちなみに父の名前は林良男（おしよ）といって、これがかなりの頑固おやじ。

鈴とはしょっちゅう口喧嘩をしていますが、実は親子仲は非常に良いです。

そんな良男さんですが、昔はバンドでドラムを叩いていたこともあったとか（本人談）。

超高校級の運動能力を持っており、中学時代から”有料で”運動系クラブの助っ人をたまに引き受けていました。

（いわゆる”助っ人アルバイト”。もちろん学校にはバレないようにはやっています）

ちなみに高校では1回3千円、レコード記録を更新するほどの好成績をおさめたら5千円貰えるというシステムになっています。

ただし、失敗したら0円。

ちなみに成功率は7割近いそうです。

成績は並。

松本夢とは幼馴染で、小さい頃から何かと彼女の面倒を見てあげています。

夢のことは、姿を見つけるとすぐに抱き締めてしまうほど好きですが、決して甘やかしているわけではなく、叱るときは一切、容赦しません。

なので夢を泣かせた回数もかなり多いです。けど、夢は今も変わらず、鈴に懐いています。

このことから、恐らく鈴は説教の仕方が上手なんだと思われます。(それを僕がうまく表現できるかは、また別の問題ですけどね)

名前 松本夢まつもとゆめ(イメージC・V:やくしまるえつこ)

所属 私立桜が丘高等学校1年3組

身長 148cm

誕生日 9月13日

星座 おとめ座

血液型 AB

髪の色 白

髪型 ロングヘアの姫カット(秋山澪とおなじ髪型です)

趣味 ホラー映画鑑賞(主にスプラッター)、部屋のコーディネート

ト

好きな物 お父さん、ジェイソン・ボーヒーズ)『13日の金曜日』が大好き)、ゴシック&pp;ロリータ

嫌いな物 自分の髪の色、人ごみ、綺麗事

似てる人 小学生時代の秋山澪、アイアンメイデン・ジャンヌ(シャーマンキング)、有村竜太郎(Plastic Tree)

リスケット Mana(MALICE MIZER)、マリリン・

マンソン (Marilyn Manson)、シド・バレット (PINK FLOYD)
イメージカラー 白

性格

とても良い子だが、その反面、非常におとなしくて自信なさげな性格でもある。

ただし、自分の好きなことには徹底的にこだわるというオタクみtainな一面も持っている。

そのため、特定の分野でものすごい能力を発揮することがある。

また、普段は自分の感情を頑張って押し殺している。

なので一度、それが表に出してしまうと感情が一気に爆発し、本人も制御できないほどの暴走をしかねないので注意が必要。

欠点

対人恐怖症（人見知りが激しい、知らない人とうまく話せないなど）

泣き虫。

動作（歩くスピードや手作業など）が異常に遅い。

備考

キャラクターコンセプトは”白髪のごスロリ美少女”。

この設定を思いついた時は「俺って天才だな」と思ったくらい画期的に感じたものですが…。

しかし、これが『シャーマンキング』に出てきたアイアンメイデン・ジャンヌとまるまる被っていた事実以後で気が付き、意気消沈…。

おかげでものすごく切なくなりました。

でも、『そとばん!』はこの子ありきで始めた作品なので、結局そのまま採用。

ですから皆さん。

”パクリ”って言わないでください。

分かっていますから……。

裏テーマとして「もし白髪少女が現実的な価値観で『けいおん!』の世界にいたら」というのがあります。

ただ、それをベースに現実的な反応を考えたりしながらキャラ作りをしていったら、なんだか全体的に暗い子になってしまいました。彼女には幸せになってもらいたいものです。

学業面ではかなり優秀。

真面目に勉強すれば常に学年10位以内をキープできるほどで、成績は非常に良い。

左利きで、ギターはレフティ仕様のものを使用します。

好きな音楽はHR/HM系やゴシック、ホラーチックな音楽を好んで聴きます。

また、60〜70年代のロックも好んで聴きますが、これは父親の影響。

使用ギターはGibson製の真つ黒なレスポール。

唯が使ってるギターの色違いといえれば分かるでしょうか？

父のお下がりですが、かなり良い音が出るので好んで使っています。

ちなみに”ゆめ”のアクセントは”ゆめ”ではなく”ゆめ

”となります（言ってる意味わかるかな？）。
要するにあれです。
愛（あい）と同じアクセントです。
みんなで発音してみましよう。
せくの、夢（ゆめ）。

名前 石塚空（いしづか くり）
（イメージC・V：沢城みゆき）

所属 私立桜が丘高等学校1年3組

身長 153cm

誕生日 6月6日

星座 ふたご座

血液型 A

髪の色 黒

髪型 ベビーショートヘア（ツンツンと逆立てているのが特徴）

趣味 ゲーセン巡り

好きな物 CHILDREN OF BODOM、Marlboro

rのメンソールタバコ、チュッパチャップス

嫌いな物 教師、ゴマすりをする人間

似てる人 大崎奈々（NANA）、土屋アンナ

リスペクト アレキシ・ライホ（CHILDREN OF BO

DOM）、DAITA（SIAM SHADE）

イメージカラー 黒

性格

いわゆる”不良”。

相手に接する態度も不良のそれなので、やや近寄りがたい。

だが、性格自体はかなり真面目で、特に好きなことに関しては努

力を惜しまない。

また友達想いで面倒見も良く、人見知りか激しい夢のことを何かと気遣っている。

欠点

興味のないことには全く関心を示さない。

あと、見た感じと雰囲気か怖い。

備考

キャラクターコンセプトは”不良少女”。

松本夢の対となるキャラクターとして考案したのがきっかけです。とはいうもの、僕自身にグレた経験がないので推測の域は出ないんですけどね……。

ピアスを空けています。

両耳に1か所ずつ、左側の下唇に2か所です。

ひよつとしたら、今後もさらにピアスを空けるかもしれません。

タバコを吸います。

具体的に吸い始めた時期は不明ですが、中学時代には既に吸っていたはず。

校則違反なのはもちろんのこと、法律にも違反しているのは言うまでもありません。

学業面はイマイチ。

それでも夢に勉強を教えてもらい、何より本人も真面目に頑張っているため、なんとか成績はキープしています。

使用するギターはB・C・Rich製の真っ白なWARBEASTという代物。

ボディもネックのヘッドも悪魔のように尖っている、見た目にも過激なギターです。

(詳しく知りたい方は”B・C・Rich”と”WARBEAST”もしくは”ワービースト”で検索してください)

まったくの余談ですが、そういえばこの前(5/7)、初めて『けいおん!』の大学生編を立ち読みで読みました。

相も変わらないまったり感で非常に面白かったんですが、そこで”和田昌”というキャラクターを見つけまして……。

その姿に愕然としてしまいました。

昌ちゃん……。

それと空……。

おまえら、キャラが思いっきり被ってるじゃねえかよっ!

まさか本家の『けいおん!』とキャラかぶりを起こすとは……。

あまりのシヨックにその日の夜は7時間しか眠ることができませんでした。

でも、まあ、このSSは所詮1人よがりのパラレルワールドなので気にすること全然ないんですけどね。

ははっ……。

頑張れ、自分。

名前 森江瞳もりえひとみ（イメージC・V：悠木碧）

所属 私立桜が丘高等学校1年3組、軽音部（担当は未定）（1話
終了時）

身長 157cm

誕生日 2月26日

星座 うお座

血液型 A

髪の色 限りなく黒に近いブラウン

髪型 左右に三つ編みを結ったおさげ頭

趣味 読書、裁縫（自分でぬいぐるみを作ったこともある）

好きな物 可愛いものなら何でも好き、甘いもの

嫌いな物 一部のスポーツを観戦すること（特に格闘競技。汗臭

そうなのがダメ）

似てる人 クララ（クイズマジックアカデミー）

リスペクト いきものがかり、SCANDAL、YUKI（JU

DY AND MARY）

イメージカラー ピンク、ブラウン

性格

勤勉。

決して派手さはないが、物事にはこつこつと取り込み、確実に目標を達成させるといふ堅実な性格。

責任感も強いので、周囲からも自然と頼りにされる学級委員タイプの女の子。

また全般的に可愛いものが大好きで、女の子らしくメルヘンチックなものに憧れる傾向がある。

欠点

地味。仕事は丁寧だが、やや遅い。

それ以外、特に欠点らしい欠点はない。

備考

レンズフレームの大きい丸眼鏡をかけています。

キャラクターコンセプトは”特になし”。

彼女の設定はほとんど即興で生みだしたに等しいです。

学業は優秀で、成績は常に上の方をキープしています。

もともと名前以外はほとんど考えておらず、しかも考えていたとしても、せいぜい「この子は空と夢の同級生にしよう」「ぐらいのものでした。

1話A面を書き終わった時点でもそうでしたし、1話B面を書き始めた時ですら、設定はおろか登場させる予定もありませんでした。それがまさか1話B面でいきなり登場し、おまけに軽音部にまだ入部することになるんですから、いやはや、わかんないものです。

なので、まだキャラの完成度は3割程度といったところでしょうか。

基本的にまったくもって”普通の女の子”なので、あのアクの強い（むしろアクだらけ）な『けいおん!』の面々の中でどんな動きを見せるのか。

今後は森江さんとも頑張っていこうと思います。

ちなみに担当させるパートはもう決めています。

その辺は2話あたりで明らかにさせてもらうつもりです……。

オリジナルキャラクター紹介？（桜高生編）（後書き）

さて、ここで唐突に問題です。

この子たちの苗字、実はある共通点があります。

では、その共通点とは一体なんでしょう？

ヒント。苗字をつけた発想は本家『けいおん！』とまったく同じです。

ヒント2。0話に出てきた出山光いでやまひかりと沢田京さわだみやこも仲間です。

#2 生徒と先生！（A面）？（前書き）

今回の語り手：山中さわ子

新たに林鈴（ドラム希望）と森江瞳（ギター希望）の2人を迎え入れた軽音部。

がらりと変わったメンバーに廃部を免れた安堵感も手伝い、練習できる環境が整うまでしばらくはまったりとした雰囲気でお茶会が繰り広げられ、会話に華を咲かせていました。

一方、山中さわ子も1年3組の担任として、また新生軽音部の顧問として生徒とのコミュニケーションを通じて、彼女もまた新たな居場所を作っていたのですが……。

（どうでもいいかもしれませんが）業務連絡。

イメージC.Vを一部、変更しました。

詳しくは『オリジナルキャラクター紹介（桜高生編）』をご覧ください。

#2 生徒と先生！（A面）？

唯ちゃんたちが卒業してから、約1月半。

さらに入学式を迎えてから、早くも2週間が過ぎて……。

今年の新生活も、そろそろ高校での新生活に慣れてくる頃かしら？

4月も半ばを過ぎると、みんなの本来の性格がどんどん表に表れ始めていた。

たくさん友達に囲まれて、早くもクラスのムードメーカーになりつつある子。

自分の席から離れず、一人で静かに本を読んでいる子。

そんな彼女に「ねえねえ、何読んでるの！？」って話しかけて一方的にあれこれ喋りだす、お節介な子もいる。

などなど……。

みんな、徐々に自分の居場所を作りつつある。

みんながどういう子で、どんなキャラクターの持ち主なのか？

それが最近、少しずつだけど分かってきた気がする。

もちろん個人差はあるけどね。

日が経つにつれて、だんだんクラスでのみんなのポジションがくつきりと浮かび上がってきたように思えたわ。

「先生、こんにちは！」

「あら、こんにちは。元気？」

「あ、先生聞いて！ この前、隣のクラスの子がね、先生の事……」
「ええっ、そうなの？」

そして、生徒たちとのコミュニケーションを通して、私もみんなと同じように新しい居場所を作っていく。

自慢じゃないけど、これでも私、生徒からは結構、慕われている方なのよ？

今年、担任をしている1年3組のみんなも好意的に接してくれるし、余所のクラスでも私に気軽に声をかけてくれる子が多いんだから本当、ありがたいことだわ。

でも、中には”私の事、嫌いなのかしら？”って思うような冷たい態度をとる子もいるんだけどね……。

みなさん、こんにちは。

山中さわ子です。

私立桜が丘女子高等学校に音楽教師として勤める傍ら、今年は1年3組の担任も兼任しています。

さらに吹奏楽部の顧問と軽音部の顧問も掛け持ちしているから、毎日とっても忙しいわ！

……まあ、仕事は好きだから全然問題ないんだけどね。

ちなみに私にも理想の教師像っていうのがあって、それで仕事のときは常におしとやかなキャラで他の先生方や生徒たちに接するよ

うにしているんだけど、これが結構疲れるのよね……。

でも、大丈夫！

だって、私には本当の自分をさらけ出せる心のオアシスがあるんだもの！

それは……ふふっ

さて、今日の憂ちゃんのおやつは何かしら

*

さて……。

全ての授業が終わって、今は放課後。

私は軽音部の部室でもある、音楽室の前までやってきた。

目の前の扉を開ける……。

「あら、もうみんな揃っているのね」

「」「」「おはようございますーすっ」「」「」

「あ、先生！ こんにちは」

「お、さわちゃん！ はろー」

「リンちゃん……。その呼び方、やめてくれないかしら？」

「え〜？ かわいいからいいじゃん。ねえ、瞳？」

「え？ あはは……」

この2人が最近、新たに加わった軽音部の新入部員よ。せつかくだから紹介するわね。

まずは1年3組の教え子でもある森江瞳さん。
レンズフレームの大きな丸眼鏡と三つ編みのおさげ頭が特徴的な見た目通りとっても真面目な女の子よ。

最初は”森江さん”って呼んでたんだけど、いつの間にかみんなの下で呼ぶようになったから、私も部活ではそう呼ばせてもらってるわ。

ちなみに担当はギター志望で、最近、軽音部への入部をきっかけに念願のギターを買ったそうんだけど……。

実はそのギターのことで、どうやら困ってることがあるみたいなの。

「そういえば、瞳ちゃん。最近買ったギターの事で悩んでるって言うってたけど……どうしたの？」

「あっ！ はい、そうなんです。色がとってもかわいくて、それで一目惚れしちゃったから思いきって買ってみたんですけど、なんか違和感があって……。先輩に触らせてもらったギターとちがうなっ

て……」

……かなり危険な買い方をしたわね、この子。
確かにインスピレーションも大切な要素ではあるんだけど……。

でも、初心者が見た目重視で買って失敗するって話もたまに聞くから、この時点で私は少し不安を覚えたわ……。

「そう……それで？　どんなの買ったの？　もしよかったら、見せてくれない？」

「はい。ちょっと待ってください」

そう言うと、瞳ちゃんは早速ギターをソフトケースから取り出して、こっちに持ってきてくれた。

「えっと、これなんですけど……」

あら……。

私の不安は的中した。

ギターを見た瞬間、私は一目で瞳ちゃんが感じた違和感の正体が分かったの。

というのも……。

普通のギターと比べるとネックは必要以上に長くて、ボディもやや大きめ。

おまけに張られている弦はとっても太くて、それも通常なら弦は6本ないとおかしいのに、このギターには4本しかない。

ギターをやっている人なら、もう分かるわよね？
そう。つまり……。

「瞳ちゃん……それ、ベースだよ？」

ここで梓ちゃんが口を挟んできた。

そう。梓ちゃんの言うとおり、瞳ちゃんが買ったのはギターじゃなくて、ベース。

鮮やかなピンク色のボディが目を引くプレジジョンベースだったの。

「えっ？ ベース！？ これ、ギターじゃないんですか！？」

「うん。ギターなら弦が6本ないとおかしいんだけど……ほら、よく見て。弦が4つしかないでしょ？」

「……ああっ！ ……はい……ほんと、ですね……4つ……
しかない……ですね……」

……。

瞳ちゃん、相当ショックを受けたみたい……。
彼女のベースを抱える腕が明らかに震えていた。

おまけに声色まで低くなっていて、それが彼女の深く落ち込んで
いる様子をさらに印象付けていたわ。

「そっか……。私、バカですね……。ギターとベースの区別もつか
ないなんて……」

「あつ……。！ で、でもねっ、瞳ちゃんっ！ べ、ベースもそんな
につまらない楽器じゃないよ！ むしろとくっても大事な……。そう
っ！ バンドの命って言えるくらい、ひ、必要不可欠なパートなん
だよっ！ ねえっ、純！！」

「えっ？ ああ、うん……」

梓ちゃんはできるだけ明るい口調を装いながら、必死で瞳ちゃん
を慰め始めた。

まあ、その必死さのせいで、却って空回りしてるのが見え見えだ
っただけど……。

……あら？

でもひょっとして、梓ちゃんの必死に励まそうとする気持ちが伝
わったのかしら？

瞳ちゃんの口元が少しだけ緩んだわ。

「……すいません、なんか気を使わせちゃって……。あの、そうい
えばベースの役割って何なんですか？ せっかくだから教えてほし

いんですけど」

「う、うん！ え〜っとね……。ひっ、一言で言っと”ドラムと一緒に楽曲全体のリズムを支えるパート”かなっ！」

「え？ ドラム……？ リズムを支える……？」

「あ……っ、ごめん！ ちょっと分かりにくかったよね……。え〜っと……」

「梓、少し落ち着きなって……」

ここで純ちゃんがフォローに入ってきた。

相変わらず慌て気味の梓ちゃんに苦笑いを浮かべながら、ね。

「ん〜……、瞳」

「あ、はい」

「せっかくだからさ、私が実際に弾きながら説明してあげよっか？ その方が分かりやすいっしょ！ ねえっ!？」

「え？ は、はいっ！ 助かります！ 是非お願いしたいです！」

「よっしゃ！ それじゃあさ、っ少しだけ瞳のベース借りてもいい？」

「はい！ っどっぞ」

瞳ちゃんからベースを受け取ると、まず純ちゃんは楽器の構造の、主にギターと異なる点について簡単に説明してあげた。

純ちゃんが極力分かりやすい言葉を選びながら話してあげたこともあって、瞳ちゃんはすぐに理解してくれたようだった。

次に純ちゃんがベースの役割について具体的に説明しながらルート弾きを実演し始めると、瞳ちゃんもそれに食い入るように耳を傾けていたわ。

ここでさわ子のワンポイント解説

ルート弾きっていうのは、コードの軸となる単音（これを”ルート音”っていうの）を一定の間隔で繰り返し弾き続ける、とってもシンプルな演奏法よ！

ただ、シンプルである分、音の間の取り方やピッキングのニュアンス次第で曲のノリが大きく変わっちゃうから、実はとっても奥深い奏法でもあるのよ

「へえ〜、なるほど……。よく分かりました。それじゃベースはバンドにとって、縁の下の力持ちってところですか？」

「まあ、そんなとこかな」

「そうだったんだ……。うん。これはこれで面白いかも」

「あと、これは余談になるんだけどさ。確かにベースはリズム主体

の楽器ではあるんだけど、ジャズとかだとベースでソロを弾いたり、メロディーを歌ったりすることもあるんだよ。例えばさ……」

そう言っつて、純ちゃんはベースでメロディを弾き始めた。

アンプを通していないから音は小さいけれど、その小さな音でもつても有名なあの曲のメロディーをやさしく歌い始めたの。

そう。とつても懐かしい、私も小さいころにビデオで見たことがある、あの映画の歌をね……。

「……あつ！ これっつて、ひょっとして『星に願いを』じゃないですかっ！？」

「そうそう。知ってるでしょ？ ま、バンドではベースがメインでメロディーを弾くなんてこと、滅多にないんだけどね……。例外はあるけどさ」

「そうなんですか……。でも、ベースってなんだか渋い楽器ですよ。ね。ギターよりも、なんだか大人らしい魅力があるって言うのかな。うん……。……よっつし、決めましたっ！ 私、ベース頑張ってみます！」

「おつ！ やる気になってくれた？ 嬉しいねえ、私も一生懸命、説明した甲斐があつたつてもんだよ！ でもね、瞳。一見、ギターより簡単そうに見えるかもしれないけどベースはバンドの要。舐めてかかると痛い目にあうからね！ 気をつけるんだよ！」

「は、はいっ！ もちろん舐めてなんかいませんよ……。むしろ、覚悟の上ですっ！ しっかりバンドサウンドを支えられるようになつてみせますっ！ 絶対に！」

「よく言った！ 大丈夫！ 私が基礎の基礎からみっちり鍛えてあげるからねっ！ 安心なさいっ！」

「はいっ！！」

「よしっ……！ 振り落とされないよう、しっかりついてくるんだよっ……！ 瞳っ……！」

「はいっ……！ よろしくお願いします、純先輩……！」

燃えてる……。

瞳ちゃんの”瞳”が真っ赤に燃えてるわ……。

うん……、それにしても何なのかしら？ この熱血スポ根^{こん}ドラマみたいなノリは……。

まあ、純ちゃんはなんとなく分からないこともないんだけど、瞳ちゃんも見かけによらず、意外と熱いハートを持った子みたいね。

何て言うか、この子は案外、運動部とかでもいけそうな気がしてきたわ……。

#2 生徒と先生！（A面）？（前書き）

前回のあらすじ

森江さんが”燃えました”。

#2 生徒と先生！（A面）？

さて、次に紹介するのはドラム志望の林鈴さん。

新入部員なんだけど3年生で、梓ちゃんたちとはクラスメートなんだそうよ。

本人は「リンリン」って呼んでくださ〜いっ！」って言うてたから軽音部でも”リンリン”ってあだ名が定着したんだけど……。

”リンリンちゃん”だと呼びづらいし、だからと言って生徒を呼び捨てするのも抵抗があるから、私は自然と”リンちゃん”って呼ぶようになったわ。

「……ねえ。そういやこの前、聞きそびれたんだけどさ」

「ん？ 何？」

純ちゃんが、リンちゃんに質問を投げかけたわ。

「あんださあ。3年生なのに、なんで今さら軽音部に入部しようと思っただの？」

「え？ ドラムやりたかったからだけど」

「ああ……。なるほど。そうなんだ……」

.....。

会話終了.....かしら？

2人とも、それ以上は喋らずに同じタイミングでお茶を啜^{すす}りだしたわ。

ズツ。

.....そして、まったく同じタイミングでため息をついたの。

「.....ふう」

.....。

「……………つて、終わり!?　ねえ!?　もうちょっと掘り下げて質問出来るんじゃない!?」

「えっ?　いや、だってドラムやりたかったからなんですよ?　それ以外に何か理由でもあるの?」

「いや……………。別にないけど……………」

「ほら!　だったら私、別に何もおかしいことしてないじゃん!」

「いや、でもさあ……………。『なんでドラムやりたいと思ったの?』とか、他にもいろいろ聞けることあるでしょ?」

「そっかあ……………。それもそうだね。じゃあさ、『なんでドラムやりたいと思ったの?』」

「(むかつ!)……………そ、それは……………家の倉庫でたまたま見つけて『いいなあ』って思ったから……………だけど……………」

「ふん……………そ」

……………。

会話終了、ね。

2人は再び同じタイミングでティーカップを手にとって、また同じタイミングでお茶を飲み始めた。

ズズッ。

そして、これまた綺麗過ぎるくらい同じタイミングでティーカップをお皿にそっと置いたの。

……カチャ。

……。

「……………だからさあっ!!」

「何よ!? ちゃんと質問したじゃない!!」

「違う! ち~~~~が~~~~う~~~~の~~~~!!!! ねえ、も
っと私に興味持って! もっと私にかまってよあ!! ねえ、え、
じゅ~~~~ん~~~~!」

「んあああもおっ! 鬱陶しいっ! さっきからブーブー、ブー
ブー文句ばかり……。あなた、本当に高? 精神年齢、幼稚園
で止まってんじゃないのっ!？」

「うっ……!! なっ、何よ……? そんなこと言うわけ……? あ
っそ、別にいいもん……。私、別にまだ子供でいいもん……。ぶつぶ
っ」

「ああ……もうっ! 泣くなって! わかった、わかった! 私が
悪かったよ! でもさあ、何も別にそこまで拗ねなくたっ」

ガバアッ!!

「うわっ! ちょ、こらっ! 離せっ! 抱きつくなあっ!!」

「うん、純の肌もちもち それに、髪がモコモコしててか
わい (スリスリ)」

「ちよ、やめろっ！ 離せいつ！ はーなーねーろっ！…！」

「んも〜、照れちゃってえ！ ほんと嬉しくせいに
……友情の証しにチュウしたる！ ちゅ〜」

「ひ、ひいいー！ キモい！ 寄るな！！ 顔を近づけるなあああ
……！」

「いいじゃない これくらいアメリカやイタリアじゃ、きつと
常識なんだろうなあ……！」

「って、なにそれ推測じゃないっ！！ てかここ日本だしっ！！！」

「も〜、細かいことは気にしなあいなのっ！ ほら、ちゅ〜ちゅ〜」

「た、助けてえええ！！！！！」

……この子、まさかレズじゃないわよね？

純ちゃんに軽くあしらわれ続けた鬱憤うつぶんを晴らすかのように、リン
ちゃんはまるで大好きなぬいぐるみをぎゅっと抱きしめる幼い女の
子みたいに純ちゃんを抱きしめていた。

さらには唇を突き出すように窄すぼめながら、純ちゃんの顔にキスマ
でしようとしたす始末。

その姿は、まるで事ある毎に梓ちゃんに抱きついてた唯ちゃんを彷彿とさせるものだった。

いや……。キスしようとしてる分、夕子の悪さは唯ちゃん以上かも……。

「うふふ。2人とも、もうすっかり仲良しだね」（ニコニコ）

「どこがよ!? ねえ、憂! 助けて! この変態、なんとかして〜!」

「え〜、何よ? そんな冷たいこと言わないでよ〜……って、あら〜? 憂。それ、ひよっとして今日のお菓子!」

「うん。今日はプリン作ってきたよ!」

ええっ!? プリン!?

憂ちゃんが私たちの机の上に1つのタッパーを持ってきた。そして、タッパーの蓋を開けると……。

そこにはかわいいトッピングと生クリームがたっぷり乗った3色のプリンがっ!

まあ〜〜〜

ちなみにこの時、他のみんなと同様、純ちゃんとリンちゃんの視線もいつの間にかプリンに引き寄せられていたことをお知らせしておくわ!

「おお〜……。お店で売ってるやつみたい……。これ、憂先輩の手作りなんですか？」

ふふっ、瞳ちゃんが驚いているわ

「うん、そうだよ。え〜と……。いちごプリンと抹茶プリン、茶色いのが紅茶プリンだよ！」

「憂ってさ、ほんと器用だよな。たまに本気で凄いと思うよ、憂のこと」

これは梓ちゃん言葉ね。

「えへへ、そんなつ、褒めすぎだよ　お姉ちゃんが1人暮らしを始めて暇になったせいでお菓子作りにハマっちゃっただけだし……。でも、それをこつやってみんなに食べてもらえるんだから私、今、すごく幸せだよ」

憂ちゃんは満面の笑顔でこつ答えたわ。

それにしても……。ううっ！

軽音部のためにここまで……。

この子、本当に良い子だわっ……！

……。よしっ、決めたわっ！

この子、私のお嫁さんにするっ！

……っていうのは冗談よ

でも、思い起こせばムギちゃんが卒業してからというものの、このままお茶会もなくなっちゃうんじゃないかと一時は寂しい思いをしたものだけど、梓ちゃんの理解と憂ちゃんの協力があつたおかげで、今もこうしてお茶を楽しむことが出来るのよね。

本当にありがたい話よ……。

ああ、私は本当に良い教え子を持ったわっ！

「……ところでリンリンさあ。いつまで抱きついてるわけ？」

「ん？ ……ああ！ ごめんごめん、忘れてた！」

「ったく……。それじゃ、早く離れ」

「ちゅ〜」

「って、うわあっ！」

「そうそう、純にチュウするところだったよね〜
寂しかったんだね〜、よしよし」
「い〜め〜ん、忘

「違う！ つづか、そのまま忘れてる！」

「え〜っと、それじゃあ……」

憂ちゃんがみんなに希望を聞き始めたわ。

まずは新入生の瞳ちゃんの希望から聞いて、次に私の希望を聞いてくれたわ。

ちなみに私が選んだのは……。

「……うん。それじゃあ瞳ちゃんはいちご、先生は紅茶、梓ちゃんは抹茶がいいんだね。リンちゃんと純ちゃんは？」

「「いちご！」」

純ちゃんとリンちゃんの声が綺麗にハモったわ。

「……………ん？ 純も？」

「ありがとう」

「はあ？」

「え？ 譲ってくれるんでしょ？ いや、やっぱり持つべきものは友達だよな」

「いやいやいや、ちょっと待って。なに私がいちご譲る前提で話進めてんのよ？」

「あれえ？ あんた、今『ここは私が一步下がって純に譲ってあげるよ』ってテレパシーで話しかけてくれたよね？ 気のせい」

……………ギョウウウウッ！

「ぐっ……！ イタイイタイイッ！」

「ん〜？ な・あ・に？ なんか言った、じゅ〜ん〜ちゃん」

「ひ、卑怯者っ！ 抱きついてるのを利用してそのまま羽交い絞めしてくるなん……ぐ、ぐ、ぐるじ……」

はぁ……。

いちごプリンをめぐって、純ちゃんとリンちゃんがまた喧嘩し始めたわ。

まったく、この子たちは……ん？

待てよ？

そういえばこの2人ってリズム隊よね？

……バンドの中でも一番仲良くしなくちゃいけない立場じゃない！

まあ……。確かに”喧嘩するほど仲がいい”とはよく言ったものだけど……。

でも、今のところ、この2人が仲良くしてるようにはとてもじゃないけど見えないわ。

果たして、こんな調子でこの先、やっていけるのかしらねえ……？

と、その時。

瞳ちゃんが椅子から立ち上がると、喧嘩する2人に対して

「あ、あの！ だったら私、紅茶でいいです！ いちごはどうぞ、先輩たちで……」

こう言って、2人に自分がいちごプリンを譲ることを提案してあげたわ。

あらあら……。瞳ちゃんの方がよっぽど大人ね……。

純ちゃんたちにもこういう譲り合う姿勢を見習ってほしいわ、ほんとに。

「……………いや、いいよ。遠慮しとく。つうか、むしろ瞳は遠慮しちゃダメっ！」

「でっ、でも……………」

ちなみにこの時、純ちゃんはいつの間にかリンちゃんの腕から解放されていたわ。

一方、リンちゃんはどうと……………。

「そ、そうそう！ 純の言うとおりっ！ 瞳はこの中で一番後輩なんだからさ、遠慮せず好きなもの選んでいいのよ！ こ、後輩に気を使わせるのは先輩としても心苦しいしさ！ ねえっ、純!？」

「う、うん！ そうだね！ だからさ、ほら！ 遠慮しないで！

ねっ!？」

「はあ……………」

2人に逆にこう説得されて、瞳ちゃんは明らかに戸惑っていた。

そして、そのまま静かに椅子に座りなおすと、それ以上はもう口を開かなかったわ。

諦めたんでしょね……。

それにしても2人とも、すっかり慌てているわね。

後輩に気を使われたのがよっぽど心に痛かったんでしょね。

「え、え〜つと……。ごつ、ごめんね、純！ さすがに暴力はいけないわよねえ！ おほほほ……」

「う、うん！ 私こそ悪かった！ いくらなんでもテレパシーはな
いよねえ！ あははは……。ふう。よし、落ち着いた。ねえ。
ここはひとつ、じゃんけんで決着つけることにしない？」

「いいわよ！ そんなじゃ、潔く一発勝負ね！ 負けても『実は三回
勝負でした』とか、そういうのは無しだからね！ いい！？」

「オツケー！ それじゃ、いくわよっ！」

「よし来いっ！」

2人とも、右手を大事そうに抱えながら、真剣な表情で互いを睨み始めた。

ほんの少しの間、静寂な空気が2人を包み込んだわ……。

「……………！」

「「じゃんけんほい！」

「「ほい！……」

「「ほい！……」

「「ほい！……」

「「ほいっ！……」

……………。

「「ほいっ！……！……！……！……！……！……！……！……！……！……」

「

……やけに、あいこが続くわね。

なんていうか、この子たちってほんと似た者同士……。

……ああ。

そうか。だからぶつかるとのね、この子たち。

ほら、昔からよく言っただしょ？

”似た者同士はよくぶつかる”って。

言われてみればこの子たちって、なんか全体的に雰囲気似てるものね。

やけにおしゃべりだったり、お調子者だったり、わがままだったり、なのに他人思いな一面があったり……。

お茶を飲むタイミングがそっくりだったり、いちごプリンを取り合ったり、瞳ちゃんの気遣いに心を痛めながら、でも結局は応じなかったり……。

……ぷっ。なんか可愛いわね、この子たち。

そう考えると……不思議ね。

急に微笑ましい気持ちになってきたわ。

”喧嘩するほど仲が良い”って言葉、あれはきつと本当なんですよわね。

もしかして憂ちゃんも、こんな穏やかな気持ちでさっきの2人のやり取りを眺めていたのかしら？

まあ、それにしてもニコニコし過ぎだった気もするけど……。

果たしてこの2人はリズム隊として、どんな演奏を聴かせてくれるのかしら？

ちょっと楽しみになってきたわ。

顧問としてそれを見届けてあげるのも悪くない……かもしれないわね。

……あら？

情をしていたわ。

「うん、勝ちましたっ！」

「はあ……。めちゃくちゃ疲れたあ……」

「それにしても一発勝負なのに、ずいぶん時間かかったよね。見てるこっちまで疲れてきたよ」

「ははっ。ごめん、梓」

「しっかしなあ……。負けたっていうのに、なんか妙に清々しい気分なのはなんでだろうね？ 純」

「私も。……なんでだろ？」

純ちゃんもリンちゃんも疲れ切った様子で椅子にもたれながら天井を仰ぎ見ていた。

その姿は、まるで殴り合いの喧嘩を繰り広げた末に原っぱで寝転ぶ、ベタな学園青春ドラマの親友同士みたいだったわ。

ただ、いちごプリンを取り合っじゃんけんしてただけなのにね。

「それじゃ、はい。いちごは純ちゃんね。リンちゃんはどうする？」

「あ、だったら抹茶にしようかな」

「うん。それじゃ、私が紅茶だね」

ふう、やれやれ……。

やっと取り分が決まったわね……。

「まったく、あなたたちは……。たかがプリンで揉め過ぎでしょ。練習時間なくなっちゃうわよ?」

「ごめんなさい、さわちゃん先生。さすがにちょっと反省してます……」

「私もすいません……。瞳もごめんね。余計な気使わせちゃって」

「いえ、そんな……。気にしないでください、純先輩」

……ふふつ。

純ちゃんもリンちゃんも、なんだかすっかりちっちゃくなっちゃったわね。

でも、こうやって素直に非を認めることが出来るあたり、なんだかんだ言っても根は良い子よね、2人とも。

「……よしっ! それじゃ、みんな! これ食べたらそろそろ練習するよっ! せっかく瞳ちゃんも楽器持ってきてくれたことだしさ!」

部長らしく場を立て直そうと思ったのか、梓ちゃんは大きな声でみんなにこう呼びかけた。

その声には気合いが漲みなっていて、なんとかみんなのやる気を促そうとしている姿勢が透けて見えたけど……大丈夫かしら?

特に純ちゃんとリンちゃん、さっきのじゃんけんでひどく疲れてるようだけど……。

「……うんっ、わかった！ そういえばリンちゃんたちと練習するの、今日が初めてだね」

「ていうか、憂。練習って単語自体、今、初めて聞いた気がするんだけど……」

「あれ？ そうだったけ？ ……まあ、確かに練習できる環境が整うまで少し時間がかかったもんね。ドラムとか」

「ああ〜！ そういや言ってたわね。確か、昔の軽音部がジャズ研に貸してあげてたドラムがそのまんまになってたんでしょ？」

「そうそう。でも、私たちにとってはラッキーな話だよ〜。まさに”棚から牡丹餅”って感じでさ」

「本当、そうね……… よ〜っし！ それじゃあ、いっちょ気合い入れてやりますか！」

「おおっ……。あんた、まだ元気有り余ってんだねえ……。さすが体力バカ」

「あらあ？ そういう純はまだへばってるのね〜？ 疲れが顔に出てるわよ〜？」

「そ、そんなことないわよ！ むしろ元気バリバリだよっ、私！ 腫のことも見てあげなきゃいけないし、あんたにも教えてあげなきゃいけないこといっぱいあるんだからねっ〜！」

「ああっ、そっか……。そういや私、人一倍頑張らないといけないんだっただ……。……よおっし！ ってことで改めてご指導お願いしま〜す、純・先・輩。それじゃ、まずドラムの準備はどうすりゃいいの？」

「手伝うよ。準備室の方に置いてあるから、あとで一緒に運ぶよ！ その時にセッティングも教えてあげるからさ。瞳も、まずはチューニングから教えてあげるからね」

「はいっ！ よろしくお願いします！」

「純、あんまり抱え込まなくていいよ。どっちか私が受け持つてあげるから」

「あ、そう？ うん……。それじゃ、瞳の方、お願いしていいかな？」

「うん、わかった。それじゃ瞳ちゃん。あとでチューニング教えてあげるからね」

「わかりました。お願いします、梓先輩」

「あら？ 意外とみんな、練習に対して前向きだわ。」

特にさっきまでへばってた純ちゃんとリンちゃんが文句ひとつ言わず、むしろ積極的に練習に協力しようとしているところがちょっと意外だったわね。」

これがりっちゃんや唯ちゃんだったら、きっと今頃「もう今日は疲れたから止めにしようぜ」とか言ってるところでしょうに……。」

それと比べるとこの子たち、すっかりやる気満々の表情してるわ。どうやら今年の軽音部は去年までの軽音部とは一味違うみたい。意識改革ってやつかしら？

信じられないけど……部活らしい空気になってきたわ。

個人的には今までみたいにもうちよっとまったりしている方がよかったです……。。

でも、みんながやる気を出している以上、ここでだらけているよ
うじゃ、さすがに顧問失格よね？

……うん。

よしっ、それじゃ私も、たまにはちゃんと練習見てあげようかし
らねー！

特にリンちゃんと瞳ちゃんは完全に初心者だから教えることもい
っぱいあるでしょうし……うん！

それじゃ、いっちょやりますかねっ！

「えーっと、それじゃ……」

梓ちゃんが音楽室の時計に目を移して、今の時間を確認する。
それからすぐ、みんなに向かって号令をかけたわ。

「4時半になったら始めるからね！ みんな、よろしくー！」

「「「「「はい……」」」」」

#2 生徒と先生！（A面）？（後書き）

ちなみにリンリンと純ちゃんじゃんけんの部分ですが、妙に”！”が多いことにお気づきでしょうか？

これ、実は”！”の数だけあいこが続いてるわけなんです（笑）

お時間のある方はぜひ数えてみてください。

彼女たちがどれだけあいこを繰り返したかが分かる仕様になっていきますから（笑）

それでは、また次回お会いしましょう。

#2 生徒と先生！（A面）？（シリアス注意報、発令！）

さて、翌日……。

「先生、さようなら！」

「はい、さようなら。……あら？ あなたたち、まだ帰らないの？」

「あ、先生。ちょうどよかった。ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

あら？ 何かしら？

なんだか深刻そうな表情してるけど……。

「先生つて、お肌綺麗ですよね。普段、どんなケアしてるんですか？」

ああ、そういうこと……。

うーん……。でも、この子の肌もそんなに荒れているとは思わな
いんだけどなあ。

全体的におおらかで優しい雰囲気にもまれてるし、それに声だ
つておだやかで可愛い声をしているから、そのままでも充分に魅力
的な子だと思っただけ……。

まあでも、身だしなみの悩みは年頃の女の子なら誰でも抱く悩み

だからね。

私は喜んで、この子の相談に乗ってあげることにしたわ。

とりあえず私は自分が普段、行っているケアの方法や使っている化粧品のこと、それと”過度なケアは却ってお肌によくない”ことを説明してあげた。

かく言う私も去年、お肌の手入れに凝り過ぎて失敗した経験があるからね……。

ふふっ、苦い思い出よ……。

帰りのホームルームも終わって、今、私はこのおおらかな雰囲気を持つ女の子を含めた3人の生徒たちと、そんな他愛のない話をしていた。

その中には、あの瞳ちゃんもいたわ。

つまり、この子たちは瞳ちゃんの仲良しグループってことになるわね。

*

「あれ？」

「ん？ どうしたの？ 岩池さん」

「いや、あの子……」

岩池さんと呼ばれた女の子が、ある一定の方向を指さした。皆の視線が一斉にそこへと向けられた。当然、私もそっちの方へ視線を移したわ。

そこには、1人の女の子が静かに席に座ったままの状態で佇んでいた。

真っ白なパウダースノーのように透き通った白い肌と、見ただけでサラサラした質感が伝わってきそうな艶のあるロングヘアが特徴的な女の子。

さらにその髪はキラキラとした白髪。いや、銀髪というべきかしら？　で、それが彼女に他にはない不思議な魅力をもたらしていた。

おまけに顔立ちもお人形さんみたいに整っていて、”美少女”と言っても差し支えないくらいだわ。

この女の子もまた、私の受け持つ1年3組の生徒の1人。
名前は松本夢、だったわね。

彼女とはあまりお話をしたことがないんだけど、見た目にも名前にも分かりやすい特徴があるから、クラスの中でも真っ先に名前を覚えた子だったわ。

松本さんは机の上に置いてある鞆をぼんやりと眺めながら、物音ひとつ立てることなく静かに座っていた。

その表情はどこか物憂げな感じで、それこそ本当にフランスのお人形さんでも見ているかのような錯覚を起こしたわ。

「ひそひそ……（ね、ねえ、ちょっと友紀話しかけてきてよ）」

「ひそひそ……（えっ？ 遠慮しとくよ。あの子ちょっと怖いし……かすみが行ってきたら？」

「ひそひそ……（えっ！？ そんな、嫌だよ……。私だつて怖いもん！）」

その時、松本さんの目がさつきより伏し目がちになったのを私は見逃さなかった。

さらにそのまま顔を下の方へと俯かせてしまつて、表情が確認出来なくなつてしまった。

明らかにヒソヒソ話を嫌がつてるわ……。

「あなたたち、ヒソヒソ話はやめなさい。聞こえてるわよ？」

私は2人に注意をした。

私たち以外、誰もいない空間でいきなり周囲の子にヒソヒソ話なんてされたら、そりゃあ嫌がるに決まつてるでしょうからね。

幸い2人とも、すぐに非を認めて謝ってくれたわ。

それにしても、松本さんは席に着いたまま、いったい何をしているのかしら？

ヒソヒソ話の非礼もあることだし、私はお詫びも兼ねて、松本さんに声をかけようとした。

「松本さ」

「松本さん。どうかした？ 具合、悪いの？」

私より先に瞳ちゃんが声をかけた。

瞳ちゃんはいつの間にか松本さんの席の傍まで移動していて、俯いた状態のままの松本さんの顔を心配そうに覗き込んでいた。

松本さんの顔が少しだけ上がった。

でも、その表情はどこか怖がっているようで、まるで迷子になった子供みたいに怯えたような目つきで瞳ちゃんの事を見ていたわ。

「え、ええっ、と……あ……あの……」

「えー!? 何? 松本さん、どっか調子悪いの!? だったらとつとと帰った方が」

「ちょっと、かすみ! 待ちなさいって!」

さっきヒソヒソ話をしていた2人が突然、松本さんの席へと駆け寄っていった。

急に近づいてきた2人に松本さんは驚いたようで、また咄嗟に顔を伏せてしまったわ。

「松本さん? ねえ……大丈夫?」

「ねえ……。ねえったら! 何、あんた? 質問してるのに無視する気!? 黙ってないで何とか言ったらどうなのよ! ねえ!?!」

「ちよっ……! ちよつと岩池さん! 怒鳴っちゃダメだよ! 余計、話しづらくなるじゃない!」

「いや、だつてさあ」

「かすみ。瞳も。2人とも、声が大きだよ。松本さんが怖がつてるじゃない」

「えっ!？ ご、ごめん、うっかりしてた……。ごめんね、松本さん……」

もう1人の女の子 ますだゆき 増田友紀さん。さつき、私にお肌の悩みを相談してきた女の子よ が言う通り、松本さんは明らかに怖がつていた。

目に見えるほどの体の震えも、さつきよりもさらに俯いた頭も、恐怖から身を守るための本能的な行動だと考えれば自然と納得がいった。

もしかしたらこの子、対人恐怖症なのかもしれないわね……。

いずれにせよ、これ以上は黙って見ていられない。

私は瞳ちゃんたちに松本さんから少し距離を置いてもらうようにお願いしてから、改めて彼女のもとに歩み寄った。

ただ、どうやら怖がりみたいだから出来るだけ優しく声をかけてあげないと……。

「……松本さん？ 大丈夫？ どこか、具合でも悪いの?」

返事はない。

表情は分からないけど、体の震えが治まる気配は一向になく、むしろ増しているようにも見えた。

やっぱり私の事も怖いみたいね……。

それでも私はとにかく松本さんの気持ちを落ち着かせてあげることだけを考えて、できるだけ声のトーンを落としながら話し続けた。

「心配しないで。別に誰も松本さんの事を責めようとしているわけじゃないのよ？　ただ」

「おいつ」

その時突然、教室の入り口の方から怒ってるような声が聞こえてきた。

皆の視線（松本さん以外）が一斉に教室の入り口の方に向けられた。

すると、そこには顔の至るところにピアスを空けた、いかにも不良らしい雰囲気醸し出してる女の子が怒りと敵意を込めた目つきで私たちのことを睨んでいた。

若干、吊り目気味なその瞳は大きめで、まだ少し幼さが残る顔立ちが充分にかわいらしいものだった。

なんだけど、下唇の左側や右目の眉などにピアスを空けていて、おまけに鬼のような形相でこちらを睨んでくるものだから、せつかくのかわいらしい顔立ちも人を怖がらせるものになっていったわ。

ちなみに彼女もまた私のクラスの生徒の1人で、名前は確か、石塚空^{つかくう}。

松本さんと同様、私はこの子ともほとんど話をしたことがない。

というより、私、この子にはどうも避けられているような気がするのよね……。

「てめえら、集団で寄ってたかって一体何やってたんだよ……ああっ!?」

石塚さんが怒鳴りながら、こちらに近づいてきた。

石塚さんが怒っている理由。
考えられる理由はひとつしかない。

私が見てる限り、石塚さんとクラスの中で最も親しい友人は松本さんだ。

この子たち、いつも一緒にいるんだけど、2人とも外見や雰囲気の特徴があり過ぎるせいなのか、進んで彼女たちに声をかけるような生徒はほとんどいなかった。

でも、それが却って2人の心の距離を縮めているみたいで、傍から見ても2人が親友同士なのは誰の目にも明らかだった。

石塚さんにしてみれば、その親友が私たちに囲まれて怯えている姿をいきなり見せつけられたわけだから、要するに……。

「ち、違うのよ! 私たち、別に松本さんの事をいじめてたわけじゃない」

「だったらなんで震えてんだよ!? てめえ、先公センコーのくせになんかこいつが嫌がることでも言ったんじゃないかねえのか!? なあっ!?!」

「きゃっ！」

石塚さんが私の胸倉を掴んできた。

小さな体からは想像できないほどその腕力は強くて、私の体は石塚さんの方向に思いつきり引つ張られた。

「やめて！ 先生は関係ないわ！」

「……あ？」

石塚さんの目が瞳ちゃんへと向けられた。

「森江さん！」

「私が……私が最初に松本さんに話しかけて、そ、それで松本さんのこと怖がらせちゃったから……。だから、だから悪いのは私なの！ 先生じゃないわ！」

「やめなさい！ あなただっけ話しかけただけで、特に悪いことをしたわけじゃないじゃない！」

「っ！ うるっせえんだよっ、このやるおっ！！！」

石塚さんが右腕を大きく振り上げた。

拳を力いっぱい握っていて、今まさにそれを私の顔に向かって思いつきり振り抜こうとしていた。

殴られる……！！

私は咄嗟に覚悟を決めて、反射的に目をギュっとなつむりながら歯

を食いしばった。

「空ちゃん！ 待って!!！」

.....。

目をつむって待ってる私に、いつまで経っても石塚さんのパンチは飛んでこなかった。

恐る恐る目を開けてみると.....。

そこには私の胸倉を掴んだ手は離さないまま、戸惑ったような表情で松本さんの顔を見下ろしていた石塚さんの姿があった。

「やめろって、夢.....こいつらにいじめられたんだろ？ 違うのか？」

只でさえ色白な松本さんの肌はさらに白くなっていて、まるで紙のように真っ白だった。

さらに怯えた目付きのまま石塚さんのことを見つめてたと思ったら、やがて松本さんは無言で首を横に振った。

「ほんとかあ？ 嘘ついてこいつらのこと庇ってたって、お前のためにならないんだぞ？ それくらいわかるだろ？」

「うん……。でも今回は急に話しかけられて、私が勝手にびっくりにしたただけだから……。だから」

「『だから悪いのは私の方なの』……。ってか。はぁ……。相っ変わらずお人よしだなあ、お前……。そんなんだからいじめられるんだよ、お前は」

「う、うん……。ごめん……」

石塚さんは文句を言いながらも、松本さんに優しい口調で語りかけていた。

一方、松本さんの顔は相変わらず俯いたままで、その姿はどう見ても落ち込んでいるようにしか見えなかった。

おまけに背中を丸めて小さな体をさらに縮みこませていたから、見ていてとても気の毒な気分になったわ……。

「……はあつ。……わかったよ」

その言葉と同時に、私はようやく解放された。瞳ちゃんたちが私のもとへ歩み寄ってきた。

「先生！ 大丈夫ですか？」

「ええ、私は平気。ただ……」

そう言っつて、私は視線を松本さんの方へ向けた。見ると、ちょうど石塚さんが机の上にあった鞆を左の肩に担ぎながら、松本さんに手を貸しているところだった。

松本さんは若干、ふらふらしながら立ち上がった。

そんな松本さんを支えてあげるように石塚さんは彼女の肩へ手を回しながら、教室の出口に向かって歩き始めようとしていた。

「ちよつと待ちなさいよ！ 先生に乱暴して、あたしたちの事散々疑った拳句に謝りもせず帰るわけ！？ どういう神経してんのよ、あんたたち！！」

その時、岩池さんが何も言わずに帰ろうとした石塚さんたちに不満をぶつけるように怒鳴った。

石塚さんが振り向いた。

眉間にしわを寄せながら細い目つきで私たちのことを睨みつけていて、その目にはさつきまでと変わらない怒気が含まれていた。

「夢のこと怖がらせたのは事実だろうが。そんな奴らになんで頭下げなきゃいけないんだよ？」

「そ、それは勝手に怖がってただけだって松本さんもさつき言ってたじゃない！ あたしらにしたら、とばかりも良いところよ！」

「んだと……？ やんのか、てめえ、こら。喧嘩なら受けて立つぞ？」

「なっ……なんでそうなるのよ！？ べっ、別に私、そついつつもりで言っただけじゃ」

「ああん！？ だったらなんで突っかかってくんだよ！？ 喧嘩する度胸もねえくせに喧嘩売ってんじゃねえぞ、この野郎！！」

「やめなさいっ!!」

私は大声で怒鳴った。

教師として、この状況を黙って見ているわけにはいかない……と言っより黙っていられるわけがなかった。

石塚さんはさっき以上に怒りを込めた形相で岩池さんの事を睨みつけているし、松本さんや瞳ちゃんたちもその光景を心配そうに見つめている。

昨日のリンちゃんと純ちゃんの喧嘩とは全く違う、険悪な空気が教室を支配していた。

早くなんとかしないと……。

私は焦る気持ちを落ち着かせながら、石塚さんと岩池さんの仲裁に入った。

「……岩池さん」

「えっ? はい」

「あなたには申し訳ないけど……私は石塚さんの方が正しいと思うわ」

「先生!? でもっ……!!」

「もちろん暴力はいけないわ。けど、そもその原因は私たちの松本さんへの対応がまずかったことにあるでしょ? 石塚さんが怒るのも無理はないと思うわ」

「……うん。わ……」

ん？ 瞳ちゃん……？

「私も。先生の言うとおりでと思うよ」

今度は瞳ちゃんが岩池さんに声をかけた。

「瞳……」

「岩池さん。なんで松本さんが怖がったのかは私にもよく分からないけど、でも結果的に私たちが松本さんのことを怖がらせちゃったのは間違いないわ」

瞳ちゃんの話聞きながら、岩池さんは険しい表情を地面に向けていた。

「仲の良い友達が複数の人間に囲まれて怖がってる。そんな光景見せられたら、むしろ怒る方が自然だよ。でも、それですごく大切なことじゃない？ だって、そうしないと本当にいじめが起きちゃうかもしれないし……。岩池さん。先生もあ言ってくれてることだし、ひとまず謝ろう？ 私と増田さんも一緒に頭を下げるからさ。ね？」

「むう……わかったよ」

その後、瞳ちゃんたちは石塚さんと松本さんに頭を下げた。

岩池さんはまだ納得できてないみたいだったけど、これ以降は声を荒げて石塚さんたちに食ってかかるようなことは言わなかった。

その結果……。

「……ふん、わかりやいいんだよ、わかりや！ あたしも夢の目の前で喧嘩なんてしたくねえな。いいよ、許してやるよ！」

不機嫌そうな態度は相変わらずだったけど、石塚さんは瞳ちゃんたちの謝罪を素直に受け入れてくれた。

おかげで張りつめた空気に支配されていた教室の雰囲気も、これで少しだけ柔らかくなってくれたような気がした。

よかった……。

なんとか丸く治まってくれそう……。

#2 生徒と先生！（A面）？（シリアス警報、発令！）

……よし。

「松本さん」

「えっ！？ はっ、はいっ！」

意を決して、私は改めて松本さんに声をかけた。

あまり怖がらせないように優しく声をかけてあげたつもりだったんだけど、松本さんは予想した以上に驚いた声を挙げながら返事をしてくれた。

「あ……ごめんなさい、また驚かせちゃった？ ひよっとして、人から話しかけられるのは苦手だった？」

「は、はい………すみません………」

松本さんは絞り出すような声でそう言いながら、小さく頷いた。

「い、いいのよ、そんなに謝らないで。むしろ、私たちの方こそ松本さんに対する配慮が足りなかったわ。ごめんね、本当に。次からはこんなことがないように気をつけるから。ね？」

「はい………ごめんなさい………」

……ふう。なんてデリケートな子なのかしら……。

返事は返してくれるものの、俯いたまま、力のない声で返事をす

る姿は最後まで変わらなかった。

おかげで私は謝っているはずなのに、逆に説教でもしているような気分になった。

松本さんは何も悪くないんだから、謝る必要なんてないのに…。

私の心の中に、拭いきれない罪悪感が生まれた。

「……い、石塚さん？」

「あん？」

さらに私は石塚さんにも声をかけた。

正直、この子に声をかけるのは松本さん以上に勇気がいった。

さっきのこともあるし、私の心に石塚さんを怖いと思う感情が芽生えたことは否定できない。

おまけに、この子が私に向けてる視線にはどう見ても敵意しか感じなかった。

この子は私を嫌っている。

彼女の私を見る表情を見てたら、どうしてもそうつしか思えなかった。

それでも、この子だって私の大事な生徒であることに変わりはない。

私は少しでも石塚さんとの距離を縮めたい一心で、勇気を持って話し始めた。

「あなたにも迷惑をかけたわね。今回の事は私の落ち度でもあるわ。本当にごめんなさい」

「……………」

石塚さんは何も言わない。

最初の一言でなんとか謝罪はしたものの、彼女の不審人物を見るような目つきは相変わらずだった。

彼女の視線が痛い…………。

それでも私は必死で自分の恐怖心を抑えながら、なんとかそのま
ま話を続けようとした。

「それにしても石塚さん、優しいのね。友達のためにここまで怒る
ことができるなんて」

「はあ？ 何が言いてえんだ、てめえ？ 馬鹿にしてんのか？」

「そうじゃないわ。ただ、私が本気でそう思っただけ。だって、そ
れだけ松本さんの事を大切に思っているってことでしょ？ それっ
て本当に凄いと思う」

「うるせえよ」

…………えっ？

私、今、何か変なこと言ったのかしら？

戸惑う私を睨み続けながら、やがて石塚さんはこう言い放った。

「この際だから、はっきり言っといてやる。何が信用できないって、あんたが一番信用できねえんだよっ!!」

!?

し……………信用できない？

そっ……………

「それってどっいう……………あっ」

思わず口に出してしまった。

”信用できない”。

教師になつて以来、生徒からそんなことを言われたのは初めてだった。

「はっ、白々しい……………。いいか？表面上、良い顔しか見せてない奴つてのは、ぜってえ、裏に醜い素顔が隠れてるに決まってるんだよ！あんたなんかその典型じゃねえか！」

「くっ……空ちゃん？ で、でも」

「夢は黙ってる。つつかお前だって分かるだろ？ 普段、生徒思いな優しい先公を演じてる奴に限って、いざとなったら手のひら返して裏切るに決まってるんだよ！ うんざりするんだよ！ そんな奴！」

「え……？ あ、あなたは何を言って」

「つつかよお。てめえだって口ではそうやって綺麗事言っておきながら、心の中ではあたしらのことウザいとか生意気とかそんな風にしてんだろがよお！！ ええ！？ そうだろ！？」

「そんな……。そんなこと……」

「ちよつと待って！！」

瞳ちゃんの怒鳴り声が教室中に響き渡った。

「いくらなんでも言い過ぎよっ！ 謝って！ 山中先生はそんな人じゃ」

「ないって言いきれぬのかよ？ こつやって綺麗に繕って善人ぶってる先公に裏の顔がないって、お前、言いきれぬのか？ ああ！？」

対する石塚さんも一歩も引かない。

「言いきれるわよ！ だって私、軽音部でも先生にお世話になってるもん！ その時だって、いろいろ丁寧アドバイスしてもらってるし……」

「はっ！ それはお前が真面目な良い子ちゃんだからだろ？ そう
いう奴は扱いやすいからな！」

「なんですって！？ それじゃ私、先生に良いように手懐けられち
やってるみたいじゃない！」

「そつだよ、そう言っただよっ！ 一生そつやって飼われてるよ
！」

「やめてよっ！！」

石塚さんと瞳ちゃんが言い争う中、突然、松本さんが怯えたよう
な叫び声を挙げた。

体を震わせながら石塚さんの制服を掴んでいて、その顔は相変わ
らず下の方を向いていた。

……というより、この場合、”顔を上げることができなかつた”
と言った方が適切なのかもしれぬ。

「もうやめて……お願いだから、喧嘩しないでよお……」

松本さんは泣きながら2人に訴えた。

今にも途切れそうな程、息も絶え絶えな、か細い声で……。

この険悪な空気に耐え切れなくなった様子が、彼女の声にも体にも
はつきり表れていた。

松本さんの足元に涙の滴しずくが1滴、2滴と滴したたり落ちていた。

「……はあゝあ」

石塚さんが大きいため息をついた。

「まゝた余計なこと言っちゃまった……。ええっと、森江だっけ？
わりいな、お前に言ったのは全部でまかせだ。だから気にすんな。
ちよつと熱くなりすぎたわ」

「何それ！？ あなた、ちよつと自分勝手すぎるんじゃない？ 私
の事はどうだっていいよ！ それより先生に謝って！」

「あゝあゝ、そりゃ無理だ。入学した時からずうっと思ってたこと
だし。むしろ言えて清々したくらいだわ」

石塚さんは即答した。

それからすぐ、松本さんに「悪かったな」と声をかけてあげて、
泣いている松本さんの頭を優しく撫でながら慰めていた。

こんな状況でも松本さんには優しいのね……。

やがて松本さんに手で合図を送ったかと思うと、石塚さんはその
まま教室から出て行ってしまった。

「ちよつと！ 話はまだ終わってないわ！ 待ちなさいよ！」

瞳ちゃんが大声で怒鳴った。

だけど石塚さんはすでに教室から退室していて、戻ってくる気配
はまったくなかった。

その代わり、松本さんが出口付近で凍りつくように立ち止ってい

たわ。

松本さんが恐る恐るこちらを振り返った。

「……………え、えっ、と……………あ、あの……………その……………」

松本さんの目は泳いでいて、その表情には石塚さんが教室に戻ってくる前以上に恐怖の色が色濃く滲んでいた。

でも、さっきまでと違って瞳ちゃんの視線には怒りが込められていて、それが余計に松本さんを委縮させていた。

「松本さん！ 石塚さんと仲良いんでしょ？ 今すぐ連れ戻してきて！」

「ええっ！？ で、でも……………それは、その……………う……………う……………」

「何？ また泣くの？ あんた、ほんと泣き虫だよねえ？ でも、泣きやあ何でも許されると思ったたら大間違いだよ！」

「うっ、う、ごめんなさい……………」

「ちよつと、かすみ！ 松本さんに怒ってもしょうがないでしょ？ 瞳も少し落ち着いてよ……………はあ……………。でもね、松本さん。石塚は先生を傷つけることを言ったんだよ？ それは分かってるでしょ？ だからさっ……………お願い！ 石塚を連れ戻して謝らせてくれない？ 松本さんだけが頼りなのよ。なんとかお願いできないかな？」

「え、ええつと、はい、そうですね……………えっ、と、で、でで、でも……………その……………」

「夢！ 何やってんだよ！？ 早く来いって！」

廊下の方から石塚さんの声が聞こえた。

その声にビクツと反応した松本さんは再び廊下の方へと視線を向けた。

それからすぐに私たちの方を振り返ったかと思うと、「すみませんっ！」と言いながら大きく頭を下げて、駆け足で石塚さんの待つ廊下へと走り出してしまった。

その際、勢いよく教室のドアを閉めながら……。

*

「くっそおっ！」

岩池さんが近くにあった机を思い切り蹴りながら怒りをあらわにした。

「なんて奴らなの！？ 散々暴言吐いた揚句、謝りもしないで平然と帰るなんて！！」

「暴言を吐いたのは石塚だけでしょ？ 松本さんまで攻めたら可哀想だよ」

「何よ？ 友紀は腹立たないの！？ あいつらが先生と瞳に何言っ
たか、あんたも聞いてたでしょ！？」

「だから松本さんは関係ないって言うてるでしょ！ そりゃ私だっ
て怒ってるよ！ でも、元を辿れば私たちが松本さんを怖がらせち
やっただのが原因なんだよ！？」

「それはさつき謝ったじゃん！ 今はそれより」

「岩池さん！ 増田さん！」

言い争いを始めた2人に私はできるだけ大きな声で話しかけた。

「先生……」

「ごめんね。私のせいで嫌な思いをさせて……。でも、もういいの
よ。私は何も気にしてないから」

「先生……」

「でもさあっ！」

「……森江さん、大丈夫？」

私は瞳ちゃんにも声をかけた。

私のために怒ってくれただけでなく、瞳ちゃん自身も石塚さんに
辛く当たられた影響もあるでしょう……。

彼女の表情からは悔しい気持ち痛みほど伝わってきたわ。

「先生……。すみません……。石塚さんに頭下げさせること、できませんでした……」

よく見ると彼女の頬には涙が流れた跡が残っていた。

「いいのよ、そんなこと。あなたが悩むことじゃないわ。それより疲れたでしょう?」

「いえ、私は大丈夫です……。つて、それより先生の方が心配です! あんな勝手な決め付け……。先生! 先生は裏で私たちの事を馬鹿にしてるとか、そんなことありませんよね!？」

「ええ、そんなことはないわ。絶対に」

「ですよねっ! 実は裏にとんでもない素顔を隠し持ってるとか、そんなことありませんよねっ!？」

「ええ、そんなこと」

つて……。あれ?

そういえば、私……。いや、でもほら、先生ときは仕方ないじゃない。

それに、あれは

「……。? なんで黙ってるんですか、先生。ひよっとして石塚さんの言ってた通り、何か私たちに隠してる事でもあるんですかっ!？」

「えっ!?! い、いや、そんなことは」

「瞳」

増田さんが瞳ちゃんの肩をポンと叩いた。

「気持ちはわかるけど一旦、落ち着いてよ」

「増田さん……」

そして、そのまま瞳ちゃんを優しく擦りながら、優しい口調で瞳ちゃんを気遣った。

「ひよっとしたら、先生にだって何か私たちに言えない事情があるかもしれないでしょ？ でも、だからって山中先生が悪い先生ってことはないと思うよ、私は。瞳はどう思う？」

「う、うん……。私もそう思うよ」

「だよな？ だからさ、石塚の言うことなんか気にしたらダメだよ。私たちは先生の事信じてあげよう？ ね？」

「うん……。そうだね。疑っちゃってごめんなさい、先生」

「そんなんっ……。いいのよ。気にしないで？」

嗚呼……。なんか、さっきからこの子たちに気を使われてばかりだわ。

私は先生なんだから、本来なら私の方がこの子たちを励ましてあげなくちゃいけないのに……。

まあ、そもその原因は石塚さんが私に言い放った一言だから、それも仕方ないのかも……いや、だからって生徒に気を使わせるのはやっぱり心苦しい。

私は出来る限り、精いっぱい笑顔を作って　そのつもりだけど皆の目にはどう映ったかしら？　瞳ちゃんたちに元気よく声をかけた。

「さあつ、あなたたち！　そんな暗い顔しないで！　私なら全然平気だから！」

「先生……」

「それに、ほら。もうこんな時間よ？　あなたたち、部活とか大丈夫？」

「え……あつ！　サッカー部！　やっぱり、もう走ってんじゃない！」

「……あ、ほんとだ。走ってるね」

「やばいよ〜！　無断遅刻だからペナルティーがつ！」

「ははは、かすみも大変だね〜」

*

瞳ちゃんたちに声をかけられてから、だいたい30分くらいかしら？

私たちはようやく教室から退室すると、私は教室のドアに鍵をかけてから、改めて瞳ちゃんたち3人に明るい口調で挨拶をした。

「それじゃ、部活頑張つてね！ 森江さんはまた後で、かな？ しばらくしたら軽音部にも顔を出すからよろしくね！」

「は、はい！」

「それじゃあね！」

「「「お疲れさまでした」「「「

さあ、仕事仕事！

まあ、ちよつとした雑用程度だけど、のんびりしてたら憂ちゃんのお菓子を食べるタイミングを逃してしまつわ！

職員室に戻る時間も少し遅れちゃったし、急がないと！

そう……………。

急がないと、ね……………。

うん……………。

*

「……………」

「…………瞳？」

「ねえ、増田さん。先生さ……………」

「ああ……………うん、そうだね。元気を装ってはいたけど……………」

「うん、山中先生……………」

絶対、無理してたよね？ 今の「

#2 生徒と先生！（A面）？（シリアス警報、発令！）（後書き）

人物紹介

岩池いわいけかすみ

瞳の友人。サッカー部所属。

活発で元気な性格だが、短気で怒りっぽいのが玉に傷。

名前の由来はK・A・Z（VAMPS、OB L I V I O N D U
S T）の本名から。

増田ますだ友紀ゆき

瞳の友人。

瞳以上に冷静で落ち着いた性格の持ち主で、3人のまとめ役。

名前の由来はR I K I J I（O B L I V I O N D U S T）の本
名から。

#2 生徒と先生！（A面）？（前書き）

2か月振りの更新となります。

いくらなんでも置きすぎだな……反省＞（――；）

#2 生徒と先生！（A面）？

教室での一件があつてから、30分が経過した。

あれから職員室に戻った私は学級日誌の内容を確認をしてから、今はいつも通り、軽音部が活動している音楽室へと向かっている。

本来なら、今日は憂ちゃんがどんなお菓子を持ってきてくれているのかを楽しみにしているところなんだけど……。

石塚さんにあんなことを言われた手前、さすがに今はそんな気持ちになることができなかった。

『この際だからはっきり言ってやる！ 何が信用できないって、あんたが一番信用できないんだよ！！』

石塚さんに言われた言葉が耳から離れない。

まさか、生徒の口からあんな言葉を聞かされる日が来るなんて……。

去年の今頃は想像もしていなかったな……。

はあ……。

去年のクラスは幸せだったわね……。

.....。

ううん、ダメダメ！

なんてことを考えてるの、さわ子！

いくらシヨックだったからって、そんな卑しい考え方でちゃ駄目じゃない！

今年の教え子と去年の教え子が違うのなんて、そんなの当たり前！
自分の都合だけで生徒同士に優劣をつけるなんて、先生として絶対にやっちゃいけないことよっ！

そうよっ！

今は軽音部のことだけを考えればいいじゃない！

自分の悩みなんて、そんなの後でいくらでも悩みなさい！

そう心に決め、私は憂ちゃんの入れてくれるお茶とお菓子の事だけを考えながら、精一杯の笑顔を作った。

.....よしっ！

楽しい気持ちを保ちつつ、音楽室のドアノブに手をかけようとした。

けど、その時だった。

「私、どうすればいいんですか!? 教えてください!!」

せつかく固めた決心が、もろくも崩れ去ってしまった……。

中から、瞳ちゃんの悲痛な叫び声が聞こえてきたのだ。

その声からは瞳ちゃんの悲壮感が嫌というほど伝わってきて、明らかに周囲に助けを求めているのが分かった。

ということは、まさか……!

私は逸^{はや}る気持ちを抑えきれないまま、勢いよく音楽室の扉を開けた。

瞳ちゃんがさつき教室で起こったことを、梓ちゃんたちに相談していないことを心の中で祈りながら……。

「あ、先生……」

ドアを開けると、瞳ちゃんが真っ先にこちらを向いた。

その表情は見るからに辛そうなもので、さつき教室で私に見せた悔しそうな表情とほとんど変わらないものだったわ。

「……………」おはようございます……………」

音楽室ではいつも通り、梓ちゃんたちがテーブルを囲むようにして座っていたんだけど……。

心なしか梓ちゃんたちの表情もいつもより暗く、影があるように見えた。

おまけに皆、心なしか憐れむような視線で私のことを見ているような気がする。

私は瞳ちゃんがさつき教室で起こった出来事を、既に梓ちゃんたちに話しちゃってるのではないかと思った。

信じたくはなかったけど、この時の私にはどうしてもそういう風にしか思えなかったの……。

「も、もう……！ どうしたの、みんな？ なんだかお葬式みたいな雰囲気じゃない！ いつものおちゃらけた雰囲気はどこ行っちゃったの!？」

私は出来る限り明るい口調で皆に話しかけた。

だけど梓ちゃんたちはお互いの顔を見合せながら、なんだか気まずそうにしていた。

もう……やめてよ……。

こっちまで気が参ってきちゃうじゃない……。

「あ、あの……先生？」

音楽室全体が重苦しい空気に包まれる中、最初に私に声をかけたのは瞳ちゃんだった。

「瞳ちゃん……。あなた、ひょっとして……」

「すみません……。さっきのこと、先輩たちに話しちゃいました……」

瞳ちゃんは顔を伏せながら、ぽつりとした口調でそう答えてくれた。

ああ、やっぱり……。

「……はあ……」

私は思わず、大きなため息をついてしまったわ。

「瞳ちゃん……。さつきも言ったけど、何もあなたが気にすることじゃないのよ？ これは私個人の問題なんだから」

「そんなことはありませんっ！！」

瞳ちゃんが大声で怒鳴った。

「あつ、すいません、怒鳴っちゃって……。でも、どうしても先生のが心配で……」

「瞳ちゃん、気持ちは嬉しいけど……。でも、何も軽音部にまでこんな話を持ち込まなくても……」

「先生」

ここで梓ちゃんが話に割って入ってきた。

「ごめんなさい、私たちが瞳ちゃんに無理矢理事情を聴いちゃったんです。なんか深刻そうな表情で悩んでるみたいだったので『何か困ってることがあるなら話してみて？ 私たちでよかったら相談にのるよ？』って言って……。それで、先生の話聞いたんです……」

梓ちゃんは今回のことを知った経緯を丁寧に説明してくれた。

そう……。

……そういう事情なら、文句も言いづらいわね。

後輩が悩んでることに気付いて、おまけに率先して相談に乗ろうとしたんだから、非があるどころか、梓ちゃんの先輩としての対応はむしろ素晴らしいものだわ。

瞳ちゃんにしたって、さっき起こったばかりの問題だし、簡単に気持ちを切り替えることができるような出来事でもなかったでしょうからね……。

でも、事情を知ったところでこの子たちに解決策を求めるつもりもさらさらないんだけどね……。

「ねえねえ、さわちゃん」

今度はリンちゃんが声をかけてきた。

私は無言でリンちゃんの方に視線を移すと、リンちゃんは続けてこんなことを聞いてきた。

「さわちゃんが担任してるクラスってさ、確か1年3組だったよね？」

「えっ？　そうよ？」

「でさ、さわちゃんに暴言吐いた奴ってさ……もしかして石塚空って奴じゃない？　顔中にピアス空けてる男みたいな女」

……えっ!?

「瞳ちゃん、あなた……」

「えっ!?! い、いえ! 私、名前までは出してませんよ!?!」

「え? それじゃあ、なんで」

なんで、この子が石塚さんの名前を知ってるの?

おまけに顔の特徴まで明確に答えられるなんて……。

そう言おうとした矢先、リンちゃんはさらに続けて、こう説明してくれた。

「ああ、やっぱりそうなんだ。いや、そいつ私の中学の後輩なんですよ。で、そいつ、超がつくほどの先生嫌いだったからひよっとしたら、って思ってた」

「……そう……そうなの……。それで?」

「と、その前に席に着いたらどうですか? 立ちっぱなしでお話するのもあれですし」

リンちゃんに促されて、私は空いている席に座った。

すぐに憂ちゃんが私の分の紅茶を準備してくれて、さらに憂ちゃんお手製のクッキーも薦めてくれたわ。

心身ともに疲れていた私は、ひとまず机の上に置かれたクッキーに手が伸ばしたわ……。

それからリンちゃんは、石塚さんに関して知っている事を私にいろいろと教えてくれたわ。

石塚さんと知り合ったのは、リンちゃんが中学3年生の頃だったこと。

石塚さんとは、松本さんを通じて知り合ったこと。

石塚さんは中学時代から不良で、当時は今よりも荒れていたこと。おまけに自分が知り合った当初はゴミ屑くずみたいに最低な子だったとまで言い切っていたわ……。

さらに話は石塚さんと仲の良い松本さんのことにまでおよび、彼女のことについてもリンちゃんは詳しく説明してくれた。

リンちゃんと松本さんが近所の幼馴染同士であること。

松本さんが、自分の髪の色に対して大きなコンプレックスを持っていること。

石塚さんと松本さんは、彼女たちが中学1年生の頃に知り合ったこと。

それから2人が親友になるまでの間に”いろいろあった”こと……。

「ふう〜ん、まさかうちの学校に不良が入学してくるなんて……。それがよりにも寄って先生のクラスに来るなんて、先生もついてないですねえ」

石塚さんと松本さんのことについてリンちゃんが一通り話し終え

たのを見計らって、純ちゃんはふと、そんなことを言った。

「いや、そいつだって根は悪い奴じゃないのよ？　ただ、気に入らない奴にはやたら喧嘩腰になるってだけでさ……特に先生なんかには」

「それ、充分タチ悪いって。て言うか、私的にはその子たちが友達になるまでの間に”いろいろあった”っていうのが気になるんだけど……」

「あ、それは私も気になりました。リンリン先輩、石塚さんたちの過去にいったい何があったんですか？」

「ん……………」

純ちゃんたちにこう質問されると、リンちゃんは腕を組んだまま、いつもは見せない険しい表情を浮かべながら唸りだしてしまった。

「うう〜ん……。これ、言っているのかなあ……………？　あの子たちのプライベートに関わることだし……。うう〜ん……………」

珍しいわね。リンちゃん、本気で悩んでるわ……………。

こんなこと言ったら失礼だけど、この子がこんな真剣な表情で悩んでる姿なんて初めて見た気がするわ。

「別にいいわよ、リンちゃん。そんな無理に話そうとしなくても。それに、これは私の問題なんだから……。あとは私だけでなんとかしてみせるわ！」

でも、私はもうこれ以上、こんな話はしたくなかった。
だから無理矢理にでも話を終わらせようとしたんだけど……。

「……。あのさ、さわちゃん」

「何？」

「さっきも言ったけど……石塚って大の先生嫌いなのね？ それもただ先生っただけで相手の性格とか関係なしに嫌ってるからさ。さわちゃんから話を振ろうとしても無駄だと思うよ？」

「えっ？ そ、そんなこと言われても」

「しょうがないじゃないですか、事実なんだし……。それとも、あれですか？ 石塚と話をするために何か秘策でもあるんですか？ 正直、何しても無駄だと思いますけど……」

私は途端に嫌な気持ちになった。

私はただ、皆に余計な心配をかけたくないだけなのに、なんでこの子はいちいち、そんな人の気持ちを踏みにじるようなことを言うんだろうって。

なんだか無性にイライラしてきたわ。

それでもリンちゃんの口は止まらない。

「だいたいさあ、あいつ、先生に対しては挨拶はおろか、目すら合わせようとしないんですよ？ さわちゃん1人じゃ相手にならないよ？ 文字通り眼中にないって感じ？ おまけに見てもらえば分かると思いますけど、あいつ不良じゃないですか？ 何の考えもなし

に気安く声かけたら、逆に火に油注ぐような結果にしかありませんよ？ 下手すりゃ暴力沙汰に」

「だったら、どうすればいいのよっ!!」

気付いた時には、私はリンちゃんに大声で怒鳴っていた。

そして、自分の叫び声に驚いた私は急激に怒りが萎しぼんで、代わりに身が縮むような恥ずかしさが一気にこみ上げてきたわ……。

「い、ごめん……急に怒鳴っちゃって……」

「いや、あんな無神経にズケズケと言われたら怒りたくなる気持ちも分かりますよ。ったく……ほんと、リンリンって人を怒らせるのがうまいよねえ……」

「ええっつ？ だつてえ」

「だつて」じゃないよ、まったく……」

純ちゃんの指摘に思わずうなだれるリンちゃん。

うなだれたまま、机の上にあるクッキーに手を伸ばす。

それを小さく一口かじった後、リンちゃんはすぐに顔を挙げて、再び私の方を向きなおした。

「でさあ、さわちゃん。どうすればいいかだけど」

ただ、その時には既に何事もなかったかのようにケロツとしていたから、その切り替えの早さに私は思わずビックリしちゃったわ。

「……えっ!?! だ、だから良いわよ、そんなっ……無理に話さな

くても！」

「まあ、聞くだけ聞いてよ。えっとね……」

リンちゃんは手にしてるクッキーを一気に頬張り、それを流し込むようにお茶を口に含んだ。

それから少しだけ間を置いてから、三度、みたひ私の方を向きなおして語り始めたわ。

「まず、いきなり石塚と話そうとするよりも、先に夢と仲良くなっておいた方が良いでしょう」

「夢って……松本さんのこと？」

「そうっ！ あの子、石塚と違って来るものは拒まないタイプだし、何より素直で優しいからね。味方につけておいて損はないですよ？ 少なくとも、いきなり石塚と話そうとするよりかはよっぽど話しやすいと思いますし」

「あ、あのお……リンリン先輩？」

「ん？ 何？ 瞳」

「でも、その……松本さんってちょっと人見知りか激し過ぎませんか？ そもそも今回の事態は松本さんが私たちにいじめられてると石塚さんが勘違いしたことから起こったわけですし。だから、いきなり松本さんと話をするのも難しいんじゃないかなって思ったんですけど……」

「ああ……。確かにあの子、ちょっと対人恐怖症の気があるから

ねえ。ん〜………………。そういやさ、そもそもどうしてそんな状況になったわけ？ できれば、もう少し詳しく教えてくれない？」

「はい、分かりました……………」

瞳ちゃんは、今回起こった事件の一部始終をリンちゃんたちに改めて説明してあげた。

瞳ちゃんが松本さんに声をかけたことがきっかけで石塚さんと喧嘩になってしまい、さらに私が石塚さんに殴られそうになる事態にまで発展してしまったこと。

それから一度、石塚さんたちとなんとか和解したものの、石塚さんが私に対して言った言葉が原因で、今度は瞳ちゃんたちが怒ってしまったこと。

そして、石塚さんたちと再びこじれてしまい、未解決のまま、今に至ってしまったこと……………。

「ふう〜ん……………。なるほどねえ……………」

瞳ちゃんの説明を聞き終わって、リンちゃんは眉間にしわを寄せながら、再び腕を組んで考えるポーズをとった。

「瞳さあ……………。そもそも夢になんて言って話しかけたわけ？」

「あ、はい。ええっと……………。なんだか全体的にぼんやりしていたから体調悪いのかなって思ってた声をかけたんですけど……………。で、しばらくしたら私の友達2人も私たちの方に駆け寄ってきたんですけど、そうしたら松本さんが俯いちゃって」

「ああ、それだわ」

「えっ？ 何がですか？」

「夢が怖がった原因よ。あの子、人一倍人見知りが激しいって、さつき瞳も言ってたでしょ？ 見知らぬ集団に話しかけられたりなんかしたら、そりゃ怖がるに決まってるわよ。……それで？ それからどうなったの？ 夢に怒っちゃったって言ってたけど」

「はい……2回ほど怒っちゃいました……。最初は私の友達が『黙ってないでなんとか言え』って言って、それから……。すみません、私も松本さんに怒っちゃいました。松本さんが帰る直前に」

「帰る直前！？ それで！？ その後どうなったの！？」

「石塚さんに呼ばれて……。その……。逃げるように帰っちゃいました……。」

「はあ……。そうなの……。それはちょっとまずいかもしれないわね……。下手したら明日は学校来ないかもしれないわよ、夢」

リンちゃんは不快そうな表情をしながら、吐き捨てるようにそう言った。

「うう……。すみません……」

一方、瞳ちゃんは明らかに罪悪感を感じているようで、今にも泣きだしそうな顔をしていたわ。

そのせいで音楽室の雰囲気はまた、さらに重いものになってしまったの……。

「あのさ、リンちゃん。言っちゃ悪いんだけど……そういつ言い方はないんじゃない？」

そんな2人の姿を見ながら、憂ちゃんが渋い表情をしながらリンちゃんに言った。

「え？ 何が？」

「何がって、その態度よ。まるで悪いことをした人みたいに瞳ちゃんのことを問い詰めてさ、見えて可哀想だよ……。瞳ちゃんが怒ったのだからって、ちゃんと理由があるんでしょ？」

「……は？」

憂ちゃんの指摘にきよとんとしたリンちゃんは、そのまま瞳ちゃんの方に視線を移した。

すると、途端に何かに気付いたようで、その顔はすぐに申し訳なさそうな表情に変わったわ。

「あぁっ、ごめんね！ 別に瞳のことを悪く言ったわけじゃないのよ！？ ただ、夢のことが心配になっただけでさぁ！ いや、本当に悪気はなかったのよ！ ごめんね、瞳！」

「いや、いいんですよ……。それに、松本さんを巻き添えにしちゃったのは事実ですし……」

「まあまあ、状況が状況なだけにしょうがないって！ それに一番悪いのは石塚なんだからさぁ。そんなに自分を責めちゃ駄目よっ！
ねっ？」

リンちゃんはそう言うと、苦笑いを浮かべながら瞳ちゃんの頭をポンポンと撫でてあげた。

「はははっ……はぁ……。とは言うものの、これはちょっとフオロ
ーしてあげた方がいいかもしれないわね」

「えっ？ それは……松本さんに対してってことですか？」

「うん」

リンちゃんはすぐに頷いた。

「もちろん、それもそうなんだけど……さわちゃんや瞳たちの今後にも関わるからだからね。万が一、今日のことの原因で夢が登校拒否になったりなんかしたら、瞳だって嫌でしょ？」

「はい、それはもちろん……」

「そうになると、石塚が瞳たちに何やらかすか分かったもんじやないからね……。ましてや、さわちゃんと石塚が分かり合うことなんてそれこそ夢物語になっちゃうし。そんなの誰にとっても良い話じゃないじゃない。……ですよね、先生？」

そうね。確かにリンちゃんの言うとおりだね。

教室から退室する直前の松本さんは、最初に私たちに話しかけられたとき以上に私たちのことを怖がっていた。

おまけに石塚さんのことで瞳ちゃんたちに問い詰められて、その結果、逃げるように帰っていったからね。

明日以降にも尾を引きかねない、最悪の別れ方だったと思うわ…

…。

松本さんの性格を考えると……。

……なるほど。

確かにリンちゃんの言うとおり、これがきっかけでズルズルと不登校になる危険性も否定はできないわね。

もしそうだったら……それは私の責任ね。

石塚さんもきつと、今以上に私のことを恨むでしょうね……。

そんなことをあれこれ考えているうちに突然、リンちゃんが席を立った。

「ごめん、梓。私、今日はもう帰っていいかな？　今から夢の様子を見に行きたいんだけど……」

「え……？　うん、わかった。そういうことなら仕方ないよね」

「ありがとう。あと、ついでに瞳も借りてって良い？」

「え？　私もですか？」

「うん。だって瞳、夢に怒っちゃったんでしょ？　今後のことを考えたら、瞳にも来てもらった方が良くないかなって思うの。それとも、まだ夢に対して怒ってる？」

「いえ、別に……。私がムカついたのは石塚さんの態度だけで、松本さんには特に怒ってないです」

「そっか……。それじゃ悪いんだけど夢にもそのこと伝えてさ、フオローしてあげてくれない？ そうすりゃ少なくとも夢が学校に行けなくなるような事態は防げると思うからさ。どう？」

「は、はい……。わかりました！」

「あつ！ ねえ、リンちゃん」

私は大きな声でリンちゃんのことを呼びとめた。

「その……。私も一緒に行って良いかしら？ できれば私も松本さんとお話がしたいんだけど……」

「ああ……。どうしよう……。んんん……。ごめんなさいっ！ 気持ちはわかりますけど、先生まで来ちゃうと夢が緊張しちゃうから……。その、今日のところは私たちだけで行きたいんですけど……」

本気で悩んでくれてたけど、結局、リンちゃんは申し訳なさそうに私の申し出を断ったわ。

「……。あつ！ だったら夢に何か伝えたいことあったら、代わりに伝えておきますよ！ どうします？」

「え？ そうね、それじゃあ……。『松本さんは何も悪くないから、今日のことは早く忘れて、明日以降も変わらず元気な姿を見せてね』って伝えてくれる？」

「はい、了解でえっす！ それじゃ、梓。悪いけど、私たちはこれでお暇するわね。さわちゃんのこともちゃんとフオローしとくか

らさー！ 任せといて」

そう言うと、リンちゃんは片目で軽くウインクをした。
それからすぐ、瞳ちゃんを連れて音楽室から出て行ったわ。

*

さて、その後の軽音部はというと、リンちゃんと瞳ちゃんが帰ったということで各自、自由練習になったわ。

純ちゃんは梓ちゃんと話しながらベースをツインベース仕様に
するアレンジを考えていたし、憂ちゃんも梓ちゃんに協力してもらい
ながら音楽室のピアノを使って個人練習をしていたわ。

梓ちゃん、地味に大忙しだったわね……。

*

その日の夜。

リンちゃんから電話がきたわ。

彼女曰く、その後、無事に松本さんとお話することができた
みたい。

最初は松本さん、瞳ちゃんの顔を見た途端にとっても怖がったみたいだったんだけど、緊張したのは最初だけで、その後はリンちゃんの手介もあって、お互いに落ち着いてお話をすることができたらいいわ。

おまけに最後の方では、お互いの電話番号を交換するほどに打ち解けることができたんだとか……。

それを聞いて、私はホツとしたわ。

それと、松本さんから私宛てに伝言を預かったみたいで、松本さんはこう言っていたそうよ。

『今日は空ちゃんのおかげで先生にまで迷惑をかけてごめんなさい』

はぁ……。

だから松本さんが謝る必要なんて、これっぽっちもないのになぁ……。

聞いた瞬間、私は思わず微笑に近い苦笑いを浮かべたわ。

そして、それはなんとか松本さんとの心の距離を縮めたいなって心に決めた瞬間でもあったの……。

よしっ、明日からまた頑張ってみよう。

まずは頑張って松本さんとお話できるきっかけを作らないとね。

#2 生徒と先生！（A面）？（後書き）

やっと2話のA面が終わりました。

さわちゃん視線でストーリーを展開するという、「けいおん！」小説でも珍しい書き方をしましたが、いかがでしたでしょうか？

次回からは2話B面に移ります。

それに伴いまして、語り手も変わりますのでご了承ください。
話の中心は変わらずさわちゃんですけどね！

そして更新ですが、「フラミンゴ」との兼ね合いもあるので、また少し時間をおくことになるかもしれません。

ごめんなさい。

なるべく、早く更新できるように頑張ります。

それでは、また次回お会いしましょう。

#2 生徒と先生！（B面）？（前書き）

今回の語り手：松本夢

数人のクラスメートと担任を相手に大喧嘩をしてしまった石塚空。そして、その親友の喧嘩に巻き込まれてしまった松本夢。

林鈴の助けにより、幸いにもクラスメートの1人、森江瞳とは仲直りできた夢でしたが、それでも空と瞳たちの間に立たされている状況に変わりはありません。

そんな板挟み状態の中、夢は以前から抱えている、自身の悩みごとにもその小さな体で果敢にぶつかっていくのですが……。

#2 生徒と先生！（B面）？

どうも皆さん、ご無沙汰してます。松本夢です。

4月も半ばを過ぎ、今年の桜も既に散ってしまいましたが、皆さんはいかがお過ごしでしょうか？

私は……いろいろと大変です。

というのも実は昨日、私の親友がクラスメート3人と私たちの担任の先生を相手に大喧嘩をしてみました。

原因は私がそのクラスメート達にいじめられてると親友が勘違いしたことなんです、さらにその場で親友が先生に対してひどいことを言ってしまった……。

それで結局、昨日はそのまま喧嘩別れしてしまったのですが、おかげで今日、学校に行くのが怖くて仕方ありませんでした。

幸いなことに昨日のうちに幼馴染の先輩の仲介でクラスメートの1人とお話しすることができて、そして、そのクラスメートとはお友達になることができたんですけど、それでも新しくお友達になったクラスメートは私の親友を許してくれる気まではさらさらないもので……。

だから私、今、板挟み状態なんです。

親友と新しい友達が大喧嘩している間に立たされて、どちらの言い分も聞かされる状態。

新しい友達は「石塚さんが先生に言った言葉はどうしても許せない。松本さんには悪いけど、それは変わらないわ」って言ってました。

一方、親友は親友で「先公なんてこの世で一番信用できない人種だ。信じたって、ろくなことねえよ」って言って、その意見を捻じ曲げてくれる気配はまったくありません。

……あの、この状況って一見すると、私の親友が先生に頭を下げれば、すぐにこの場は治まるんじゃないかと考えられる方もいるんじゃないでしょうか。

いや、別によく考えなくたって、実際そうすれば、すぐにこの問題は解決することができるとは思います。

だけど親友は決して頭を下げようとはしませんし、親友が頭を下げようとする理由も実は私、知ってるんです。

だって私の親友……いや、空ちゃんは、昔……。

*

さてさて。ところ変わって、今は放課後。

実は私、さっきお話したこと以外にも悩んでいる事があります。それは……。

「ううっ……。緊張するなあ……」

今まで歩いたことのない知らない廊下。

ドアの付近に貼られている、いろいろな部活の名前が記された貼り紙。

そのひとつひとつを眺めながら、私は目的の部活がある教室を探しています。

もう、お分かりでしょうか？

私は今、クラブ見学をするために1人で行動しているところなんです。

本当は空ちゃんと一緒に軽音部に参加するのが1番理想的なんですけど、新歓ライブを見て以来、空ちゃんは軽音部に入部する意思を全くなくしてしまっただけ……。

ちなみに軽音部には幼馴染のリンリン先輩と、それに昨日友達になったばかりの森江さんもいるみたいなので、それで一瞬、入部してもいいかって考えたこともあったんですけど、そこに空ちゃんがないのはやっぱり寂しいですし、さらに顧問の先生が昨日、私達との間でひと悶着があった山中先生みたいなので、軽音部にはなんだか顔が出しづらくって……。

なので、恐らく軽音部に入部することはないと思います。リンリン先輩にはすぐ来てほしいって言われましたけど。

おまけに空ちゃんには「夢もそろそろあたしや鈴さん（リンリン先輩の事です）以外の人間にも慣れたほうがいいんじゃないか？」って言われちゃってるし……。

人見知りに関しては私も悩んでいるので、それならいつそのこと軽音部以外の部活にでも入ってみようかなって思ってるんです。

あの……やっぱり変ですよ？

”先輩や新しい友達がいるうえにやりたいことがやれるのなら、そのまま軽音部に入った方がやりやすいんじゃないか？”って思いませんか？

”軽音部にだって初対面の人はいるんだし、それに入ったからって空ちゃんやバンドができなくなるわけじゃないんだから、練習のつもりで気楽に参加すればいいんじゃない？”って思いますよね？

……はい、私もそう思います。というより、実はリンリン先輩にもそう言われちゃいました。

でも、せっかくだから、こういう機会を利用して知り合いの誰もいないところに飛び込んでみた方が挑戦になるなって、そう思ったんです。

だってそうでもしなきゃ、いつまで経っても仲の良い人たちに甘えちゃうんじゃないかって……それじゃ駄目だって、そう思ったんですっ！

ですから、お願いです！

私にも1人で頑張らせてくださいっ！！

………すみません、取り乱しちゃいました………。

1人でヒステリー起こしちゃって馬鹿みたいだな、私………。

*

「………あった。ここかあ………」

私はある教室の前までたどり着きました。

ドアについてる窓から光が一切漏れてないことから、室内が真っ暗なのが分かります。

そして、私はドアの付近に貼られている、部活の名前が記された貼り紙を確認しました……。

……うん。どうやら、ここで間違いないようです。

私は覚悟を決め、早速教室のドアのノブを回……。

「……っ！」

……せませんでした。

図らずも、ドアから自然と離れてしまう私。

右手の手のひらを見ると、汗をびっしょりとかいているのが分かりました。

その上、視覚的に確認することができると、その手は小刻みに震えています。

認めたくないですけど、自分が緊張しているのを自分の体に嫌というほど見せつけられてしまいました。

いや……。実際、怖いです。

思い起こせば、空ちゃんもリンリン先輩もない空間に1人で飛び込むのは随分と久しぶりかもしれせん。

いったいどんな反応されるんだろう？

私のこと、受け入れてくれるのかな？
それに……。

それに私の髪の色について、嫌なこと言ってきたりしないかな？

考えなきゃ良いのに、次から次へと自分にとって嫌な想像ばかり
が頭に浮かんで離れてくれません。

考えるほどに恐怖心が増えてきて、おかげで私は徐々に教室の扉
の前から遠ざかっていくのでした……。

うろうう……………怖い……………怖いよ……………。

まずはドアを開けなきゃ何も始まらない。

そんなことは分かっているのに……………怖い……………。

私はしばらく教室の前の廊下をうろろろとしていて、気がついた
時には教室から遠く離れた階段の付近にまで来てしまいました。

はぁ〜あ……………。なんで私、こんなにオドオドしてるんだろう？

そんなことばかりが頭をよぎり、ただ時間だけが過ぎていきます
……………。

どろじしどろじし……………。もう帰りたいよう……………。

「あら？ 松本さん？」

ビクッ！

いきなり名前を呼ばれたことにビクッして、私は思わず私を呼ぶ声が聞こえた方を向きました。

そこにいたのは……山中先生。

先ほどお話しした軽音部の顧問の先生で、私のクラスの担任でもある先生です。

美人で背が高く、メタルフレームの眼鏡が知的な雰囲気醸し出してる、とってもおしとやかで優しい先生なんですよ。

……って思ってたのも、おとしまでの話なんですけどね。

さっきも言ったとおり、昨日、空ちゃんが先生に対して暴言を吐いて以来、先生とはまともにお話しをするどころか顔すら合わせられませんでした。

先生は「今日のことは気にしないでいい」って言ってたって昨日、リンリン先輩から聴かされてはいますけど……それでもやっぱり、まずいことに変わりはありません。

当然、この時も私は先生の顔をまともに見ることができませんでした。

「あの……えっと……昨日はその、すいませんでした……」

息苦しい沈黙が続く中、私がかつとの思いでようやく絞り出した言葉は、情けない謝罪の言葉でした……。

「……もういいのよ、昨日の事は気にしないで。それより松本さん1人？ もう下校時刻は過ぎていくけど、こんなところで何をしているの？」

「あ、はい、えっと……」

私はこれからクラブ見学をしようとしている事を山中先生に話しました。

だけど、それと同時に緊張してなかなか教室のドアを開けることができないことも伝えちゃいました……。

「そう……。松本さんも頑張ってるのね」

「そんなことはありません。怖がってばかりで未だに見学できていませんし……」

「まあ、確かに1人でいきなり知らない環境に飛び込むのは勇気がいるわよね。一緒に見学してくれる子はいないの？ その……石塚さん、とか」

「石塚さんには先に帰ってもらいました。えっと、石塚さんにとっては興味のない部活でしたし、それに、いつまでも石塚さんに甘えてちゃ駄目だなって思ってる」

「甘える？ 一緒にクラブ見学に行くことが？」

「は、はい……」

「ん〜……そう、かしら？ 私はそうは思わないけどなあ……」

私の言葉を聞いて、先生は小さく首を傾げていました。私のしてることって、やっぱり変なのかな？

それから10秒程の沈黙が続いた後、先生が再び口を開きました。

「ねえ、松本さん。あなたの志は立派だと思っけど、いきなりハドルを上げ過ぎじゃないかしら？ 初めて見学に行く部活なら、最初は友達に付き添ってもらっても、別に問題はないと思っわよ？」

「えっ？ そっ、そうですか？」

「ええ。それにね、たとえ最初は付き添いを付けたとしても、最終的に入部を決めるのは松本さんの心次第でしょ？ だから、何も最初から無理して1人で頑張ろうとしなくてもいいんじゃないかなって先生は思っただけど」

「ううっ……。すみません……」

「そんなんっ、謝らないで？ 何も松本さんのしていることが悪いって言ってるわけじゃないんだから。むしろ、そうやって誰にも頼らずに頑張ろうとしているんだから、松本さんはえらいわよ。だからそんなに辛そうな顔をしないで？」

「は、はい……。すみません。あ、また謝っちゃった……。す、すいません、謝らなくて良いって言うてくれるのに……」

はあ……。言ってる傍からまた謝ってるよ、私……。

先生、きつと心の中で呆れてるんじゃないのかな？

そんなことを考えながら、私は恐る恐る顔を挙げて、先生の顔を見ました。

案の定、先生は困ったような笑顔を浮かべながら、私の顔を見つめていました。

思わず私もその笑顔に釣られて、愛想笑いを浮かべてしまいました。

ただ、その顔を見られるのがすごく恥ずかしかったので、すぐに顔を伏せてしまったんですけど……。

そんな空気に耐えられずにドギマギしている私に対して、先生はいつもの優しい声色で私に言いました。

「松本さん……。もしよかったら、一緒に付き添ってあげようか？
先生で良ければ力になるわよ？」

先生のその言葉を聴いて、私は思わず顔を挙げて先生の顔を見ました。

そして、図らずも目が合ってしまった……。……。

山中先生は相変わらず困ったような、だけど穏やかで優しい表情をしていました。

その表情はどこかにはかんでいるようで、私のことを気遣ってくれている気持ちが微妙に伝わってくるようでした。

「え、ええっと、あ、ありがとうございます……。で、でも、その……」

この時、私はふたつの感情を抱いていました。

ひとつは、わざわざ空ちゃんに先に帰ってもらってまで1人で行くことと決心したのに、先生に付き添ってもらったら意味がないんじゃないかっていう空ちゃんに対する申し訳ない気持ち。

そして、もうひとつは……。先生の心遣いが単純に嬉しかったって

いう気持ちです。

「う、うう〜んと……」

おかげでこの時、私はどうしたらいいのか、すごく迷いました。昨日の今日ですし、先生の意外な申し出に戸惑ったのも事実ですが、でも悪く思わなかったのもまた、事実でした。

でも、だからと言って先生の言葉に素直に甘えちゃって、もし、それが空ちゃんにばれちゃったりなんかしたら、空ちゃん、なんて言うだろう？

「……ふう。そうよね、やっぱり恥ずかしいわよね。ごめんね、今、言ったことは気にしないでちょうだい」

あっ！ ちつ、違うんです、先生……。

別に先生についてきてもらうのが嫌ってわけじゃなくて……その……。

私があればと悩んでいる間に、山中先生に謝られちゃいました……。苦笑いを浮かべた、優しい表情のままです……。

どうしよう、また余計な気を使わせちゃった……。私は微かな罪悪感に苛こまれました。

「……？ 松本さん？」

はあ、あ、せっかく先生が好意的に接してくれたのに、それを断るなんて、なんだか申し訳ないよ……。。

でも先生と仲良くしたら、空ちゃん怒らないかなあ？ 先生のこと、すごく嫌ってるし……。

「……松本さん？」

あ、でも、だからと言って1人で見学に行くのも、やっぱり怖いしなあ……。

でもでも、1人で行かなきゃ帰ってもらった意味がないし、そもそも先生に来てもらうくらいなら、最初から空ちゃんに付き添ってもらえばよかったのって話になるし……。

でも、なかなか1人で行く勇気が出ないのも事実だし……。

ああ~~~~もお~~~~っ!! 私、どうすればいいんだろ

「松本さん……松本さんっ!!」

痛いっ!

突然、山中先生に両肩を思いつき叩かれ……いや、勢いよく両手で両肩を掴まれました。

「……松本さん、顔を挙げてちょうだい」

「は、はい……」

山中先生の静かな、だけど重みを含んだ声に促されて、私は言われた通りに顔を挙げました。

先生の表情は先ほどまでの困った笑顔とは違う、厳しい目つきの

もの変わっていました。

どうしよう……。私、先生の事、怒らせちゃった……。

「いい？ はっきり言っつわよ？」

え？ な、何を言われるんだろう……？

「こんなことをあなたに言うのも酷だと思っけど……あなたは自分に対して自信がなさすぎるわ。そんな状態のまま見学に行こうとしたって、何も伝えることができずに終わっちゃっうんじゃないかしら？」

先生の口から出たのは、私にとって非常に耳が痛い言葉でした。

私は、まるで心の奥底に強烈なパンチでも食らったかのようなシヨックを受けました……。

「それにね、松本さん。人見知りを何とかしたいっていうあなたの気持ちは立派なものだと思うけど、残念だけど、あなたを受け入れる側の子たちがその気持ちを汲み取ってくれるとは限らないわよ。受け入れる側だって自分たちの部活に興味がある子に来てもらいたいはずだから、そこにあなただみために何も伝えられない子が来ても相手は困るだけよ。はっきり言っつとね……迷惑なのよ。そんな子が来ても。分かる？」

厳しい言葉が、次々と私に降り注ぎます。

でも先生の言葉はどれも正論で、そのひとつひとつが私の心を容赦なく突き刺していきました。

私の心は、その重い言葉の数々を無傷で受け止めることができず

にズタズタになって、そして……。

「うっ、うっ……。ごめんなさい、ごめんなさい……。私、迷惑な子でごめんなさい……。うっ、ひっく……」

緊張に耐え切れなくなり、私は遂に泣きだしてしまいました。

先生に言われた厳しい言葉を受け止められず、度重なる我慢の限界に耐えられなくなって……。

新しい世界への1歩が踏み出せず、自信も勇気も持てずにオドオドしてばかりいる自分のふがいなさに腹を立てながら……。

そんな情けなく泣きじゃくる私に対して、山中先生はその場にしゃがみこむと「……ごめんね、きついことを言って。本当にごめんね……」と言いながら、手にしたハンカチで私の涙を拭ってくれました。

その表情はいつもの優しいものに戻っていて、私の涙を拭いながら、私の頭を優しく撫でてくれました。

「ほら、すっかりしなさい！ 確かに私は今、松本さんに対して厳しい事を言ったわ。でも、それは本当にやりたいことも分からず、伝えたいことも何もない状態でなんとなく行った場合の話よ。でも松本さんのことだから、きっとそんなことはないと先生は思ってるわ。だって、もしそうなら、わざわざ1人で怖い思いをしてまでクラブ見学に行こうなんてしないはずでしょ？ ねっ、そうでしょ？」

「ひゃ……ひゃい……」

私は泣きながら、先生の言葉に頷きました。

「それなら大丈夫よ。やりたいことがあるのなら、それを頑張って伝えようと努力すればいいのよ。たとえうまく伝えられなくたって、伝えたいって気持ちがあれば、相手もきつと松本さんの意思を汲み取ってくれるわ。それに、あなたは確かにおとなしいけれど、その分、クラスの中でも飛びぬけて真面目で優しい子じゃない。あなたみたいな子ならきつと、どの部でも喜んで歓迎してくれるわ！」

「すん、すん……ほんと……ですか……？」

「ええ、本当よ。だから……もう泣かないで？ いつまでも、そんな暗い表情のまま過ごしてたらダメよっ！ ほらっ、もっと笑ってごらんなさい！」

「えっ？ そんな……急に言われても、そんなすぐには笑えませんですよ……」

「何言ってるの！ そんなに綺麗で可愛い顔してるのに、泣き顔で濡らさだけなんてもつたいないわよ！」

「えっ？」

「そつよっ！ そもそもあなた、とつても美人じゃない！ 髪もキラキラしてて綺麗だし、お肌も白くて赤ちゃんみたいに瑞々しいし！ はつきり言って羨まし過ぎるくらいだわっ！」

「えっ？ あ、あの」

「ねえっ！ 松本さんは普段、どんなお手入れしているの！？ よかったら教えてくれないかしらっ！ あっ、それと、もしよかった

身長とスリーサイズも教えてくれないかしらっ!? 今度作る服の参考に」

「えっ? ……ええっ!?!」

……あれ? 山中先生つて、こんなキャラだったっけ?

なんだが、先生の鼻息がどんどん荒くなってきてる気がするんだけど……。

いつものお淑やかな姿とのギャップに戸惑いを感じた私はいつの間にか泣くことも忘れ、ただ、その勢いに圧倒されちゃいました……。

「あの……先生? 先生っ!?!」

「……はっ!」

「……? あ、あの……」

「やだっ、私ったら……。何を取り乱してるのかしら、ほほほ……。ごめんなさい、松本さん。今、言ったことは全部忘れてちょうだい……」

山中先生はそう言いながら静かに立ち上がると、顔を赤らめながら、バツが悪そうに笑っていました。

なんて言うか、今の先生すごかったな……。

山中先生って私の中ではお淑やかで優しいイメージしかなかったんですけど、ひょっとして、本当はそうでもないのかな?

やがて、山中先生は恥ずかしそうに小さく咳払いをすると、さっきまでと違う明るい笑顔を浮かべながら、力強い口調で、

「まあ、とにかくっ！ 私が言いたいのは松本さんに足りないのは自信だけってことよ！ あんまりネガティブに考えないで1度、勇気を出して飛び込んでみなさい！ 大丈夫！ 実際に飛び込んで見たら、意外とすんなり溶け込めるものよ」

こう言って、私のことを励ましてくれました。

「は、はい、ありがとうございます……。あ、でも」

「ん？ 何？ どうしたの？」

「私、髪が……。その……」

「……あつ。そういえば軽音部で林さんから聴いたわよ。あなた、髪の色のことを気にしてるんですって？」

「えっ！？ あつ、はい……。その、何て言うか……。えっと……はい……」

そうだった、そういえば先生って何気にリンリン先輩と面識があるんだっただ……。。

ていうかリンリン先輩、なんで先生にそんなこと教えてるんですか！？

何はともあれ、いきなりコンプレックスをズバリと指摘されて、どうリアクションを取ったらいいのか散々迷った私でしたが、結局、特に何かをするわけでもなく、素直に小さく頷いたのでした……。

「……………松本さん。ちょっとだけ、私の話を聞いてくれる？」

「え？」

「松本さんみたいな体のコンプレックスじゃないし、こんなことであなたの気が晴れるかはわからないけど……………。あなたにだけは私の秘密の過去を教えてあげるわ。聴きたい？」

「えっ？ は、はい、何ですか？」

いきなりの先生の言葉に訳がわからず、私は特に何も考えないまま返事をしてしまいました。

「それじゃ、ちょっとだけ耳を貸してくれる？」

んん？

私は頭に”？（はてな）”を浮かべたまま、言われるままに先生の方に耳を向けました。

「実は私、昔ね……………」

そして、山中先生は自分の過去について、私の耳元に囁くように、そっと教えてくれました。

その内容は……………。

……………ごめんなさい、先生に絶対に内緒にしてほしいって固く言われちゃったので教えることはできません。

先生にとっては絶対に他の人、特に生徒には知られたくないこと

だそうなので、その、すいません。

そして、それを教えてもらった私の反応はと言つと……。

「えっ!? そうなんですか!? 全然、今の姿からは想像がつかないんですけど……」

「そりゃ、そうじゃなきゃ困るわよ。だって、私にとっては誰にも知られたくない過去なんだし……」

そう言いながら、先生は恥ずかしそうに周囲をキョロキョロと見回していました。

その時のよそよそしい様子から察するに、どうやら本当に周りの人たちには知られたくない秘密のようです。

「せ、先生も大変なんですね……。あ、でもよっぱどボ口を出さない限りはバレないでしょうから、ちよっと気をつければ大丈夫」

「それが一部の生徒にはバレちゃったのよ! 特に去年まで軽音部にいた子たち……。あの子たちには酷い目にあつたわ……。特に部長だった子には!」

山中先生はちよっぴり涙声になりながら、私に向かって叫ぶように言いました。

予想もしていなかった意外な振舞いに再び戸惑いながら、それでも私は山中先生の話に耳を傾けるのでした……。

「私ね、実は今、軽音部以外に吹奏楽部の顧問も掛け持ちしているんだけど、元々は吹奏楽部の顧問だけで軽音部の顧問まで掛け持ちする気はなかったの。でも、3年前のある日にね……」

「え？ どうしたんですか？」

「……見られちゃったのよ。先生の昔の写真が。当時の軽音部の子たちにね……」

「えっ！？ それって、その、先生が昔、軽音部で」

「言わないでっ！ ……そうよ、さっき松本さんに話した、昔の姿をありのままに写した写真がね、どういっわけか音楽室に残ってたらしいの。それがその子たちに見つかっちゃったのよ」

「そ……それで、どうなっただんですか？」

「……脅されたわ、部長の子に。『バラされなくなかったら顧問やっってください』って言われてね」

先生はなぜか、妙に穏やかな笑顔でこう言いました。

「……それで……なっただんですか？」

「なっただわ」

……。

「……………ひびく」

少しの沈黙の後、私は素直な感想をぽつりと呟きました。

そして、それを皮切りに先生は今年卒業していった軽音部の先輩たちに対する愚痴を次から次へとこぼし始めました。

それからしばらくの間、私は延々と先生の苦労話を聞かされる羽目になってしまったのです……。

いつも優しい山中先生にも、こんな一面があったんだ……。

思っていたよりもずっと子供っぽい人だったっていうか、意外と可愛い一面が隠されていたっていうか……。

当たり前だけど、先生も人間なんだなあ……。

……くすつ。なんか、可愛い人……。くすくす。

「……あれえ？ 松本さん？ 私、なんかおかしなこと言ったかしらっ。」

「え？ ……あ！ ごめんなさい！ やだ、私ったら、先生の苦労話で笑っちゃうなんて……。」

「ううん、良いのよ。私の方こそ、なんだか愚痴ばかり言っただけで、でも、松本さんのおかげで大分すつきりしちゃったわ。ありがとね、松本さん」

「え？ そんな、私、ただ話を聞いてただけですから……。」

「ふふつ。それより松本さん。あなた、やっぱり笑った方が可愛いわよ。さっき、すごく良い表情してたわよ？」

えっ？

先生にそう言われ、私は反射的に両手で自分の両頬を押さえました。

そう言われてみれば……なんだかさつきまでと比べて、顔に入っていた無駄な力が抜けているような気がしました。

「……でね、松本さん。さっきの話に戻るんだけど」

先生は小さく笑うと、いつの間にか、またいつもの穏やかで優しい表情に戻っていました。

「確かに私も自分の見せたくない一面を見られて、その上、軽音部とは関係のない子にまでバレちゃったりもしたんだけど、不思議とみんな、そんな私を受け入れてくれたのよ。私が思っていたよりもずっと、ね」

「受け入れてくれた……」

「そう。だからね、松本さん。あなたが髪の色に引け目を感じていることは分かるわ。でもね、人と通じる上では外見以上に中身の方が大切よ。確かに最初だけは外見が判断基準になるものかもしれない。でも、それはあくまで最初だけよ。コミュニケーションを取るうちに、次第に相手はあなたの中身を見ようとするはずよ。松本さんだって、相手と話をするときには自然と相手の中身を見ているんじゃないかしら？ どう？」

「私も自然と中身を見ている……。はい、そうかもしれません……」

この時、私はなぜか空ちゃん顔を思い出していました。

「そうでしょ？ だから難しいかもしれないけど、あまり髪のこと
は考えないようにしなさい。もし、それで相手が変わることを言うよ
うであれば、そんな子のいる部活には入らなければ良いだけの話よ。
いつそのこと髪の色が白いことを逆手にとって、自分が相手をテス
トするくらいの気持ちで挑んでみたら、どうかしら？」

「私が相手をテストする……ですか……？ そんな……それってな
んか、悪くないですか？」

「いいのよ。そんなに難しく考えないで。むしろ、何も考えずに気
楽な気持ちで臨んでみるくらいでちょうどいいのよ！ ほら、そう
言ってるうちに、また表情が暗くなってるわよ！」

励まされるや否や、先生に押されるように背中を叩かれました。
別に痛くはなかったですけど、何て言うか、先生にこんな感じで
背中を叩かれてる状況に改めてビックリしちゃいました。

でも、先生の意外な一面を見られたおかげでしょうか。
先生とお話する前と比べて、いつの間にか不思議とリラックス
できているのが自分でも分かりました。

*

「あ、着きました。ここです。……先生？」

(あゝ……。ここ、なんだあ……。確かにこの子らしいと言えば、らしいのかもしれないけど……)

結局、山中先生は私がこれから見学に行く部活の部室の前まで付き添ってくれました。

でも先生が付き添ってくれるのは部室の前までで、ここから先は私1人で行かなければなりません。

ただ、さっきまでと違って、私の心の中にあつた恐怖心は幾分か和らいでいます。

今なら、行けそうです。

ただ……。山中先生が入口の前でなにやらぼろぼろとしながら部室に貼られた貼り紙を眺めているのがちょっとだけ気になったんですけど。

「あの……。先生っ？」

「えっ！？ あっ、ああ、ごめんなさい！」

「どうかしたんですか？」

「うっん、なんでもないわ！」

「……。？」

私は小さく首を傾げました。

「そ、それより松本さん、大丈夫？ なんとか1人で行けそうっ！？」

「はい、大丈夫です。やつぱりまだちょっとだけ怖いですけど、先生のおかげで大分リラックスできましたし……。はい、行けます！」

「そう……。それじゃ、私にできることはここまでかな。あとは頑張るのよ、松本さん！」

「はいっ！　ここまでついてきてもらって、ありがとうございまして！」

そう言って、私は先生に深々とお辞儀をしました。

それから私は軽く深呼吸をして、少しだけ間を置いてから、勇気を出して目の前の扉を軽くノックをしました。

すると、すぐに中から先輩らしき人が扉を開けてくれて、私が見学希望の意思を伝えると、その先輩はすぐに私を部室の中へと案内してくれました。

私はその先輩の後をついていき、導かれるように部室の中へと入っていきました。

その際、すぐに扉を閉めたことと、その前に入口までついてきてくれた山中先生に軽く頭を下げたことを付け加えておきます。

*

「ふう……」

私が部室に入るのを見届けた直後、小さくため息をついた山中先生。

（これでよかった……のかな？ 最後は松本さん、笑顔で挨拶してくれまし。これを機にあの子とも仲良くなればいいんだけど……）

（……はあっ。それにしても、あの子、やっぱりお人形さんみたいで可愛かったわあ……。頼んだら私の作った衣装、着てくれないかしら？ ……ああっ！ きつとすごく似合うでしょうねえ！）

「うふふっ」

この時、山中先生がにやけた笑顔を浮かべながら一人で笑っていたことなんて、私には知る由もありませんでした……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2028t/>

そとばん！ Another Parallel World in “K-ON!!!” 【捏造第3期】

2011年10月22日04時21分発行